



案山子



2018年夏号

新潟大学文芸部

目次

◆お題作品『生』

- ・ 人間失敗 香月日向
- ・ 五月より 佐藤央弥
- ・ I'm glad to meet you. 守目冥人
- ・ 曼珠沙華 ユルング

◆通常作品

- ・ 確かなぬくもりに 笠原ざわ
- ・ 峠から見守るもの 笠原ざわ
- ・ 嵐の後に 佐藤央弥
- ・ 回顧録 炬燵 猫
- ・ 水底で見る夢 巴一
- ・ アンチ・デストロイヤー 佐久間佳雪
- ・ 現在進行形 メメント森
- ・ 深海の夢 メメント森
- ・ 清明 ユルング

・ A very merry Unbirthday to you!

大島治輔

・ つれづれの歌

山羊沢 優弥

・ 薄氷の上を行く

中村

・ 休日的一片

小川史夏

・ 異世界転生 ～前世はアレだったけど頑張ります！？～

アイスティー

・ スターチス・コーヒー

十文字

・ ジュクジュク

今畑鏡

・ 西奔東走

松本惇暉

第二十八回お題作品集

お題「生」

覚えているのは、人を殺したこと。

至極人間的な、憎しみによる殺人だ。獣は自らの生存と生殖を目的とした場合でしか殺さない。しかし私が人を殺したのは、食べ物を得るためでも、繁殖の障害になる他者を排除するためでもない。憎かったから、殺したくなるほど憎かったから殺した。

人間らしい「憎しみ」という感情を理由に、人間の特徴の一つである道具、この場合はロープを使って人を殺した。

動物としてのヒトの行動の一つとして人を殺した私は、その人間的行為によって「人でなし」となった。

感情で他の個体を殺す動物はヒトだけだ。でもそのヒト特有の行動をすれば「人でなし」となる。何という皮肉だろう。

ヒトらしい者は、人ではないということか。

ヒト、ホモ・サピエンス・サピエンス。ヒト科の動物。

人。社会と文明を持った知性体。

となると私は、ヒトの野性に従い、人の理性を捨てたのだろう。

私は人間をやめたのだ。ヒトという獣に過ぎない。

「あれ？ 忍じゃん。生きてたんだ」

小・中学時代の同級生の那奈と、偶然再会した。

私はできるだけ彼女に気づいていないようにした。正直二度と会いたくはないと思っていた。しかし向うはそんなことお構いなしだ。

「覚えてないの？ あたしだよ！ 小中と一緒にだった那奈だよ」

ああ、覚えているよ。忘れるわけがない。

那奈と初めて会ったのは小学五年の時だ。那奈たちの学校に県外から私が転校してきたのだ。

転校初日のことは今でもよく覚えている。

「皆さん。折口さんは溝切から転校してきました。大切なお友達を溝切エンザで亡くして、とても辛い思いをしてきました。折口さんが少しでも早く新しい生活になじめるよう、皆さん助けてあげてくださいね」

先生は私の気持ちを理解して（理解したつもりになって）そう話してくれた。大人の善意は時に子供を殺す。

日本初のバイオハザード・溝切エンザ。私が小学生の頃、新型インフルエンザのワクチン製造過程で、弱毒化に失敗したワクチンが流通してしまう事故が発生した。この事故と、それによって大流行した新型インフルエンザを指して、人々は「溝切エンザ」と呼ぶのだ。溝切エンザの患者数は市内だけで二万人を超え、その半数が命を落とした。あまりの事態に、中には自主的に溝切を離れる住民もいた。私の家族もそうだ。

そんなこんなで、先生にさっそく溝切から来たことをばらされてしまった私は、その後地獄の日々を送ることになる。

人生は地獄よりも地獄的であるとは、本当のようだ。

「おい！ ちゃんと消毒しろよ！」

冷たい。クラスの男子がこれでもかと私と、私の机とランドセルに消毒用アルコールをかけてくる。

「折口さん、これ書いて！」

クラスの女子がプロフィールシート（自己紹介カードみたいなもので小学生のころ流行った）を書くように勧めてくる。彼女たちは皆使い捨てマスクをしている。「ウィルス菌」を吸わないように。

「溝切エンザがうつるからあんまり近寄らないでよ」

「『ウィルス菌』がうつるから話さないようにしよう」

そうとでも言いたげな周囲の視線。実際影でそう言っている彼ら彼女らの口。

昼食の時はみんな私からできるだけ遠いところに座ろうとする。グループ活動の時はできるだけ話さないようにする。

「へえ、つまんな」

私の書いたプロフィールシートを見て、嘲笑混じりに言うのは那奈だ。

「まあ、みんな仲良くしてあげようよ」

「どうせ友達も溝切エンザで死んじゃったんだろうし」

トイレの中で、那奈とその取り巻きが話しているのを聞いたことがある。私はお腹を壊して個室に入っていた。私がいるとは知らずに、那奈たちは私の陰口を言う。

「ほんとキモいよね！」

「わかる！」

「センセーは『みんな仲良くしてあげてね』とか言うけど実際ヤじゃない？」

「震えるー」

那奈たちが出ていくまで、ずっと息を殺して耐えた。教室に戻ってみると、私の書いたプロフィールシートがゴミ箱に捨てられていた。

私が、一体何をしたって言うんだ。したよ。何をって、私は溝切から転校してきたんだ。

その那奈が一人暮らしをしている部屋に、那奈と二人きりである。

「なんで私を家に連れてきたりしたの？」

あんたといるのが胸糞悪いから早く解放してほしいんですけど。私はそんなニュアンスで那奈に問いかけた。

「いやあさ、あんまり専門の友達でおなじ出身の人がいなくてさ、久々に同郷の人に会えたんだし、飲み仲間にもなってもらおうかなあって」

私よりも大人っぽく見える那奈は、未成年とばれずに酒を買えるようだ。部屋の隅には缶チューハイの空き缶を詰めたゴミ袋が転がっている。目につくところにゴミ袋をホン投げてるあたり、ずぼらな性格なのだろう。

酒が入って気分の良くなった那奈は、自慢と侮辱を織り交ぜた話を始めた。

「そう言えば昔よくあんたにプロフィールシート書いてもらってたっけ、すぐゴミ箱に捨てられてたよねー。あれ捨ててたのウチらなんだー。知らなかった？」

馬鹿なのかこの女。普通そんな話本人の前ですか。フリでいいから仲良くしようとか思わないのか。もっと当たり障りのない話題にしろよ。

「『溝切エンザいじめ二審へ』？いじめられたくらいで裁判起こすとかマジモンペ（モンスターペアレントの略。たぶん。）だわ」

携帯でネットニュースを見ながら那奈が呟く。溝切エンザ事件は、まだ続いているようだ。多くの人の人生を破壊しつづけているのだ。

いじめは人間を破壊する。人生を破壊する。

小学校の頃いじめられていた反動で、私は中学に上がっても高校に進学しても、人付き合いが苦手なまま、ろくに友人がいなかった。むしろいつでも孤立し、ひどい時はまたいじめられていた。

「ねえ、あんたはいじめられたりしてなかったよね？」

ウチらのしてたことはいじめなんかじゃないんだからお前は静かにしとけよ。口の動きとは関

係なく、那奈はそう言った。

お前に触ると「ウィルス菌」がうつるから触るなよ、口から「ウィルス菌」が出てるんだから喋るな、息もするな、などと言う。プロフィールシートを見ながら侮辱する。聞こえるように悪口を言う。全部いじめじゃないんだ。

私っていうオモチャで、遊んでただけ。

気分が悪かった。不愉快で仕方がなかった。悔しい、嫌な記憶がどんどん溢れてくる。

「いまね、すごいウザいやつがいんの。そいつマジ死んだ方がマシって感じ」

いじめられっ子がいじめられ続けるように、いじめっ子はいじめ続けるのだろう。那奈の口からは人を傷つけ、破壊するための兵器が発艦し続ける。

この女、このままだと人を破壊し続ける。

ふと、部屋の隅にロープを見つけた。最近流行っているロープエクササイズ用のロープだろうか。

一瞬だった。全身の血流が加速したような感覚、体が熱い。

那奈はただの肉塊となった。ロープで絞めたときに首の骨が折れたのか、頭がくたんとぶら下がっている。

死んだ。那奈ではなく、私が。もう普通には生きられない。人生台無しだ。

ひたすら叫んだ。結局、全て那奈に壊された。いじめっ子は普通に友達と楽しく生きてきたのに、いじめられっ子はずっと独りでいじめられ続け、最後は殺人犯として人生を終える。

最後まで笑ってたのは、人を傷つけ破壊し続けてきた、普通の女の子。悪者は、いじめられ続けてきた私。

悔しくて、悲しくて、泣いた。叫んだ。

駆け出した。那奈の部屋を飛び出し、マンションの屋上に駆け上がる。安易な発想ではあるが

、飛ばうと思った。屋上から飛び降りて、死ぬ。この惨めな人生から解放される。

しかし、私の人生は全てにおいて私の思い通りに行かないようだった。屋上へ出るドアは施錠されており、屋上に出ることはできなかった。悔しかったのでドアを思いっきり殴ったら、手から血が出た。

なんで、誰も味方をしてくれないんだろう。そんなに私が悪いことをしたっていうの。人を一人殺したけど、せめて自殺くらいちゃんとさせてよ。

もう、全部ぐちゃぐちゃだった。なんで私はこんなに惨めなんだろう。

私は那奈の部屋のベランダから飛び降りることにした。しかし、それも断念せざるを得なかった。部屋には既に遺体の第一発見者がいた。丁度、犯行現場の様子を確認しに来た犯人と第一発見者が鉢合わせする構図と同じだ。

那奈の部屋には、一人の少女がいた。ジーパンにグレーのパーカーというカジュアルなファッションのスラリとした少女が、那奈の遺体のある辺りに立っていた。

「あ……その」

普通の犯人なら口封じにもう一人殺すか、顔を見られたことにも構わず逃走するところだが、私は凍り付いたように動けなくなってしまった。少女の視線が、固まった私に合わせられる。

「このメスを絞めたのはお前だな」

少女が口を開く。その声は、鋭利な刃を想起させた。

なんだこの少女。「メス」って言葉は、普通人間の女性には使わない。しかも「USBメス」が差別語だって言われるような時代だ。この一言だけで、少女が「普通じゃない」ってことがよくわかった。

「ヒトって動物はどうも甘すぎていけない。それにこのメスなんかは脂ばかりで喰うところがちっともない。こんな細いのにアナグマ並みに脂が厚い。」

喰っていた。那奈の遺体を、見たことのない獣が喰っていた。発言から推測すると、この少女も那奈を喰ったのだろう。私はその光景に恐怖し、嘔吐してしまった。床に跳ね返った吐しゃ物

でズボンが汚れる。

「アカ、セグロ！ もう喰うところなんか残ってないだろ！ いつまでもガジガジやってないで帰れ！」

少女が怒鳴ると、獣たちの姿がフェードアウトしていった。

状況が全く分からなかった。この少女と、獣たち。もしかして、これは夢なのか。頭がパンクしそうだ。

「あなた……いったい何なの？」

硬直した体をよじり、何とか口と舌を動かして尋ねる。

「質問を質問で返すな！ 質問したのは私だ。早く答えろ娘！ お前がこのメスを殺したのか？」

今度は体が熱くなった。那奈を殺した瞬間の興奮がよみがえっていきようだった。怖かった。自分のしたことに恐怖し、同時に興奮した。

恐怖と興奮に震えながら、私はうなずいた。

「憎かったか？」

うなずく。憎かったよ、すごく。殺したいくらいに。

「なら、私と一緒にだな！」

ズタボロに噛み割かれた那奈が転がっているところから、少女が私に向かって歩いてくる。

やめろ。来るな。少女に向かって叫ぶが、見えない手に首を絞められたように声が出ない。

少女が目の前に迫る。怖い。

柔らかい感触に、全身が包まれていた。とても暖かい。徐々に鮮明になっていく意識の中で、

もぞもぞ手を動かしてみると、いつも自分が使っている毛布があった。ゆっくりと目を開けてみると、自分の部屋の壁が目に入った。つけっ放しのテレビの光がちかちか明滅する壁をぼんやり眺める。

「夢……なのか」

那奈と偶然再会し、思う存分罵られたことも、彼女を殺したことも、彼女の死肉を喰らう化け物と少女に遇ったことも、全部夢だったのだろうか。

きっと夢に違いない。かつての同級生が夢に出てきて、いじめられたり、暴力を振るわれたりする夢を、私は何度か見たことがあった。今回も、そんな悪夢の一つだろう。

嫌な夢見ちゃった、今度メンタルクリニックにでも行くか。と思いながら毛布の中でもぞもぞすると、毛布が自由に動かない部分があることに気づいた。しかもやけに暖かい。

なんだろうこれ。そう思っていると今度は毛布の塊が頭に覆いかぶさってきた。これもやけに暖かい。

「なに……これって、うわ！」

毛布の塊が、私の顔をなめた。生臭い息を吹きかけながら、唾液でぬるぬるの舌でぺろりと、私の頬をなめた。元からあった毛布と、毛布の塊を跳ね除けて起き上がる。

「こらアカ！ その娘は獲物じゃないよ！」

聞き覚えのある声が毛布の塊に怒鳴る。声のする方を見ると、夢に出てきた少女が、私のベッドに座っている。毛布が動かないところは、彼女が座っている箇所だ。

「なんだ、まだ夢を見てるのか……」

夢から覚めてもまだ夢の中という体験も、初めてじゃない。

毛布の塊が私の脇に来てもぞもぞする。よく見れば毛布の塊だと思っていたのは大きめの犬のような生き物だった。人懐っこく頭をこすりつけてくる動物を、私は撫でてやろうとした。

撫でようとした手に、何重にも包帯が巻かれていた。包帯には血のシミが赤黒くにじんでいる。

夢の中で、私は飛び降り自殺を図って屋上に向かった。でもドアにカギがかかっている、死のうと思っても死ねない悔しさに思わずドアを殴って手を切った。

その時の傷が、確かにあるのだ。そしてこの犬によく似た動物は、那奈の死肉を喰っていた獣じゃないか。

「夢じゃないって、分かったか？」

少女の問いにうなづく。

「あなた、いったい何なの？」

夢の中でなく、昨晚少女にした問いをもう一度する。

「名乗るのが遅れてしまったね。私はミキ。人間が『^{おいぬ}狼^{ふつたち}の経立』と呼ぶ古いオオカミだ。隣にいるのはアカ。私の^{はらから}同胞の一頭だ」

理解が追い付かない。この少女は厨二の類の人なのだろうか。

「いまち理解できてないって感じだな。まあ、お前たち現代人が忘れ去ったモノってことだけ覚えておけば十分だ。あとはそのうち分かるようになる」

まあ厨二ってことはわかった。ミキが何者かはわかった（わかんないけど）ので、私は彼女の目的を訪ねることにする。

「ミキさんは、なんで私の部屋にいるんですか？なぜ、警察に私の身柄を渡したりしないんですか」

私は殺人犯なんですよ。そう言おうと思ったが、声にならない。私は殺人犯なんかじゃないと思いたい自分がそうさせた。

「お前に共感した、じゃあダメか」

「共感、私の何に？」

「あのメスを殺した動機だ。憎かったんだろ。自分を侮辱し破壊したヤツが」

思い出したくもない、でも永遠に私を苦しめる、いじめられてきた私の過去が蘇ってきた。

痛い、寒い、怖い。醜い感情が体を震わせ、熱い滴が目から迸る。

その時、ミキがニュース番組の流れるテレビを示した。

「お前が眠っている間、ずっと同じニュースがやってるぞ。」

テレビの中のキャスターは、女性変死事件……岩城那奈殺害事件を報じていた。キャスターの導入が終わると、今度は首から下だけを切り取った女性の姿が映される。那奈の母親だ。

「心当たりなんてありません。あの子は人の気持ちのよくわかる、気立ての優しい良い子で、友達もいっぱいいて……なんでこんなことになったのか……あの子は人から恨まれるようなこと何もしてないのに……」

声が加工されていてもわかる嗚咽を漏らしながら、那奈の母親は記者に語る。その映像が終わると、今度は凄惨な遺体の状態を表すCGの模式図が映される。

私は枕をテレビに投げつけた。

「みんな嘘っぱちだ！ ふざけるな！」

怒りが、悲しみが、喉を突き破って出てきた。

「何が『人の気持ちがよくわかる優しい子』だ！ だったらなんで私には優しくしてくれなかったんだ！ なんで、私にはあんなことしたんだ！ あの女は！ 私を、ぜんぶぜんぶぶち壊したんだ！ あの女は！」

壁を殴る。固まった血で塞がっていた傷が開き、包帯に新しい血のシミができる。手の届く範囲にあるもの全て殴った。手が血だらけになった。痛い。

「もうやめろ！ 私が悪かった。気分が悪くなるだけなのに。すまない……」

二の腕のあたりが、強く圧迫される。私はこれ以上何も殴れなくなった。逃れようとしても、ミキの腕力は強力で、私を抱きしめたまま拘束した。

「なんで……」

「なんでお前にアレを見せたか、って？」

首を横に振る。違う。

「なんで私に、那奈を恨む私に共感したんですか？」

ミキが私の頭を押さえつけ、自分の胸に抱えこむ。パーカー越しに柔らかい乳房が顔を圧迫する。暖かい。

「私も、お前と同じだからだ。私もお前と同じように、憎くて殺したくて仕方がない」

「誰を？」

「全てのヒトを。私の同胞、家族、最愛の夫も、皆殺された。一族全員、皆殺しにされた。絶滅させられたんだよ」

ミキの言う「ヒト」は、ヒトという動物を表しているように感じられた。ミキは自分を古いオオカミだと言った。絶滅させられオオカミと言えば、ニホンオオカミが思い浮かぶ。ミキは年月を経て霊力を得たニホンオオカミが化けたモノなのだろうか。なら、人間がさぞ憎いだろう。

「じゃあ、わたしだって殺せばいいじゃないですか」

私だって、人殺しの人でなしだが、少なくともヒト科だ。

「言っただろ。私はお前に共感したんだ。それとも簡単に、お前には利用価値があるから生かしている、と言ったほうがいいか？」

「利用価値？」

「私のエネルギー源は、お前の憎しみの感情だ。少しやりすぎてしまったが、さっきニュースを見せたのも、お前の感情を煽るためだ。」

ミキの声はとても優しくかった。人を罵り傷つける、鋭く下品な声とは違う。優しい声は、悪魔の囁きを発した。

「なあ、私と一緒に殺さないか？憎いやつ、人を傷つけ破壊するようなやつ等全て……。これ以上人を殺す感覚を味わいたくないなら、私が殺してやる。お前は殺しの動機を作ればいい。殺す相手を、殺したいほど憎んでくれたら、それでいい。もちろん無理はしなくていい」

顔をうずめていたミキの胸は、いつの間にか白い毛で覆われていた。私を抱きしめるミキの

腕は、太くがっしりした前脚に変化している。

目の前には、白い大きな動物がいた。並の大型犬よりは全然大きいけど、でも有り得ないほど大きくはない、一頭のオオカミがいた。これがミキの本性か。

「いいよ、のった。もう、全部ぶっ壊してやる。もう殺したんだから、一人も二人も変わらないよね」

もう、どうとでもなればいい。悪魔と契約しよう。この大きなオオカミの化け物に魂を売ろう。

那奈と一緒に私をいじめた取り巻きも、中学でも私がいじめられるように情報を漏らしたクレナも、高校の時私が孤立してるのをいいことに裏サイトのネタにしたここねも、全員殺してやる。ちょっと自分勝手かな？ なら、今まさに誰かをいじめて自殺に追い込んでいるようなヤツ等も、殺してやる。

破滅的な衝動が、私を動かした。

ミキと出会って二週間で、十人分の変死体ができた。どれも肉食動物に食い荒らされたように腹部が削げ落ち、内臓もあらかた引き出されていた。

最初の被害者の岩城那奈を筆頭に、那奈の取り巻きだった久野綾乃、小中の同級生で私の噂話をしていじめられるよう仕向けた本田クレナ、私のことで高校の裏サイトを炎上させた原田ここね……。十代から二十代の女性数名をミキとその同胞に食い殺させた後、私たちは市内の中高生を狙った。クラスメイトの弁当をゴミ箱に捨ててて下品に笑っていた男子中学生、SNS上で集団で一人を誹謗中傷し自殺未遂まで追い込んだ女子高生グループ、体罰を繰り返し部員が自殺未遂を起こしたラグビー部の顧問も殺した。

別に正義の味方を気取っているわけじゃない。ただ本当に、憎かった。人を傷つけても全然平気な顔してるやつら全てが無性に許せなかった。一人殺すたびにニュース番組で取り上げられては「憎まれるようなことをする人ではなかった」だの「素直で元気で友達いっぱいみんなの人気者だった」だの言われる。そういうのを聞くと虫唾が走った。あんたらは殺された人間がどんなに人を傷つけているか、人を「殺している」か知らないんだよな。

いっそ全員、道ずれにしてやる。人らしく生きて、人を傷つけているヤツ等全て、道ずれに死んでやる。

ある日の夕暮れ、公園のバスケットコート。数人の少年が話しているのを、私は植え込みの陰から聞いていた。

「そういや金田のヤツ死んだんだってさ」

「え、何？事故ったの？」

「ちげーよ、最近ニュースでやってる変死体事件。あれの被害者の一人になっちゃったんだとさ」

「あの『人喰い』事件か」

「ねえねえこれ見ろよ！」

少年の一人が、スマホでSNSの投稿を見せびらかす。もちろん私のいる位置から画面は見えないが、彼らの会話の内容から、ろくなものでないことは明らかだ。

「うわ！マジこいつ頭おかしいだろ！」

「オモシロすぎだろこれ！」

「死んだ方がいいやろ！てか死にさせや！」

「なんで溝切から出てくるかなあ？『ウィルス菌』が余計に広がるじゃねえか！外に出ねえでみんな死ねよ！」

「ほんと意味わかんねえわ」

本当に、聞くのも嫌だ。誰かを侮辱し、殺す言葉の凶器。なんでもない誰かを嘲笑し、いじめて楽しむメディアにする。本当に吐き気がするような文化だ。

手が震えていた。「死ね」って、本当に汚くて、痛くて、怖い言葉だ。どんな刃物より鋭く、人の心をえぐり、殺す。

「大丈夫か？」

近くに伏せていた、オオカミの姿に戻ったミキが声をかけてくる。私はミキの首回りの毛を撫でた。

「ごめん、大丈夫だよ」

深いところだと十センチは手が埋まるほど毛深いミキの体を撫でていると、気分が落ち着いてくる。ミキは私の中の憎しみの感情が吸収されてエネルギーに変換されているからだと言ったけど、この感覚はそれだけが理由じゃない。

暖かく、柔らかい。

ミキを一通り撫でて冷静さが戻ったところで、改めて状況を把握し直す。

辺りは夕闇に包まれ始め、人影もない。この公園は街灯も少ないから、日没後は真っ暗になるはずだ。もう少年たちの姿も見え難くなってきている。

この闇に躍り出て、あの少年たちを噛み殺す。一連の動作を頭の中で組み立てた後、大きく深呼吸をする。

血流が加速したような感覚。体が熱くなる。

「行け！」

ミキと同胞たちが夕闇に躍る。少年たちは一瞬の出来事にわずかに驚きの声を漏らす。

少年たちは泣き叫ばなかった。いや、正確には泣き叫べなかったと言うのか。手首、足首、首と名の付く場所を同胞たちに固定され、ミキの前足で地面にねじ伏せる。顎全体で喉を抑える。呼吸ができない少年たちは、体に残った酸素を使い切るまでもがき、やがて完全に動きを止めた。

ミキとその同胞たちは顔の周りの毛を血で染めながら少年たちを喰った。栄養価の高い内臓はミキが食べ、その他の部分を同胞たちが貪る。

嫌な光景だし、何度見たって慣れない。けど、これでまた人を破壊するようなヤツ等が消えたと思うと、気が紛れた。ミキは私の殺意を具現化してくれる。これは単なる殺人だ。憎くて憎

くて、仕方ないから殺しているんだ。

「うわあ！」

甲高い悲鳴に、私は振り返る。見ると、小学生くらいの男の子がサッカーボールを持って立っていた。友達と遊んでいて帰りが遅くなってしまったのだろうか。こんな時間に子供がいることに私は驚いた。少年はミキたちの食事風景を見て驚き、恐れているようだ。

その男の子の声を聞いた同胞の一頭のセグロが、興奮冷めやらぬ様子で走ってきた。男の子はボールを落とし、身をかがめる。

「セグロ！だめ！」

私はとっさに男の子に覆いかぶさる。次の瞬間、激しい衝撃に見舞われる。腕が信じられないくらい痛かった。セグロが私の腕に噛みついた。

アニメとかでよくオオカミの能力を持つキャラクターが、大きな手に生えた爪を武器に闘うが、あれはオオカミの能力じゃない。オオカミの最大の武器は、発達した犬歯と強靱な顎だ。そのオオカミの顎の力が、私の腕にかけているのだ。上下からスパイク靴で踏みつけられているような、突き刺す力と圧迫する力の合わせ技が、私の腕の組織を破壊する。

「逃げなさい！早く！」

腰を抜かして座り込む男の子に、私は叫んだ。我に返った男の子は、ボールを拾うのも忘れて一目散に逃げて行った。

男の子には、一生忘れられないような、嫌なものを見せてしまった。そう思っていると、今度は別の衝撃に見舞われる。私に噛みつくセグロを、アカが引きはがしにかかる。せっかく慣れてきた腕の痛みが、セグロの牙が抜けることで再燃する。

「おい忍！ しっかりしろ！」

少女の姿に化けたミキが、私に声をかける。その声が段々と遠のき、視界に映るミキの姿が薄れていく。

私は気を失ったらしい。ミキに背負われて家まで帰った。ミキは私の傷をいやすために霊力を

少し分けてくれたという。腕にはセグロが噛んだ跡は残っているが、もう傷はほとんどなくなっていた。

私のせいで、男の子を危険にさらしてしまった。そのことがもやもやと胸の辺りに立ち込める。

結局、私は那奈に負けたんだ。人をいじめ続けてきた那奈でも、直接人を殺すようなことはしなかった。彼女たちは「おいしい」とか「楽しい」と同じ感覚で「頭湧いてる」とか「死んだ方がいい」とか言ってるだけなのだ。それで私みたいな「不適合者」が勝手に傷ついて死ぬだけだ。いじめは別に犯罪じゃない。それなのに私は、いじめっ子全てが許せないとかなんとか言って、ただの殺人犯になったのだ。誰がどう見たって、悪いのは私。「悪魔にそそのかされたから」なんて言い訳はできない。ミキの殺しの動機は私だ。私が殺したいと思ったことで、ミキが殺す。私が殺してるのと変わらない。

「もう、嫌になっちゃうな」

風呂に浸かりながら小さくつぶやく。何のために、誰の許しを得てこんなに殺したのだろう。

「あんな若い、『無限の可能性』に満ちた少年たちを殺したなんて！ お前は悪魔だ！」

「人でなし！ 死にさせ！」

「死刑にしろ！ 私の娘を返せ！」

そんな風に言われてるんだろうな。どんなに人をいじめていたって、世間様が「素直ないい子」だと認めた以上、あの少年たちも、那奈も、何も悪くない。それを殺した私は、頭に蛆虫の湧いた人でなしだ。

どんなに嫌で苦しくても、大人たちがいじめじゃないと言えば、それはいじめじゃない。どんな下品なヤツ等でも、大人たちが認めれば「素直ないい子」なんだ。すべては、大人とか世間とか社会とかが決めることであって、私じゃない。

殺人犯で人でなしな私に、生きていていい理由はないんだ。

リストカットは傷が目立つから、よく足首を切っていた。今日も、足首を切ろう。湯につかった状態で切れれば、血液も固まらずに失血死できるだろう。

もう居場所なんてないのだから、この人生から解放されよう。

那奈を殺したとき、一度屋上に上がろうとせずそのままベランダから飛び出していたら、こんなことにはならなかった。

ずいぶんとたくさん道ずれにしまったな。そう思いながら、足首に当てた剃刀をスライドさせる。赤いもやもやが浴槽の中に広がる。

さよならミキ。別にあなたを恨んだりしない。こうなっちゃったのは、私が悪いんだから。

「悪かった……私が悪いんだ。お前が死ぬ必要はない！」

何言ってるのミキ。私は殺人犯だよ。殺してるんだから、死んで当然の人でなしだよ。

「お前は誰も殺してない！最初のメスだって、私が噛み割いたんだから、お前が殺した形跡は残らない！ お前が殺したなんて、誰もわからない！」

誰もわからないなら、知らんぷりしてていいの。そんなはずない。殺したのは私だ。警察に捕まらなくても、その記憶が私を苦しめる。もう苦しいのは嫌なんだ。

「死ぬな！ 生きろ！」

うるさいなあ。もう放っておいてくれてよ。私は本当なら、那奈を殺した夜に自分も死んでいったんだ。

「ミキ……もう、いいんだよ。生きてなんかいたくない」

激しい衝撃で脳が揺れる。私は脱衣所から放り出され、一気に居間の方まで飛んで行った。体に巻かれたタオルがはがれる。寒い。と思ってたら今度はミキが馬乗りになってきた。

「ふざけるな娘！ 何が生きていたくないだ！ ヒトって動物は！ 贅沢だよなあ！ さんざん殺しておいて自分は死にたいだと！ 笑わせてくれるなよ！」

マウントポジションで私を殴打するミキのパーカーはびしょぬれだった。出血多量で意識を失っていた私を風呂から出して介抱してくれていたのだ。

「ミキ！ やめて！」

必死で防御しようともがくが、ミキの力は強く、私が手出しできないように押しえつけている。

激しいうなり声と咆哮が部屋に響く。ミキの殴打がやむ。アカがミキに食らいついていた。

アカ、お前、私を助けようとしてるのか。

アカの援護のおかげで、私はミキの下から這い出すことができた。ミキの方を向くと、もうミキはアカを押しえつけていた。

「生きてたくても生きられないヤツがいるのに！ 生きてるヤツはよくも『生きるのに疲れた』だの『死にたい』だのへらへら言えるよな！ わがまま贅沢し放題の人間どもが！」

ミキは本気で怒っているんだ。死にたいなんて簡単に言う私が、本気で許せないんだ。

「このアカも！ 本当は生きてなんかいないんだよ！ 私の記憶が、私の霊力を使って具現させてるに過ぎない作り物なんだよ！ アカだけじゃない！ セグロは生まれてすら来れなかった！ 人間が持ち込んだ病のせいで！ 私の腹の中で死んだ！」

「だから何だっていうの？ 『かわいそうな赤ちゃんのためにも生きてる人は頑張ろう』とでも言うの？ ふざけないでよ！ あんたには関係ないでしょ！ 喰えよ、殺せよ！ この私を！」

私も叫んだ。殺せ、殺せ、私を殺せ。喉が破れるくらい全力で叫んだ。

「なんで気付かないの？ 私は頑張っちゃいけない人間なんだよ！ 生きてちゃいけない、人殺しの人でなしなんだよ！」

「だからどうした！ 人でなしだからって、ヒトじゃないと生きてちゃダメなのかよ！ そんなこと言うのは誰だ！」

「社会だよ！」

「ならその社会を殺してやる！」

「ならその前に私を殺せ！」

ミキが私を突き飛ばす。力を抜いて衝撃に身を任せる私は、そのまま倒れこんだ。倒れた私の

、剃刀で切った足首をミキがつかむ。ミキはそのまま、傷口を広げるように爪を立てた。

痛い。想像を絶するような痛み。傷口がえぐられている。

「痛い！ 痛い！ 痛いよミキ！」

「痛いのは、生きたいからだ！」

ミキが叫ぶ。

「痛いのは嫌だ。だから逃れたい。痛みって言うのは、そういふうにして体を守ってるんだ！
生きるために！ お前は、少なくともお前の体は、生きたいと思っているんだ！」

徐々に、痛みが和らいでいく。痛み慣れていってるんじゃない。ミキが私の傷を癒してくれているんだ。

「私は……生きていてもいいの？」

「それを決めるのは私じゃない。でも、生きてちゃダメって言うやつは、私が殺してやる。だから……」

ミキは言葉を区切る。私はまた別の衝撃に見舞われる。体が圧迫される。苦しくて、苦しくて、体が熱くなる。その熱の一部が、涙腺から分泌されて頬を伝う。

「私と一緒に、生きてくれ」

泣いた。ひとしきり、ミキの腕の中で、泣いた。私を認めてくれるヒトなんていなくていい。この古いオオカミが、私に生きろって言ってくれる。

かつかつと音がした。何の音だろう。振り向くと、ミキの同胞の一頭がベランダの外から窓をかりかりやっている。私はとりあえず素っ裸でベランダに出るのはまずいと思い、部屋着に着替えてからベランダの窓を開けてやった。

同胞の一頭は紙切れを啜っていた。紙切れには何か字が書かれている。

「あいつらを殺してくれてありがとう。」

あいつらが僕の弁当をゴミ箱に捨ててから、また弁当を捨てられるんじゃないかと思って学校に

行けなくなった。すごく怖くて、何も食べられなくなった。学校に行けばまたいじめられる。転校しても、その先で転校の理由がばれればいじめられる。すごく怖くて、頭の中が不安で真っ暗だった。

けど、あいつらが殺されたって聞いて、少し安心した。また学校に行こうと思えた。学校にもうあいつらはいない。

今は、なんとか学校に通えている。少しずつ人とも話せるようになってきた。学校の先生たちは事件の事をできるだけ話さないようにしているから、みんないつも通り生活している。

全部あなたのおかげです。ありがとう、誰かわからない殺人鬼さん」

紙切れにはそう書いてあった。手紙のようだった。同胞はどこでこんなものを拾ったのだろう。

すべては謎だ。同胞が説明してくれたり、手紙を書いた本人が直接お礼しに来たりする訳がない。そもそも、この手紙が本当に私たちに宛てられたものかもわからない。

でも、いじめっ子が殺されたことで、誰かが心の平穏を取り戻せたことは確かだった。

別に人助けをするつもりはない。あくまでこれは憎しみを動機にした殺人だ。でも、一人でもそれで救われる人がいるなら、少しは嬉しい。いじめを憎む私が、ヒトを憎むミキと一緒に殺し続けることで、いじめっ子への抑止力になったら、それは素敵なことだ。

歪んでいる。でも不思議と気分が晴れ晴れとしている。

私は、このオオカミとともに生きていこう。人でなしでもいい。生きたいから。邪魔なものは全て破壊する。

そばにいるミキを見つめる。

「ミキ」

ミキが私の方を向く。

「どうした」

「私と一緒に、いて……生きてくれる？」

今度は私からお願いします。ミキの手を取る。この手も、柔らかくて暖かい。この温度を、ずっと感じていたかった。

「もちろんだ。お前と私の生存を邪魔する奴らは、全員殺してやるさ」

ありがとう。言おうとしたが、言葉にならなかった。喉が詰まったようになり、目の縁が熱い。胸も熱くなってくる。

ミキの手を握る手に、私は力を込めた。

一匹のヒト。ヒト科の動物でいい。人の理性を捨て、ヒトの野性に従おう。

(終)

あとがき

はじめに。このあとがきはほとんど作者の一人喋りであり、自己満足であり、読んでも有益な情報は得られません。このあとがきを読んだことによる時間の浪費等に関しては一切の責任を負いかねますので予めご了承ください。

話を総括すると、大型犬をモフモフしようということにつきます。

改めて、今回初投稿の香月日向です。高校の時から文芸部に入っていて、大学でも絶対文芸部に入ろうと心に誓っておりました。

先日、同じく小説執筆を趣味にする弟から「感情描写などいらんのだ！そんなことよりバトルシーンを書け！」と怒鳴られました。まあ弟は機械と社会へのアンチテーゼが書ければ満足みたいなヤツなので仕方がないです。まあ、弟のそんなことを言われても従うはずもなく、今回は感情描写特化型とも呼べる一人称で物語を書いております。一人称の欠点というか犠牲というか、語り手となる人物を外から見るができないので、今回の折口忍ものっぺらぼうみたいになってます。せめて胸が乏しいことだけでも書けばよかったか。あと、エ〇アのパチモンみたいな精神世界が登場するのもどうにもならなかった。重篤な厨二病患者なので仕方ない。

話の内容について。本来はハードなバトルシーンの合間に忍とミキの百合百合しい絡みを挟む予定だったのですが、分量の問題と、ホントにそれをやると余りにも二人が「萌えキャラ」化してしまうので断念。記号を当てはめただけの「萌えキャラ」に用はないのです。

文芸部マニュアルに「同一の言葉は表記を揃える」と書いてあったので、最初っからそれをぶっ壊しにかかりました。漢字表記の存在する生物でも、図鑑などの学術的な場面ではカタカナで表記するという慣例があります。それをヒントに、漢字で表記する「人」と、カタカナ表記の「ヒト」は意味が違うんじゃないかと考え、表記を分けています。お題が「生」ということもあり、今回のテーマは「人とヒトの違い」と「生きること」として話をまとめています。

結構グロテスクというか、刺激的な表現が多かったのでちょっと不安です。高校の時、度々国語の担任の先生に呼び出されては「君、この表現はちょっとやめた方がいいよ」と配慮を求められていたので、癖でまだびくついております。

国語の先生に見せるわけじゃないのであとがきでもはっちゃけられる。いいことだ。

最後になりましたが、このような拙著を読んでいただき、誠にありがとうございました。精進します。

しばらく見なかった五月晴れの朝だった。

低く差し込む白い光に街が白い輪郭を現し始めた中、一陣の風が清涼な空気と起き出した生命の微動を包み込んで、雲の一つも無い蒼天に溶けていく。

空模様とは裏腹に、僕の心は決して晴れやかではなかった。とは言っても、重々しい暗雲が垂れ込めているとか、四方を暗闇に囲まれているとかではなく、透き通った空に似た一丁度この晴れ渡った空みたいな――蒼い憂鬱が漠然と蟠っていた。

これがどうにも良なくて、例えば大学の講義を受けている時、不意に立ち上がってそのまま立ち去ってしまいたくなる。同じく講義が終わって食堂にいても、書籍部で立ち読みしても、アパートの部屋に戻っても、「ここじゃないな」と感じて、すると途端に居た堪れなくなる。

結局何処に居ても落ち着くことはなかった。

そんな生活にも平穏を感じる瞬間はあった。

僕は昔から身近な自然が好きで、道端の雑草とか、庭先の花木とかを見ては、そこに安らぎを見出していた。

その日は、大学の図書館から櫨の低木を見ていた。この図書館は外壁の一部がガラス張りになっていて、内側から外の植木を見ることが出来た。

その櫨は晩春の白く柔らかい日差しの中で、薄緑色の葉を微風に揺らしていた。

しばらくして、そこに一羽の雀が飛んで来た。雀は幹の上でピョンピョンと跳ね、適当な場所に落ち着くと、片方の翼を広げて毛繕いを始めた。

雀の翼の外側は末端になるほど茶色が薄くなり、折り重なった羽の絶妙な模様と墨を差したような黒色が精緻な織物みたいだった。一方で、翼の内側は腹と同じ色で、柔らかそうな灰色だった。

。

その後、雀は飛び去った。

数日後の午後のことだった。

その日、講義が終わって学部棟の出口に行くと、外は雨天だった。

降りしきる雨に煙った灰色の世界は普段より一回り小さくなる。その中を、傘を差した人々は何処か遠くを見て、或いは下を向いて、心を置いてきた場所へ歩いていく。

唐突に図書館に行こうと思った。

この学部棟から図書館までは道路を挟んで三十メートルくらいだったが、僕は傘を差さずにその間を走った。

水煙と雨音の中、僕は一人だった。僕は誰にも会わなかった。

図書館について振り返ると、学部棟から見た時と同じように、傘を差した通行人が行き交っていた。

気づく。雨は孤独に耐え切れなくなって降ってきた涙だ。だから、人は傘を差して雨を防ぐ。孤独に侵されないために。

僕は濡れそぼって冷たい服をきたまま、先日の櫓を見に行っただ。

そして、待った。長時間待った。でも、雀は来なかった。

外を見ると雨は未だに降り続いていて、櫓の奥の道路では、傘を差した学生が門の方向に歩いていく。帰宅の時間だった。

また気づく。家は心の置き場所で、孤独を感じなくて、落ち着く。だから、そこに帰る。

同じく孤独から見を守る傘の下も家の中だ。

雀は雨の中では来なかったが、雀には帰る家がある。

(もし雀が傘を差したら、雨の日でもこの櫓に来るのだろうな)

けれども、家の無い僕は傘もなくて、雨曝しだ。

雨はガラスの内側にいる僕にも漣々と降り注いだ。

今思えば、僕はホームシックに罹っていて、それは案外自分では気付かないものだった。

でもそれは、時間が経てば治るものだ。

最近比以前よりも雨が多い季節だけど、僕はそれほど嫌ではない。

僕は雀の涙みたいに小さな日常を、一生懸命に生きている。

契約書

「I`m glad to meat you.」（以下、「本作品」という。）の著者 守目冥人（以下、「甲」という。）と読者（以下、「乙」という。）は、以下のとおり契約する。

（目的）

第一条 本契約は、甲が創作した本作品について、乙に読書行為に関する事項を定めることを目的とする。

（読書条件）

第二条 本作品の読書には、左記の項目にすべて該当しないことが条件として求められる。

一、年齢が満十八歳未満である。

二、食人描写に対しての耐性がなく、拒絶反応が起こったことがある、または起こる可能性がある。

（免責事項）

第三条 甲は、本作品の読書によって生じた問題について、理由の如何に関わらず一切の責任を負う義務をもたない。

上記の項目にすべて該当しないことを認め、私の責任で本作品の読書行為を行います。

平成 年 月 日

氏名：

性別：男性・女性

年齢：満 歳

休日の昼下がりに、開けた窓から入ってくる太陽光、レースカーテンを揺らす心地よい風、妻の料理が行儀よく並べられた食卓、向かいに座って食事をする妻、膨らんできた妻のお腹。こういうのを幸せと呼ぶのだと、俺はしみじみと感じ入った。

「どうしたの、にやにやしちゃって」

「いや、なんでもないよ」

言葉を濁して食事を再開する。裕福ではないが満たされた生活。こんな当たり前の日常が当たり前が続いてくれるのならば、俺にはもう何もいらぬ。

インターホンが鳴った。

「誰かしら、土曜の昼間に」

腰を上げようとする妻を手で制して立ち上がる。ドアを開けると小柄な男が立っていた。

「初めまして、先日越してきました」

どうも初めまして、と頭を下げる。低くなった視界に入った物を見てぎょっとした。引っ越しの挨拶といったらてっきりタオルや菓子を持っているのかと思ったが、彼が持っていた物は生肉だった。

「あ、驚かせてすみません。私肉屋を営んでおりまして、これうちの自慢の商品です」

視線に気づいた男が苦笑いをしながら説明する。どうやら引っ越しの挨拶であることには変わらないようだ。

「どちら様？」

「奥様、ですか？ 初めまして」

彼が両手に抱えている物を見たとき、妻も俺と同じ表情をした。

「こちら佐藤さん。肉屋をやってるらしいんだ」

俺がそう言うと、彼は会釈をしてから膨らんだ妻のお腹に目を留めた。

「これからどうぞよろしくおねがい致します、妊娠中はより多くの栄養を必要とするので、ぜひうちの店をご利用ください」

彼が我が家にもたらした肉は、今までにないほど美味しかった。

「あ、いらっしゃいませ！」

数日後、俺はその男の店にいた。

「この前はどうも、ありがとうございました。妻も喜んでいましたよ。あれ何の肉ですか？」

「非常に珍しい猫の肉です。貴重な物なので滅多に取引されないんですよ」

「そんな貴重な物を……本当にありがとうございます」

彼の店は居抜き物件を利用した建物の中にあり、一階が店、二階が住居になっているようだ。店先には様々な種類の肉が行儀よく並べられていて、ショーケースの上には使い込まれたはかりとレジスターが置いてあった。

「本日は何を買って行かれますか？」

「そうですね……何がお勧めですか？」

「奥様のお身体を考えるのでしたら、脂身の少ない赤身の肉がよろしいかと。こちらのヒレなどいかがですか？」

「ではそれを三百グラムいただきます」

「かしこまりました、少々お待ちください」

「あら、奥さんのお遣い？」

声をかけられて振り返ると、パン屋の女主人が立っていた。

「関心ねえ、うちの旦那にも見習ってほしいわ。あら、私も昨日この店で買い物したのよ。売ってる物もいいけど、なんたって売ってる人がいいわよね、いつも朗らかで」

「いい人ですよ。この前なんか、こーんなに大きい肉の塊貰っちゃって」

「肉の塊？」

「はい、猫の……貰ってませんか？」

「貰ってないわねえ。羨ましいわ、猫の肉だなんて」

「お待たせ致しました」

「じゃ、私は失礼するわ。あら随分といい肉を買ったのね」

俺が頼んだ肉には綺麗なサシが入っていて、どう少なく見積もっても三百グラム以上あった。彼の方を見ると、涙黒子の印象的な目元に悪戯っぽい笑みを浮かべ、「これは妊婦割引です」と小声で囁いた。

件の肉屋が越してきてからというもの、妻の様子がおかしい。やたらと肉屋のことが話に出てくる。どうやら、ほぼ毎日彼から料理を教わっているようだ。本当にそれだけだろうか。

「それでね、肉屋さんたらカレーにママレードを入れるなんて言うのよ。変わってるわよね」

「またその話か」

「あら、この話したことあったかしら」

「そうじゃない、また肉屋の話かと言ってるんだ」

「何その言い方……真逆、浮気を疑っているというの？」

「全く以てその通りだ。だいいち、そんなに料理を教わって何になるというんだ」

「人の気も知らないで……」

夫婦生活史上空前の大喧嘩だった。妻と一緒に寝ているはずだが寝床は冷え切っているようで、なかなか寝付けなかった。

翌朝になっても戦況は好転せず、依然として膠着状態が続いていた。

仕事から帰ってくると、出迎えてくれるはずの妻の姿はどこにもなかった。衝撃的な事件であることは間違いないのだが、俺の心は平静を保っていた。ある程度予測できていた事態だったからだ。

行き先はもちろん分かっている、あの男の店だ。

そのままの格好で家を飛び出す。

だが肉屋に赴く必要はなかった。

向こうからこちらへやってきたからだ。

ひどく顔色が悪い、顔面蒼白という言葉がぴったりだった。

「どうされたんですか」

「奥様が、急に倒れられました！」

彼の部屋は綺麗に片付けられていて、というか片付きすぎていて、やけに部屋が広く感じた。布団と机とその上のランプだけが、この部屋にある全てだった。

「今は眠っているようですね」

「そうですか……ご迷惑をおかけしてしまって申し訳ない」

「全然大丈夫ですよ、急に倒れたのには驚きましたが。そろそろお産が近いのですかね？」

「そう、かもしれません」

「奥様の料理を召し上がって行かれますか？」

「は？」

「いや、もともとあなたに食べさせるために作った物ですし……聞いていませんか？ あなたと産まれてくるお子様に美味しい料理を食べさせるために私に料理を教えてほしいと奥様が」

彼の口から告げられたその事実は、昨日までの妻に対する不信感を吹き飛ばすには十分過ぎた。

「……いただいています」

「それがいいと思いますよ。先程から大層お腹の音が聞こえていらっしゃいますし」

「どうぞ」

彼が運んできたビーフストロガノフは忌々しいほど美味しかった。

「あれです、引っ越しのご挨拶で渡させていただいた猫の肉。価格が高い物ですから売れ残ってしまっ。その肉で奥様が作った物です」

謎の虚しさを料理で押し戻し、茶で流し込む。

「羨ましいなあ、帰る場所で愛する人が待っているというのは」

「どうですか、こっちの生活にはもう慣れましたか？」

彼のその言葉が嫌味に聞こえ、無理矢理に話題をそらした。

「ええ、お陰様で。皆さん優しい人で良かった」

「そういえばどこからいらっしゃったのですか？」

「**村です」

聞き覚えのない名前だった。どのような漢字をあてるのか、そもそも漢字表記があるのかさえ見当がつかなかった。

「私の村はダムの中に沈みました」

とても残酷で、どういうわけか魅力的でもある日本語が、食卓を挟んだ向かい側から不意に飛んできた。

「すみません、無礼なところをきひえ……」

あれ？

どういうわけか舌が回らなかった。

押し殺したような笑い声が聞こえた。

そういえば彼が笑うところを初めて見たな。

どうか妻には危害を加えな

全身が鉛のように重い、薬を盛られたようだ。

ひどく寒い、冷凍室の中だからだ。

手足が動かせない、椅子に縛り付けられているからだ。

声が出せない、口にテープが貼られているからだ。

ゴム長靴の底がタイルの表面を擦る音が近づいてくる。

「おはようございます」

目の前に物腰の柔らかそうな男が立っていた。目元の泣き黒子が、今はひどく嘘っぽく見えた。

「どうですか、先程までの私の昔話の続きに付き合ってはくれませんか？」

身動きがとれないのだからこちらに拒否権などあるはずもないことを知ってか知らずか男が尋ねる。

「私には妻がいました。私は妻を愛していました」

そうか。きっと妻に逃げられたか亡くしたかしたのだろう。そして俺達夫婦が妬ましかったのだろう。それで少し夫婦関係をかき乱すつもりだったのか。冗談じゃない、ただの八つ当たりじゃないか。

「ある日、妻は妊娠しました」

なるほど、それで妻が亡くなったのか。それか流産か。どちらにせよ俺達は赤の他人なのだから、お前の人生に巻き込まないでほしい。

「妻が妊娠したとき、私は獄中にいました」

どうということだ？

男が近くにあったパイプ椅子を蹴飛ばす。

今まで見たことのない、荒っぽい所作だった。

「どーしてなんでしょうかねえ？ 何か知りませんか？ 私の妻ニアって名前なんですけど」

男の口から出た名前を聞いた途端、目の前の風景がぐにゃりと歪んだ。

「あれはもう私の知っている妻じゃない。自由で獰猛で残酷で多淫な猫だ何度も何度も何度も何度もあなたとの子よと嘘をついたそんなんでも私を騙せるとでも思ったのか！」

冷凍室の中だというのに目の前の男の顔は真っ赤になっていた。

男の咆哮が響き渡る。

調理台の上に置かれた包丁類が床に散乱し、甲高い耳障りな音が轟く。

「私の妻のお味はいかがでしたか？」

今まで聞いたことのない、冷たい声だった。まるで声までが冷凍室の気温にあてられて凍ってしまったようだ。

空調の音がやけにはっきりと聞こえた。

まさか。

『非常に珍しい猫の肉です。貴重な物なので滅多に取引されないんですよ』

『あれはもう私の知っている妻じゃない自由で獰猛で残酷で多淫な猫だ』

男の個々の言葉が線で繋がった。

まさか、まさか、まさかまさかまさか

「美味しかったです、か？」

口のテープが乱暴に剥がされる。もう喋るのを阻害する物はないのに、自由に喋れるはずなのに、それは不可能だった。

「おまえ、つま、食……」

俺の口をついて出た言葉は、情けないことにこの三つだけだった。

「食べるもなにも一緒に食事したじゃないですか」

男の口調は、俺のそれと違い、いやに滑らかだった。

「なんで……」

尋ねたいことは山ほどあった。ただ声帯が萎縮してうまく喋れないのだ。

「あれは妻じゃないから。私の家に勝手に住み着いて欲望のままに三大欲求を満たすことしかできない獣だから」

男の手が伸びる。

華奢な体に反して男の力は強く、軽々と持ち上げられてしまった。

終着点はおそらく、使い込まれた機械達の中で異質な輝きを放つ新品のミンチマシンだろう。抵抗などできるはずもなかった。今の俺にできることは、ただ声にならない声を漏らしながら体中の穴という穴から体液を垂れ流すことだけだ。

「なんてね」

俺の最期はミンチマシンに突っ込まれ木っ端微塵……ではなかった。

プラグはコンセントから抜けていた。

「本当はあんたの、妻を胎児もろとも奪いたいあんたらがかつて、そうしたように合挽き、にしてしまいたいでもそう、したら、私、まで獣になっ、てしまうじゃ、ないか！」

しゃくり上げながら男は言う。

涙が俺とミンチマシンを濡らした。

あれは悪い夢だったのだろうか。

あの出来事の後も、俺たち夫婦と彼との親密なご近所づきあいは続いていて、彼は相変わらず肉を売っている。その接客態度の良さは近所でも評判だ。

「ご主人、こんなところにいらっしゃったのですか。奥様のお産は無事に終わりましたよ。ささ、顔を見てあげてください」

顔を上げると看護師が立っていた。

そうだ、俺達には赤ん坊が産まれたのだった。

今日は祝福すべき日だ。

過去の暗闇のことよりも、今をどう生きるか考えなければ。

彼女に促されるまま病室に入る。

俺の姿を認識した妻は弱弱しい微笑みを浮かべ、知らない人を認識した赤ん坊は泣き声をあげた。

「大丈夫、お前のパパだ」

そう言って赤ん坊を抱きあげた。

泣き黒子が印象的な男児だった。

休日の昼下がりに、ダクトテープで塞いだ窓から太陽光が入ってくることはもうない。引き裂かれたレースカーテンがなびくことはもうない。二人がけの食卓の向かいの席が埋まることはもうない。妻は未だに行方不明のまま。いつになったら帰ってくるのだろうか。それと入れ替わりに、変な女が家に住み着くようになった。私はあなたの妻よと、これはあなたの子よと、奇妙なうわごとばかり繰り返している。

「ねえニア、そろそろ帰ってきてもいいんじゃないか？ 確かにここは君の故郷じゃない。でも仕方がないじゃないか。私も手は尽くしたよ、結果的に数少ない友人のほとんどを亡くしてしまったけれど。過去にしがみついても何も変わらないよ、今をどう生きるか考えなきゃ。端的に言うと、この大量の生肉は私一人ではとても処理しきれないから一緒に食べてほしいんだ」

つくづく、自分という女がいやになります。今まで人様には到底打ち明けられぬような、^{けが}穢れた人生を送って参りました。そうです、話すつもりなど無かったのです。でもこのような機会ですし、お話いたします。

私は越後の、貧しい家に生まれました。ひどい暮らしでした。あなたのような恵まれた方には、わからないでしょうね。

私には母と年の離れた妹がおります。私は母が嫌いでした。いや、軽蔑していたのです。私がかんなに成ってしまったのも、おそらくは母の所為でしょう。そうに決まっております。母は売女でした。汚らわしいことです。

家では料理の上手な、優しい母を演じておきながら。週末にはいなくなるんですよ。「お茶のお稽古があるの」ですって。馬鹿々々しいわ、汚らわしいわ。

そうして妹をこさえてきたのです。父は当惑しておりました。だって私ができて以来、致していなかったんですものね。当然です。ああ、これは母から聞いたことですよ。父がいなくなってから、泣きながら話しておりました。父は絶望の末、発狂してしまいました。どうして気づかなかったのでしょうかね。父もまた、馬鹿な男です。

妹のことですが、これが存外優秀なのでありまして。よっぽど種が優秀だったのでしょうか、頭もよくて、可愛らしくて、うらやましいわ。私なんて目は小さいし、顔もにきびだらけですよ。見たらわかるでしょう？

父が妹に替わってからも、私の家は三人でした。お風呂もない小さな家でしたが、妹の幼い頃は、それでも快適でした。一つ文句を言うとすれば、トタンの屋根から響く雨音が、それはもう大きかったことくらいでしょう。しかし妹が中学に上がった頃から、だんだんと不便になってきました。原因はわかり切っています。母の^{たんす}筆筒です。お嫁に行く時に、お婆さんから頂いたらしいのですけれど、これが本当に大きくて。私らにそんな大層なもの、必要ありませんのに。ですから私は、母に何度も言いました。

「お茶のお稽古になんて行っている暇があるのなら、筆筒の一つも売ってきてもらいたいわ」

嫌味ですよ、勿論。それでも母は譲りませんでした。家宝なんですって、阿呆らしいわ。

こんな私にも、恋というものはありました。生活に困って、町の本屋で働いている時です。

ある夏の昼下がりに、私は新書の整理をしておりました。私はその時によく咳をしました。店の主

人があまり掃除をしませんで、整理していると埃が舞うのです。私はそれに弱かったのです。

「大丈夫ですか」

そう後から声を掛けられました。決して美男子というわけではありませんでしたが、誠実な方でした。私は貧乏でしたから、学は無かったですけれど、彼と私は仲良くなって、店先で世間話などしておりました。彼は話している間、顔に深い顔を作って、紙を丸めた時みたいに、くしゃりと笑うのです。私はそれが好きでした。その笑顔が本意からだとしても、また単に彼の癖だったとしても、私には良かったのです。嬉しかったのです。

そして私は、見栄を張りました。少しでも彼に、彼と同じ何かに、触れてみたかったのです。

私は学校に行きました。働きながら通うため、時間帯は夜間でした。忙しい日々でしたが、少しでも彼に近づけて、嬉しかった。楽しかった。

しかし学校というのは、私の想像していたよりずっと、上流に属するものでした。私の粗末な稼ぎでは、すぐに限界が来たのです。半年が経つ頃には、翌月の学費も払えなくなりました。

嫌でした、学校を辞めるのは。だから私には、どうしてもお金が必要だったのです。

私は身体を売りました。でも母とは全く別物ですわ。私は学びのために、彼を愛するために、仕方がなかったのです。快樂のためじゃないわ。

でも身体を売るって、大変なことよ。名前も知らない、汚らしい男性が、私に触れてくるのです。触れられたその場所から、黒い何かが身体に入ってきて、そして這い回っているのです。気持ちが悪いわ。

私の身体は、汚れてしまいました。たった一回だけじゃないかって？ 違うのです。これは精神の問題なのです。人を愛するために、身体を売ってなんかいけないのです。男性にはわからないかしら？

そして私は、本屋の仕事を辞めました。彼に会いたくなかったから。こんな身体で会っても、私は彼の前で、素直に笑えないでしょう？

でも店を辞めてしまって、今度は生活に困りました。私を雇ってくれる店なんて、そうそうありませんからね。私はまた身体を売りました。そこからはよく覚えてないわ。何度したかなんて。

何度も何度も何度も、なんどもなんどもするうちに、私の中の恋だとか、嬉しみだとか悲しみだとか溶け出して、消えてゆきました。人形みたいになりました。

しばらくこんな事を続けていると、小さい町ですから、私の噂は広まっていきました。男性で知らない方はいなかったのではないかしら。女の方はわかりません。どうせ軽蔑してるに決まっているわ。

そして、とうとうあの日が来てしまいました。私の元に一人のお客が来たのです。

彼でした。無感情に平坦だった鼓動が速くなって、私は倒れそうになりました。彼の顔は見られませんでした。でもきっと、私を蔑んでいたのでしょうかね。

彼は何か、私に声を掛けてきました。私にはそれが、よくわかりませんでした。少し遠くにいた彼がだんだんと近づいてきて、私は怖くなりました。あんなに好きだった彼が怖いなんて、可笑しいわね。

彼は、私に触れました。黒い何か、私に触れました。

気がつく、私は近くにあった石を彼に打ち付けていました。何度も何度も何度も、なんどもなんども。彼は動かなくなりました。最後に「どうして」と言っておりました。どういうことでしょうか。

私は動かなくなった彼を、ずっと眺めていました。どうしてか、そうしていると落ち着いてきて、心地いいのです。そうです、私は安心していたのです。

最初は、それが何なのかよくわかりませんでした。でも、今はわかっているのです。

それは「生」への安心でした。死という恐ろしいものに触れた時、自分がまだ生きているという事に対して、安心したのです。生きているって本当に、素晴らしいことです。こうしてお話したり、食事したりできるもの。それを教えてくれた彼には、やっぱり感謝しないといけないのかしらね。

ねえ看守さん、あなたはどう思うかしら？

了

一般作品集

紅、赤、黄、橙。鮮やかに色付いた木の葉を少し強めの風がさらさらと揺らす。秋も深まり、暖色に染まった木々の上には青空が見える。

そんな景色が窓ガラス越しに広がる落ち着いた休日の午後、静かなリビングで少年――紀田望は一人、コーヒーを淹れていた。

落ち着いた色調の戸棚やチェストに収められている人形から向けられる無数の無機質な視線を気にする事もなく、足元で動き回る掃除用ロボットを慣れた様子で避けながら彼は用意した二つのマグカップに最後の一滴まで注ぎ終える。そして片方をテーブルに置いたまま、もう片方をお盆に乗せてリビングを出た。

いくつかのドアを通り過ぎ、一際無機質な印象を与えるドアの前で望は立ち止まる。空いている手でノックするが、部屋の中から返事は返ってこなかった。

どうせ反応出来ないからノック不要、と部屋の主が言っていたのもあって元々返事は期待していない。それでも一応、入りますよと声をかけてから望はドアを開けた。

黒と焦げ茶を基調とした部屋全体を、ドアの真向かいにある大きな窓から差し込む日光が適度に照らしている。広めの部屋の壁に沿って並べられたボックスコンテナには歯車や金属板がサイズごとにまとめて入れられている。

その反対側、あまり日の当たらない場所にある机の上に置かれたパソコンのディスプレイには英語と数字が入り乱れた、何やらよく分からない文字列が表示されている。その真ん前で、キャスター付きのイスに座った三十代半ばの男性が工具を手にロボットと向き合っていた。

望が入ってきたことに気付いているのかいないのか、男性は全く反応を示さない。そんな彼の背中に向かって望は声をかける。

「博士、コーヒー淹れました」

「ああ。そこに置いてくれ」

博士と呼ばれた男性は振り返らずに答える。今は手元の作業にかなり集中しているようだ。声色から表情は分からないが、それだけは伝わってくる。まあ返事が無い時は大抵この状態である事くらい、望は今までの経験から察してはいたのだが。慣れた様子で彼は少し離れたテーブルにマグカップを置き、部屋を後にした。

家主でもある彼——博士こと紀田明良はロボット工学の専門家だ。学会やコンテストでもよく表彰を受けていて、部屋の片隅には賞状やトロフィーがまとめて置いてある。研究職としてはまだ若いのにこれだけ賞を取っている辺り、天才という部類に入るのだろう。

その才能は彼が学生の頃から開花していたようで、その頃からの知り合いは皆彼を博士と呼ぶ。それを聞いているうちに望も自然と博士と呼ぶようになっていた。

約七年前、学者や研究者とは縁遠いただの子どもだった望が博士と出会ったのはほんの偶然だった。その結果、彼に拾われ引き取られて共に暮らすようになったのは最早奇跡と言ってもおかしくない。その奇跡に感謝しながら、望は今日も主に家事の面で博士の手伝いをしていた。

リビングに戻るまでに何台ものロボットとすれ違う。彼らは全て博士が作ったもので、どいつもこいつも一癖あるやつばかりだ。今この瞬間も望の目の前で、ペットロボットがリビングと廊下の段差に引っかかった。

進む事も戻る事も出来ずにジタバタしているそいつは望の存在を感知すると、甘えるようにくうんと鳴き始める。見なかった事にしようとしてその脇を通過しかけていた望はその鳴き声で足を止める。そして少し戻ると、そいつの腹の下に両腕を入れてしっかりと抱え上げてから運び始めた。

望が博士に拾われる前からこの家にいたこいつは、たびたび改良を受けながらも今日まで元気に動いている。博士曰く、ペットロボットとしての役目を果たすため、ヒトとの距離感が近くなるようにプログラミングしてあるらしい。それもあってか長年兄弟のような距離で過ごしてきたこいつに対して、望はつい甘やかしてしまうのだ。

それなりの重さがあるそいつを慎重にリビングの床に降ろすと、そいつは何故か勢いよく台所の

方へ走っていった。

え、うそお。

困惑が望の口からこぼれる。あの甘えたような態度は一体どこへ。完全にペットロボットに振り回された彼の目の前を、さっきの掃除用ロボットがのうのうと横切った。

謎の疲労感を抱えたまま望はソファに座る。程よく反発してくる背もたれに体重を預けて深く息を吐くと、疲れがするりと抜けていく気がした。

いい感じに冷めたコーヒーを一口飲み、彼はふと再び視界に入った掃除用ロボットの動きに目をやった。

丸くて平べったい形をしたこいつは少し広い所で二、三回転するクセがある。不規則なタイミングで回るこいつの動きを、望はちょくちょく観察している。まるで生き物みたいにあちらこちらへと動き回るのもあって、ずっと見ても飽きることはないのだ。ちょうどやるべき家事はほとんど終えて暇になっていた望は、コーヒーを飲みながらそいつの動きをしばらく眺めていた。

カップの底が見えてきた頃、リビングのドアが音を立てて開く。入口の方に顔を向けるとちょうど博士が入ってくるのが見えた。

彼の姿が台所に消えてすぐにカップを乱雑に食洗機へ入れる音が聞こえてくる。内心ひやひやしてはいるが望は声をかけない。博士も最低限の力加減はしているのか、これのせいで食器が割れた事は今まで一度も無い。それに何度言っても食器を雑に扱うクセは治らないため、望はもはや諦めていた。陶器同士がぶつかり合う音が止まってしばらくすると、博士はペットロボットを小脇に抱えて戻ってきた。

望の向かいに座り、ロボットをテーブルに置くと彼はポケットから工具を取り出して丁寧な手つきで点検していく。ネジは緩んでいないか。稼動部は正常な動きをしているか。表面に大きな傷は無いか。

それらが一通り終わると今度は近くまで来ていた掃除用ロボットをひっくり返して同様に点検する。それが終わるとリビングにある他のロボットも一つひとつ確認していく。戸棚に飾られていた人形達もほこりが付いてないか確認し、付いていれば綺麗に拭き取る。丁寧に、繊細に。

一連の動きを滞りなく行い、リビング内にある全てのロボットと人形の点検を終えると博士は望の隣に座る。そして無言のまま望の手首を掴み、関節の動きを確認し始めた。

望もロボットと同様に、この家で暮らし始めた翌日から朝晩欠かさず点検を受けている。大きなケガは無いかな。関節の動きに異常は無いかな。顔色は悪くないかな。手際よく進んでいく点検の妨げにならないよう、望は体の力を抜いてされるがままにする。

「錆びは無いかな」

「はい」

点検中に交わされるたった一つの質問。実はその正確な意味を望は知らない。時々博士が使う独特の言い回しを望は未だに理解出来てないのだ。おそらくだが、体調は悪くないかな、という意味だろうと解釈していつも返事をしている。博士から特に何も言われないうし、そこまで外した答えではないのだろう。

最後に目の状態を確認し終わると博士は部屋に戻っていく。リビングに来てから点検を済ませて出て行くまでの間、彼の表情は一切変わらなかった。

遠ざかる博士の足音を聞きながら望は周りのロボットや人形に目を向ける。そして彼らと自分の体を見比べ、一人首を傾げた。

望に触れる時、博士は彼らを扱う時と同様に丁寧に繊細に触れる。まるで壊れ物に触れるように。

点検を受けるたびに望は考える。

僕と彼らの違いは何だろう。僕は本当にヒトなのかな。もしかしたら僕は人形なのかもしれない。ヒトになれない、出来損ないの、人形。

だがそれを博士に問う勇気も無く、彼は今日も答えの出ない疑問を胸の奥に押し込んだ。

決して薄くはない雲が空全体を覆う。濃淡が滑らかに変わる灰色がかった空の下、風にあおられ

た暖色の葉が宙を舞っている。地に落ちてカラカラに乾燥したものだけでなく、まだ瑞々しさが残っている状態で枝に付いている木の葉まで大量に巻き込んだ木枯らしが窓ガラスに吹き付けてくるのを眺めつつ、望は今日も二人分のコーヒーを淹れていた。

博士の部屋まで持って行こうとカップをお盆に乗せたところで、望はふと貰い物のクッキーの存在を思い出す。キッチンの戸棚に仕舞っていた缶を引っ張り出して中からクッキーを何枚か小皿に移すと、コーヒーと一緒に運び始めた。

廊下に行くロボットの数がいつもよりも少ないな、と感じながらも望は問題なく博士の部屋の前に着く。二、三度ノックをしたが相変わらず反応は無い。

またロボットを組み立てているのだろう。そう検討をつけ、望はドアを開ける。だが視界に入った光景は彼が予想していたものとは少しだけ違った。

今日は外からあまり日光が入ってこないからか、室内には電気が点けられている。十分に明るくなった部屋の中、博士はイスに座った状態で机に向かっている。そして机の上にはロボットが横たえられている。そこまではいつも通りだ。

しかし普段彼の手元を照らしているディスプレイは電源が落とされ、代わりに卓上の電灯が点けられている。そして机の上に置かれたロボットは作りかけの真新しいものではなく、少し古いものだ。所々色あせているそいつは届いた郵便物をリビングや博士の部屋まで運ぶため、つい昨日まで廊下の壁沿いを走っていたやつだ。

だがそいつは今、博士の手によって次々とネジを外されていく。よくよく見ればタイヤや胴体部分などのいくつかのパーツへと分けられている最中だった。

望にとっても馴染み深いそいつを博士は淡々と手際よく分解していく。その光景は望の目にはどこか異質なものとして映った。

「そいつ、捨てちゃうんですか？」

相変わらず振り向く気配が無いその背中に向けて、望は恐る恐る問いかける。取り外したネジを長さごとに分別しながらではあるが、博士は一応返事をする。

「タイヤが壊れただけだ。捨てはしない」

「じゃあなんで、今、バラバラにしてるんですか」

「デザインごと一から作り直す。一度分解してまた組み直す予定だ。大部分の部品は劣化も少ないし再利用出来るだろう」

望の質問に答えながらも博士の手は動き続ける。まだロボットだった頃の面影を残していたパーツ達は、見る見るうちに金属板、ネジ、歯車などの単なる部品へと変わった。

テーブルにカップと小皿を置く手が震える。さっきまではロボットの一部分だった金属片を直視できない。部品の取捨選択を始めた博士の妨げにならないよう、望はなるべく静かにドアを閉めた。

廊下をとぼとぼと歩きつつ、望は先ほどの光景について考える。博士の手で淡々と行われる分解と再構築。その過程に思いをはせるうちに、彼の思考は徐々に自分とロボット達の違いへと移っていった。

彼らと違って僕は分解できない。部品を再利用することもできない。つまり直せないくらいに壊れたら、二度と使えなくなったら捨てられる未来しかないんだ。

捨てられる。その単語に引きずられて過去の出来事を思い出し、空のお盆を掴む彼の手に力が入る。

あの人だってそうだった。僕が邪魔だったから、いらなかったから僕を捨てた。だから博士が同じ事をしたっておかしくはない。

底無しの恐怖が望に襲い掛かる。心臓を強く握られたような痛みを耐えながら、彼はリビングまでの短くも長い道のりを戻っていった。

博士がロボットを分解しているのを見てから数日が経ったある日の晩、望は夢を見た。それは彼の過去を、まだ彼が紀田望では無かった頃の記憶をなぞるものだった。

血のつながらない父は彼の存在が気に食わなかったのか、連日の暴行の末に当時まだ七歳だった

彼を路地裏に捨てた。もしかしたら後々回収はするつもりだったのかもしれない。そのまま放置して、二度と彼の顔を見ないつもりだった可能性の方が高いが。どちらにしろ、形式だけでも父親であった人が自分を捨てたという事実は彼の心を強く傷付けた。

コンクリートへ、そして弱り切った彼の体へと、夜の冷たい雨は等しく遠慮なく打ち付ける。雨水はすり傷に染み込み、刺すような痛みを与える。殴られた所は相変わらず鈍く痛む。寒さも相まって手足の感覚は段々と無くなっていく。

道行く誰もが見て見ぬ振りをする中、ただ一人、博士だけが彼に手を差し伸べてくれた。

「冷たいな」

手と手が触れた時、博士はぼつりと呟く。

それは余計な感情を含まない声。淡々とただ事実を述べただけの声。聞き慣れた、いつもの声。

その余韻が消えるのとほぼ同時に望は跳ね起きた。遮光カーテンの隙間から朝日が細く差し込む部屋に彼の浅くせわしない呼吸が響く。

ここは、僕の部屋。僕は、紀田望。さっきまでは、あれは、僕の過去。そう、いつもの悪夢だ。

自問自答を繰り返す事で気持ちを落ち着けようとするが、突き放されたような不安と孤独感はなかなか消えない。

胸に手を当てる。普段より少し速い心臓の拍動が手のひらに伝わってくる。それを確かめて、彼はようやくほっと息をついた。

初めて悪夢を見た日から続けているこれは、今では毎朝の習慣になっている。心拍を確かめるまで、今自分は本当に生きているのか不安になるのだ。

何となくベッドから降りる気分になれず望は布団ごと膝を抱える。お気に入りの緑色のカバーに包まれた、日だまりの香りがする羽毛布団に頬を埋めて深呼吸をする。

今日は日曜日だから少しくらい遅くなっても大丈夫。朝ご飯は博士が作る日だし、洗濯は昼前に終わればいいし。

言い訳を頭の中で繰り返しながら自分が発する呼吸音を確認する。しばらくして布団から顔を上げて、夢の最後に聞こえた博士の言葉はまだ頭に残っていた。

着替えを終えてリビングに向かうと、博士がソファに深く腰かけた状態で虚空を見つめていた。とっくに朝食を済ませて部屋に戻っていると思っていた望は、驚きながらも彼に声をかける。

「おはようございます」

博士はピクリと肩を震わせると、のろのろとした動きで望の方を向く。その顔は珍しく眠そうだ。

「ああ」

一応反応が返ってきたのを確かめて、望はちらっと台所を覗く。食器も調理器具も昨晚とほぼ同じ位置にある。あの様子からして博士も朝食はまだなのだろう。そう結論付けて視線を戻すと、彼はまだドアの方を向いたままぼんやりとしていた。

「徹夜ですか？」

「ああ」

「少し横になったらどうですか？ 朝ご飯、今日は僕が作りますから」

「ああ」

よほど眠かったのか、博士は素直にソファのひじ掛けに頭を乗せて横になる。寝息が聞こえてきたのを確認してから望は台所へと向かった。

朝食を終えても博士はまだ眠そうな顔をしていた。それもそうだろう。普段の睡眠時間は小学生並みである彼にとって、徹夜は辛いものだ。

何か急ぎの仕事でもあったのかな。それとも眠れない事情があったのかもしれない。

いつものクセで淹れたコーヒーを博士の前に置きながら、望は不安げな顔で問いかける。

「急ぎの仕事だったんですか？」

「いや。ひらめいた勢いのまま作業をしていた。気付いたら朝だった」

「なるほど。納得です」

博士の答えに少し安堵して、望もソファに座る。彼が寝食を忘れて作業に没頭する事自体はよくある事だ。ここまでひどいのは流石に数回しか見た事が無いが。

コーヒーを一気に半分ほどあおると博士は深く息を吐く。

「点検を終えたら寝る」

そう言いながら、彼はその辺を走り回っていたペットロボットを片手で楽々と捕まえた。

食器が片付けられたテーブルの上で、博士はロボットや人形の点検を一つひとつ丁寧に行う。眠そうな顔をしているが、その手元が狂う事は無い。

そして望はいつも通り最後に点検を受ける。初めて会った時と同じ、冷たい雨の中でもあたたかかった博士の手で。ただ温度が高いだけでなく生きている質感が確かにした、あのぬくもりを持つ彼の手で。

だが普段とは違い、目の状態を確認し終えた後も博士はソファから立ち上がらなかった。それどころか、望の両頬を両手で包んだままの姿勢でぼんやりとしている。ただ眠いだけなのか、それとも望の瞳を通してどこか遠くを見ているのか。相変わらず表情は一切変わらないため、彼が何を考えているのか望には分からない。

お互いに口を開かないからか、壁掛け時計の針の音がやけに大きく聞こえる。望より少し高い所にある博士の目を眺めているうちにいつもの疑問が胸をよぎる。何となくだが、聞くなら今だと思った。

「博士、」

「ん」

「僕は心臓が動いてます」

その言葉で、博士はちゃんと望を見た。ついさっきまでぼんやりとしていた彼の目には今や眠気など感じられない。こちらを真っ直ぐ見ている彼の瞳に映る自分の姿を見ながら、望は続ける。

「体温もあります。心の動きもあります。背も伸びてます。声も低くなってきてます」

息を吸って、言葉を紡いで。繰り返すうちに自然と涙がこぼれる。望の内部から溢れ出した感情が口から出て行く。何故だろうか、心からの言葉でなければ、今真っ直ぐに向き合っているはずの博士に届かないような気がしたのだ。

「でも博士は僕を人形のように扱います。彼らと、ロボット達と同じように」

一瞬、言葉が詰まる。これ以上言ったらもう戻れなくなるのではないか。今の適度な距離感が全て崩れてしまうのではないか。それでも望は止まれなかった。

「僕はヒトになれないんですか？」

望が流した涙は頬を通過して博士の手に伝う。博士の表情は一切変わらない。動じた様子も無く、何かを言う気配も無い。だが望から目を逸らさない。まるで博士だけ時間が止まったようだ。

変な事を聞いたから失望しているのかもしれない。くだらない事を、と怒っているのかもしれない。

あまりに長い沈黙に望が不安になってきた頃、博士はようやく口を開いた。

「お前は俺以上にヒトだ」

その言葉に望は目を見開く。その拍子にまた涙が一筋流れた。望の頬に触れたまま、博士は指先でこちなく涙を拭う。

「笑うし、泣くし、時々怒る。感情も好き嫌いもはっきりしている。ちゃんとヒトだ」

そこで一旦口を止めて、博士は望の頬からそっと手を離した。続ける言葉を探しているのか、彼の視線は望から逸れて下方を彷徨っている。

「俺は、ヒトとの上手い関わり方がよく分からない。家族らしい接し方は、特に。だからお前

を拾った時、大事なものと同じように触れるしか方法が思いつかなかった」

ぼそぼそと声のトーンを落として彼は話す。教会で懺悔する子羊のように、叱られるのを恐れる子どものように。

「誰かに託した方が、お前も幸せだっただろう。今思えばだが――いや、あの時も気付いていたな。だが手放せなかった」

ああ、と声をもらして博士は顔を上げる。その表情は新しいロボットのアイデアをひらめいた時と同じ、驚きと納得が混在している顔だ。

「俺は、お前のぬくもりに依存していたのかもしれない」

ぬくもり、と小さな声で望は復唱する。

望の声に同意するように頷き、博士はそのまま望の肩に頭を預けた。いや、頭をぶつけた、の方が正しい気もする。その勢いはもはや頭突きに匹敵するものだった。

博士の額が肩の骨に当たったのか鈍い音がする。その音に見合った痛みに加え、突然もたれかかってきた博士の重みで望はぐえっ、と間抜けな声を上げた。

まだ齢十四歳の彼には真っ正面からのしかかってきた成人男性の全体重を支え切れず、望はソファの背もたれと博士に挟まれる形でずるずると体制を崩す。首をひねってどうにか博士を見ようとするが、完全に肩に突っ伏しているせいで彼の表情までは見えない。

「重っ、博士重いんですけー」

「あたたかいな」

たった一言。だが望の動きを止めるのには十分だった。

よほど疲れていたのか、博士はそのまま眠ってしまった。これ以上潰されないよう抜け出すついでに望は彼をソファに横たえる。一体どんな顔で寝ているのかと興味本位で覗いてみれば、彼は安らかな顔をしていた。

ふと、博士の言葉をもう一度思い返す。ぬくもり。血の通った生き物が持つ、生きている証。いつもの淡々と事実を述べる声ではあったが、それでも望は今、お前は生きていると博士に認めら

れたように感じた。

胸の奥を撫でるようなむずがゆい感触に彼は頬を緩める。そわそわとソファの前を行ったり来たりしてから彼は改めて博士の顔を覗く。

「博士もあったかいですよ」

博士には聞こえていないだろうが、それでも望はちゃんと言葉にして伝える。満足したように微笑んでから、彼は何かかける物を取りにリビングを出て行った。

レースカーテン越しに柔らかな陽の光が差し込み、室内をほの明るく照らしている。戸棚やチェストに並ぶ人形達が静かに見つめる中、部屋にはロボットのモーター音と博士の微かな呼吸音だけが響いていた。

「冷たいな」

その言葉が耳に届くのとほぼ同時に望は目を覚ます。

中途半端に開けたままだったカーテンの間から飛び込んでくる朝日が見慣れた天井を白く照らしている。それを寝ぼけた頭のまま数分ほど眺めてから、望はのそのそと布団から身を起こした。

いつものように胸に手を当てる。規則正しい脈拍が手のひらに伝わってくる。いつもと同じ感触に安心して彼は一つ大きな息をついた。

博士とのあの問答から数週間が経った。相変わらず悪夢は見るが、以前ほど動揺する事は無くなったような気がする。それは多少なりとも自分が成長した証だろうと望は一人結論付けていた。

胸元から離れた右手を硬く握って、ゆっくりと開く。感覚を確かめるように彼はそれを数回繰り返す。

冷たい、と。あの時、そして夢の中で博士はそう言った。だからこの手は多分、あの時は本当に冷たかったんだと思う。それこそ人形のように。けど今はあたたかいから、ちゃんと生きてるから大丈夫。今の僕はヒトだ。確かに、ヒトだ。

ぐっと一際力を入れて拳を握った所で一旦思考を止め、弾みをつけてベッドから降りる。そのまま窓際まで歩み寄りカーテンを勢いよく開けると、そこには爽やかな水色に白を薄く柔らかく伸ばした空があった。

一人ぼっちの夜は明けた。ぬくもりに生きる朝が来た。

日の光に全身を優しく包まれ、望の顔には自然と笑みが浮かんでいた。

少し冷たい風が、ほのかに漂う甘い香りを届けてくる。桜が咲き乱れる山々を横目に舗装された坂道をしばらく登り、峠の中腹まで来るとカーブの先に開けた場所が現れる。

地元の人から展望台として親しまれているそこには立派な大木が一本そびえ立っている。その側には小さな祠が一つ、こじんまりと建っていることも住民の間ではよく知られている。何の変哲も無い、のどかな光景。一つ違和感を覚えるならば、枝の上に人影が見えることだけだった。

その人影は地面から四メートルほどの高さにある枝の上に座っている。崖の下から吹き上げる強めの風を受けても平然とした顔だ。いつ枝から落ちてもおかしくない状況で落ち着いていられるほどの度胸を持った人は滅多にいないだろう。それもそのはず、人影の正体は人では無い。祠に祀られている神様、いわゆる道祖神と呼ばれる存在だ。

あどけない子どもの姿をした神様は、春の花々と似た淡い黄色の衣を身にまとっている。薄灰色の袴に包まれた足は細く白い。履いている下駄をどこかへ飛ばさないよう気を付けつつ、その足をぶらぶらと楽しげに揺らしている。そして肩の上で切り揃えられた黒髪を風に遊ばせながら眼下に広がる町を眺めている。

神様が一つ二つ瞬きをする間に桜は散っていく。神様の感覚からすれば太陽が昇ってから沈むまでなどあつという間だ。それこそ目を閉じて一呼吸もすればまた次の太陽が昇っていたりもする。永遠に等しい時間を生きる神々にとってはそれが普通のことであり、当然のことであり、常識だった。

何度か瞬きをした後、神様はふと峠の麓に目を向ける。そこには動きやすそうな服装をした若者が二、三十人ほどいた。

この峠を通る人々を見守るのは神様の仕事の一つだ。神様は一切瞬きせずに、じっと彼らを見つめる。

彼らはこの町にある高校の陸上部で、毎年桜が散り始めてから雪が降るまでの間、この峠を使って練習している。そのため個人ではなく団体としての認識ではあるが、神様も自然と彼らの存在を覚えていた。

慣れた様子で先を行く面々は皆何度か見た事がある顔だ。余裕そうな表情で軽やかに、だが力強く峠を駆けていく。

その背中を必死に追っているのは初めて見る顔ばかりだ。この春入部したての新入生だろう。先輩達に置いていかれないよう、息を切らしながら慣れない靴で頑張っている。

さらに後ろにはこれまた見覚えがある顔が二、三人続く。新入生が迷子になったり無理しすぎたりするのを防ぐため、しんがりを務めているのだろう。新入生に向かって時々声をかけている様子は、しかし神様の目には雛鳥が雛鳥の面倒を見ているように映る。

互いに声をかけ合い、時には全力で競い合う、活力に満ちた若い命達を神様は楽しそうに眺めていた。

日も暮れてきた頃、練習を終えた彼らは疲れた顔でぞろぞろと学校へ帰っていく。だが五、六人ほど、流れに逆らって峠を登ってくる部員がいた。

展望台までやってくると、彼らはカバンから次々とお供え物を取り出し、祠の前に並べていく。中には季節外れのりんごやみかん、ミネラルウォーターのペットボトル、両手に収まるほどの大きさの箱もあった。

全て置き終わったのか、彼らは祠の前で横一列に並ぶ。中央にいた人物につられるような形ではあるが、きちんと二礼二拍手を行い、そのまま目を閉じる。その表情は皆真剣なもので、決して不本意ながらここまで来たわけでは無いことを物語っている。

「今年も部員全員、大ケガすることなく走り切れますように」

中央にいた例の人物が代表として願いを口にする。彼は二年前の春、先輩についてくる形でお参りして以来、峠での練習期間中は毎月のようにお参りを続けていた物珍しい人間だ。他の人間より何倍もの回数その顔を見ていたのもあって、彼個人のことは神様もよく覚えていた。

彼が初めて来たあの日から今日まであっという間だった。当時はまだ祠の陰に隠れるほどだった

背丈は、今や祠を超えている。人の身における時間の流れがあまりにも速いことを実感しつつ、神様は彼らの願いに耳を傾けた。

一礼をした後に彼らが峠を降りたのを見送ると、神様は枝から軽やかに飛び降りて祠のすぐ脇に着地する。

祠の前に回り込み、神様は背伸びしながらお供え物を覗き込む。上下左右、様々な角度から十分すぎるくらいに観察し、その一つひとつを手を取った。

りんごはその香りを楽しんでから頬ずりをし、みかんも同様に香りを楽しみつつ小さな手の内で転がし、ペットボトルはキャップを付けたままでも伝わってくるひんやりとした感触を手のひら全体で感じる。

そして最後に箱を手に取り、その蓋をゆっくりと開ける。中に入っていたのは真っ白なスニーカーだった。

神様は目を丸くしながら、丁寧にそれを取り出す。今まで履いていた下駄を祠の脇に置き、そのそばに置いたスニーカーへ爪先からゆっくりと足を差し入れる。先端からかかとまですっぽりと収まったことを確かめてから、靴ひもをきゅっと硬く締める。その場で何度か跳ね、履き心地を確かめると神様は誇らしげな表情で胸を張った。

そのまま重力を感じさせない動きで祠の上へ、そして枝の上へと登り、神様は立ったまま町を眺める。崖下から吹き上げる風を受け、艶やかな黒髪がそよめく。衣の裾が揺れるたびに、新緑とよく似た萌葱色に染まっていく。気付けば袴の色も遠くの山々と同じ深緑に変わっていた。神様の全身が優しい自然の緑に包まれる中、その足元ではスニーカーの白が映える。この白もいつか自然の色に染まる日が来るのだろう。そんな予感を胸中に抱きつつ、神様は風の香りに意識を移す。

風が運ぶ花々の甘い香りは徐々に遠くなりつつある。そして新緑の爽やかな香りがすぐそこまで近付いている。春が終わった。そして夏が来る。

巡る季節に思いを馳せながら神様は今日も木の上で微笑む。あどけない子どもの姿ではあるが、枝を力強く踏みしめて仁王立ちするその背中には確かに神としての威厳、そして威光が宿っていた。

三題嘍「晚春」「崱」「靴」

石井凌介が大学生になって二度目の春が来た。

うらかな四月の陽気は白く柔らかく世界を映し出し、目覚めた草木の薄緑色は空に向けて、一斉に手を伸ばしていく。

彼が日々の平穩を貪っている間に、入学式や新入生のオリエンテーションがあったのだろう。キャンパス内の雰囲気は、幾分か明るいものになっていた。

一方で、彼の心情は依然として――入学当初から変わらず――鬱々としたものだった。

彼は大学受験の際、自分のレベルよりも相当高い学校を選んだ。言うまでもなく、彼は山のような苦労を重ねたが、本人の弛まぬ努力と本番での僅かな幸運の結果、見事に合格を果たした。

しかし、その後が問題だった。

入学後、彼はすぐに落ちこぼれることになる。周囲は彼よりも記憶力に優れ、思考能力も高い――端的に言えば、元から彼よりも頭の良い――人々だったからだ。

彼は劣等感に苛まれた。他人を通して、自身の非力を突き付けられることに耐え切れなくなった。

そして、彼は人と関わることを止めた。

「石井君」

講義が終わって学部棟の廊下を歩いている時、背後から呼び止められた。振り返ると一人の女子学生が立っている。目が合うと、彼女はにっこりと笑った。

「再来週に学部祭があるよね」

こちらの挨拶も待たずに彼女は要件を切り出した。この性急さが彼女らしい。

「そうだね」

凌介も慣れたもので、軽く相槌を打つ。

「というわけだから」

と、彼女は返した。

凌介が未だに慣れないのは、彼女の話の飛び方だった。普通ならば、行く予定は、等と訊くものをこのように幾つも工程を省いて話を進める。

そして、理解できなかった場合、目で補足を促す。これが二人の会話の一連の流れだ。

彼女は言う。

「石井君の分も申し込んでおいたから」

これでもまだ突拍子もなかった。

つまり、勝手に人の分まで学部祭に申し込んだらしい。

ちなみに、学部祭というのは学部内の新入生と在学生の交流会のことだ。

言いたいことの山が一気に膨れ上がる。

「君は俺の人見知り知っているよね」

「勿論」

彼女は悪びれもせず言った。

「何でそれで勝手に申し込んだ」

「面白そうだから」

彼女は実に愉快そうな笑みを浮かべた。

その笑顔に凌介も毒気を抜かれる。

実の所、凌介は彼女のことを特に嫌ってはいない。むしろ、彼女は本当に数少ない話し相手の一人だった。

石井が人との関わりを断ったのは、去年の今頃だった。それは今も特に変わっていない。だが、彼女を含めて僅かな例外はあった。

彼女と初めて話したのは去年の冬のことだった。今まで殆ど話さなかったとか、同じ学部だとか、今も凌介が幽霊と化しているサークルに一時期いたとか、そんなことを話した。

何故人との関わりを断っていた凌介が彼女と話す気になったのか。それはあの時の会話で、最初に彼女の言葉が「石井君は人見知りなんだね」だったからだ。

彼女は悪戯好きで、尚且つ明け透けと物を言う。だが、それらは全て彼女の良識の範囲内であって、相手を傷付ける意思は微塵もない。

つまり、彼女と関わることは凌介にとって劣等感云々に関係なく愉快だった。

「それじゃ、またね」

それだけ言い残すと、彼女は去って行った。

人の下に来ては、土足で人の心に踏み込んで、要件が済めば足跡を残して帰って行く。けれども、その後の心は荒れていなくて、むしろ晴れやかで、清々しかった。

例えるならば、彼女はきっと「台風」だろう。

学部祭当日、凌介は重い足を引き摺って、指定された会場の大講義室に来ていた。昨日になってようやく開いた案内冊子によると、グループを作り、適当に話して、その後ご飯を食べに行く、という企画らしい。

明らかに苦手なイベントだった。自分がこの場にいることに強い違和感を覚える。羊が一匹だけ山羊の群れに紛れているような感覚だった。

人混みの中、呆然と立ち竦んでいると、

「楽しんでそうだね」

声を掛けられる。彼女だった。

皮肉めいた言葉もここまで見え透いたものになると、いっそのこと清々しい。

「まだ何もしていない」

「うん、知っている」

即答する彼女。

一瞬、水面が風に煽られて白波立つように、凌介の心の均衡に揺らぎが生じる。

凌介は彼女に対する評価を訂正することにした。どうやら彼女は、他人の気分を害することにあまり抵抗はないらしい。

「流石に今回は度が過ぎたかな、と思うよ」

そこですかさず彼女の謝罪が投入される。凌介の熱を帯びた思考が瞬く間に冷却される。

いつものことだが、彼女は他人の心が読めるのかと思う。凌介に限ったことかもしれないが。

「君は人の心が読めるのか」

凌介は素直に思ったことを尋ねた。これも今回だけではないはずだ。

「そんなことはないけど、どうして」

彼女は不思議そうな面持ちで訊いた。彼女の表情を見ていると、読心術が使えるというのはただの錯覚ではないか、凌介はそう思えてくる。だから、

「なんでもないよ」

凌介はそれだけを返した。

会場の指示でグループに別れることになった。それぞれにテーブルが割り当てられ、各学年から一人か二人が割り振られていた。

凌介は彼女と同じグループだった。実は心底安心した。

しばらくして人が集まり、交流がはじまった。年長者の四年生から自己紹介が始まり、その後、凌介もそれに続いた。

会話の中、凌介は借りてきた猫みたいに黙りこくっていた。隣の彼女とは対照的だった。

ある時、新入生から一年次の生活や学習について質問が出た。記憶の新しい二年生が答えるべきという流れだったが、凌介は彼女に丸投げするつもりだった。

ところが、彼女は、

「どうだったかな」

と、凌介に話を振ってきた。

その時、彼女は思案中といったような表情の中で、目だけがやけに笑っていた。

凌介は軽い恨めしさを覚えつつも訥々と、やや事務的な口調で答えた。

その壊れかけの機械案内みたいな滑稽さに、凌介自身も相当な自己嫌悪を覚えたのだが、説明の後、

「参考になりました」

と、新入生が言った時、ほんの少しだけ心が晴れやかになった気がした。

社交辞令だったのかもしれないが、人の役に立つという経験を絶って久しい凌介には、新鮮に感じられた。

休憩時間になって、一度解散することになった。凌介は会場の隅に椅子を見つけて、腰を下ろした。

人と話すのもそれほど悪くない、そう考え始めていた。

「楽しんでそうだな」

隣から声がした。目を向けると、見知った顔があった。彼は高校時代からの付き合い、つまり数少ない凌介の交流断絶の例外だ。

「どうしてそう思う」

凌介が問う。挨拶はいらない。

「そう見えたから」

彼が返した。

普段は飛び石の上を渡るような会話ばかりだから、凌介のペースで話が進むと安心する。

「お前が来るとは思わなかったけど、何か心境の変化でもあったのか」

彼が訊いてきた。

「気まぐれ」

凌介はそれだけ答えた。

彼は「そうか」とだけ言って去った。

ひょっとしたら、彼は凌介が学部祭に来た理由に気付いているかもしれない。だが、凌介から言わなければ彼は何も追求しない。それが彼の美德だった。

凌介は何となく周囲を見回す。

不意に、凌介の視線の先に彼女の姿があることに気付いた。

彼女は手振りを交えて話をして、熱心に話を聞いて、時折考え込んで、そして笑っている。本当に楽しそうだった。

その様子を正確に形容するとしたら「彼女は幸福に満ち溢れている」だと凌介は思う。

気付く。

自分の内側に目を向ければ、ほんの僅かな幸福を見出すことしか出来ない。その小さな幸福を囲い込もうとして、孤独になっていく。

しかし実際、幸福は外からやって来るものだった。例えば、人と話し合っ、考え合っ、笑い合っ――つまり、幸福は人と関わって得るもので、人との関わりを断つのはむしろ逆効果だった。

これから少しずつ、人と話してみよう。

凌介はそんな気持ちになっていた。

あれから数日が経過した。

凌介は人と話そうと努力を始めた。しかし実際は、なかなか上手く事が運ばないもので、誰かに話し掛ける段階で悪戦苦闘していた。

その日の講義後、二人は一緒に帰宅の途についていた。

傾きつつある太陽は、その陽光に微かな茜色を帯び始めて、帰路を歩く二人の影法師を長く延ばしていた

「私の名前を呼んでみよう」

唐突に彼女は言った。

凌介はその意図が掴めずに困惑する。目で説明を促すと、彼女は楽しそうに続けた。

「石井君は私を呼ぶ時、いつも『君』だよな」

そのことには凌介自身も気付いていた。だが、彼女に限らず誰かに話し掛けようとする時、何故かその人の名前を呼ぶことに強い抵抗を感じてしまう。そのため、殆どの場合で「君」と呼んでいた。

彼女は更に続ける。

「人の名前を呼ぶことは『あなたと関わりたい』という意思表示」

なるほど、と凌介は思う。確かに、名前を呼ばれた時は「この人は自分に要件があるのだな」と考える。正鵠を射た言葉だと思った。

「だから、はい、河内さん」

「……えっ」

再びの急展開に凌介の理解はまた追い付かない

「ほら、繰り返す、河内さん」

どうやら復唱する、ということらしい。

そこでようやく理解する。おそらく、彼女は凌介の人の名前を呼ぶことに対する恐れにも似た抵抗を――その理由までかは判らないが――知って、その壁を乗り越える手助けをしているのだ

。見ると、彼女の目は真剣で、真っ直ぐに凌介を見据えているのに、その色は何処までも優しくかった。

その純粋な感情が怯懦に凝り固まった凌介に染み渡り、少しずつ口を動かしていく。

「河内さん」

ゆっくりと復唱する。

「うん上出来」

彼女は満足そうに笑った。

先程よりも傾いた太陽は、鮮やかな茜色を空に映して、一方夕闇は歩く二人の間に薄く広がっていく。

凌介は微かに、河内さん、と舌の上で転がしてみる。それはまだ少しだけ苦くて、だが今までにはない甘い味がした。

「河内さん」

その言葉は意図せず口に出た

「どうしたの」

彼女が答える。すると凌介は妙に気恥ずかしくなってしまう。

「なんでもないよ」

努めて素っ気無く返答した。

より一層世界は暮色を深めていく。

彼女は嬉しそうにくすりと笑った。

三か月ほど時間が流れた。

凌介は少しずつ人と話すようになった。会話に妙な間があったり、途切れ途切れだったりしたが、それでも一生懸命に人と関わろうとした。また、サークルにも再び顔を出すようになった。

凌介の交流断絶の例外の彼も「どんな心境の変化」と何度も聞いてくるが、凌介はその都度「気まぐれ」とだけ返した。

その日、凌介は講義が終わった後、河内さんに呼び止められ、一緒に帰ることになった。

それは、初めてさんの名前を呼んだ日以来のことだった。

真夏とはいえ、外はすっかり暗くなっている。住宅街に張り巡らされた夜道を、民家の明かりと街灯が薄明るく照らし出していた。

彼女は何も言わなかった。その状態がずっと続くので、凌介も困惑しつつあった。

しばらくして、河内さんがぽつりと言った。

「石井君、変わったね」

声音には抑揚がなく、凌介が目を向けても、何も言おうとはなかった。

明け透けと物言う性格の彼女には珍しく、言葉に何か含まれているものが感じられた。言葉に何か含まれているものが感じられた。

怒っているのだと凌介は思った。

二人の間に沈黙が続く。また時間を置いて、彼女は口を開いた。

「どうして最近私を避けているの」

凌介は気にした様子もなく、平然と返す

「そんなことはないよ」

「誤魔化さないで」

叩き付けるように彼女が言った。

鋭い眼光が凌介を射抜く。本心を貫くような光。

そして、思い出す。忘れようとしていた感情。

人と関わるために仕舞い込んだ鏡。

――果てしない劣等感

凌介は自身の劣等感に蓋をすることで、人と関わる事が出来るようになった。

ところが、彼女は凌介にとってあまりにも聡明だった。かつては愉快だった彼女の爽快さも、凌介のひた隠しにした劣等感を刺激しかねなかった。

だから、凌介は彼女を避けた。

結局の所、凌介の本心は曝け出されてしまった。

凌介は素直な気持ちで彼女の問いに答えることにした。

「君は聡明で、僕は馬鹿だから」

突き放すつもりだった。凌介はそれだけ言うと、足早に歩いていく。

しかし、先程まで隣にあった気配がなくなると、やけに落ち着かなくなった。すると、後悔の念が次第に湧き上がってくる。

凌介は振り返った。見ると、彼女は静かに凌介を見据えていた。そして、

「どうして」

微かに空気を震わせる。

「どうして、分からないのかな」

彼女は溢れそうな程の悲しみを目に湛えていた。同様にその言葉にも。

凌介は驚いた。彼女の言いたいことも、悲しむ理由も分からなかったから。

沈黙が続いた。

しばらくして、彼女は余計な物を吐き出すように大きく嘆息すると、彼女はぽつりと言った。

「馬鹿でもいいんだよ」

「えっ」

「うん、馬鹿でもいい」

ゆっくりと繰り返す。

「……どういうこと」

いつものように補足を頼むと、彼女は言い聞かせるように言った。

「石井君は『人の長所を見る眼が良すぎる』んだよ」

間をおいて、続ける。

「だから、自分がくすんで見える」

凌介はようやく理解した。

彼女は凌介が他者の長所をあまりにも鋭敏に認識するため、自身の長所に気付かないと言っている。

明るい月夜は星が見え難いようなものだ。

凌介は馬鹿ではない。だが、他者の輝きに自身の輝きを見失うくらいなら、他者の輝きに気付けない馬鹿でもいい。彼女はそのような意味で「馬鹿でもいい」言ったのだ。

ふと、気付く。

彼女が凌介の下に歩み寄ってくる。

そして、一言。

「自信を持って、少年」

閑静な住宅街に激励の声を響かせると、彼女はそのまま歩いて行った。

凌介はすぐに後を追う。途中で一度夜空を見上げる。

微かに潤んだ瞳の向こう側、星々の小さな光がゆらゆらと光芒を引いていた。

時は流れ、夏も終わりに差し掛かっていた。

凌介には一つだけまだ分からないことがあった。

一連の対話の中で、何故彼女は凌介の心理を理解して、諭したのか。

ある時、彼女に訊いてみた所、そんなつもりはなかったらしい。曰はく、自分は聖人君子では

なく、思いの儘に生きているだけだと。

それを聞いて、凌介は理解した。

彼女の長所は「優しさ」だ。

普通の人々は多くの行動の過程に、損得勘定や胸算用が介在する。つまり、自分に利があるから行動する。

ところが、彼女にはそれがない。

彼女の「優しさ」は「純粋な善意」と言い換えられる。

人と関わる際に、自分の純粋な想いに従って行動する。

それが彼女の美德であり、その行動の根差す本質的な「優しさ」が、彼女の最大の長所だった。

そして、凌介はある考えを抱くようになった。

純粋に人の為に怒ったり、泣いたり、喜んだり、悲しんだり、

一人に幸福を分け与えて、自分も幸福を得られたら、それはどんなに素敵なことだろう。

おそらく、そんな関係を「友達」とか、引いては「恋人」と言うのだと思う。

今は七月十八日土曜日。たぶん午前。時計がないからわからない。ここに、俺の経験したことを書き留めておこうと思う。

それを初めて見たのは、高校二年生の春だった。

俺は地元の進学校に、毎朝電車で通学していた。部活は弓道部。成績は中の上くらい。定期考査の直前は勉強するが、ほかは全く勉強しない、少々不真面目な生徒だった。

その日は雨だった。朝の電車は、普段より混雑していた。

「よう。久しぶり」

肩をたたかれ、振り向くと、中学のころの同級生がいた。

特に仲が良かったわけではない。しかし、仲が悪かったわけではない。一度何かの班で一緒になって以来、たまに会話するような、そんな仲だ。

「お前、電車通学だっけ。普段見ないけど」

しばらく会っていないから、とっさに名前が出てこない。

「普段はバイク。今日は雨だからな」

そっか。俺はまだ免許を持っていない。学校で禁止されていたのだ。少し、羨ましかった。

「バイクの免許、取ったんだ。いいなあ」

「ああ。バイクなら簡単簡単」

大して難しくなかったぜ、とそいつは嬉しそうに話していたのを覚えている。

実のところ、俺はそいつの話をまともに聞いていなかった。ただ適当に相槌を打っていただけだ。今はそれを後悔しているが、当時は仕方がなかったと思っている。

なにしろ、そいつのまわりには、黒い霧が立ち込めていたのだ。どうやら、他の乗客には見えていなかったらしい。俺以外誰も気にするそぶりを見せなかったのだ。とうの本人でさえも気づいていないようだった。

電車が止まった。乗客が一斉に揺れる。

「じゃあな。俺ここだから」

「おう。じゃあまたな」

名前も思い出せないそいつは、黒い霧をまといながら降りてしまった。

黒い霧はなんだかわからなかったが、俺は電車を乗り過ごしてしまったことだけは確かだった。
。

そいつの訃報が新聞に載ったのは、三日後のことだった。

暴走族に関わっていたらしい。高校に入ってすぐ、先輩とのつながりで暴走族となり、バイクを乗り回していた。そして、その日もバイクを乗っていて、カーブを曲がりきれずにガードレールに衝突。そのまま病院へ運ばれ、そこで死亡が確認された。新聞には、そんなようなことが書いてあった。

あまり実感はなかった。前々から、危ないところとかかわっていることは、噂が流れていたから知っていた。だからそのときは「ふーん、死んだのかあいつ」くらいにしか思わなかったし、そもそもめったに会わなかったのだ。仕方がないと思う。

ただ、電車の中の会話は、聞き流すのではなくて、ちゃんと話せばよかったと、少しだけ後悔した。

何回か黒い霧を見てわかったのだが、あれを発している人は三日後に死ぬ。病院とか、母の知り合いのお年寄りを見てわかった。

最初は怖かった。なにしろ、人が死ぬのがわかるのだ。俺の家族から黒い霧が出たら、俺はどうすればいいんだろう。わからなかった。

幸いというべきか、俺の家族はまだ健在だ。その点は安心してほしい。だが、俺の家族以外の人にはそうはいかなかった。

半年後。またあの黒い霧を見た。

今度は、校内ですれ違った、俺と同じクラスの女子だった。今だから言えるが、俺はその子が好きだった。告白する勇気はもちろんなくて、遠くから見ているだけだった。

黒い霧のことを、教えようか迷った。教えるとしたら、どうするのだろうか。

「あなた、三日後に死にますよ」

とか言うのだろうか。いや、絶対に信じてもらえないだろう。それどころか、俺が不審者扱いされかねない。好きな女の子に不審者扱いされるのは、控えめにいって泣きたくなる。かといって、黙って見過ごすのだろうか。

どうしようか迷っていると、その女子と友人は通り過ぎてしまった。

「あの人、私たちのことじろじろ見てきたよ」

嫌悪感が混じった声が聞こえてきた。

その時、言わなくてよかった、と思った。思ってしまったことを、直後に後悔した。

四日目の朝、臨時のホームルームで、その子が死んだことを連絡された。もともと心臓が弱くて、二十歳まで生きられないと医者には言っていたそう。前日の昼食の時に、心臓発作で救急車で運ばれて、そのまま亡くなった。

いえばよかった。

不審者扱いされても、いえばよかった。そしたら、もしかしたら、その子は死なずに済んだのかもしれない。頭ではそんなことないとわかっているけど、後悔せずにはいられなかった。その後悔は、今でも俺の中に残っている。

次は、高校三年の、センター試験直後だった。

その時の霧は、ちょっと違った。なんというか、薄いのだ。視界を塞ぐように、自己主張激しく湧いてくるような、ときどき見る霧ではない。払えばそのまま消えてしまいそうなくらい、薄いのだ。

黒い霧は、俺のクラスの、仲のいい友達が発していた。そいつとは時々カラオケへ行ったりする程度には、仲が良かった。

「なあ。明日死ぬとしたら、なにする？」

その日、それとなく聞いてみた。

「なんだよ急に。こっちはセンター終わって清々してるってのに」

うるせえ俺だって聞きたくて聞いているわけじゃねえよ。ただ、お前から黒い霧が出てるからな。お前の命を心配してんだよ感謝しろ。

とか思った。言わなかったけど。

「そうだなあ。今持ってる金全部使って、最後の晚餐でも贅沢するかな。あとは、徹夜でゲームして、今攻略してるやつ終わらせないと」

どう見ても真面目に答えていないような表情で、俺の友達は言い放った。

結論から言うと、そいつは大学に進学して、今でも工学部で元気に暮らしている。死んだのは、そいつの父親だったのだ。そのことも後から知ったことで、当時のあいつは普段と違う様子をわずかも見せずに、二次試験に緊張しているふりをしていたのだ。

そのあとは、あの忌々しい黒い霧を見ることなく、高校を卒業した。

今、俺は大学に通っている。毎日が暑くて、太陽を恨む毎日だ。

三日前に、また黒い霧を見た。それは、一人でトイレに入ったときだ。用を足してから、洗面所へ来た時に、それを見た。もちろん、トイレに俺以外人はいない。鏡に映った俺から、黒い霧は出ていた。

驚きや恐怖よりも先に、次は俺なのか、というあきらめにも似たなにかが俺のなかにあった。

七月十八日に俺は死ぬ。その日は、そのあとの講義をすべてサボタージュして、家に帰った。どうせすぐ死ぬのに、講義に出る理由はない。俺は、残された時間を好きなことに使うと決めたのだ。

さあ。なにをしようか。本を読んでもいいし、ありったけゲームをしてもいい。

まずゲーム機の電源を入れる。少しゲームをして、電源を切ってしまった。次に、本を読む。しかし、十ページ読むか読まないかで、また放り出してしまった。

何をやっても、意味なんてない。なにしろ、どうせすぐに死ぬのだ。すべてが無駄に感じられて、続かない。

あんなに毎日時間を必死に作って進めていたゲームも、楽しみにしていた本の新刊も、こんなにもつまらない。

運動したら楽しいだろうか。スマホの電源を入れたり切ったりを繰り返しながら考える。どうせ死ぬし、鍛えたって無駄だろう。そう思うと、部屋から出る気にならなかった。

結局、その日はスマホの電源を入れたり切ったりしていたらいつの間にか寝ていた。

翌日。七月十六日。その日は、普通に講義に出席した。教授の眠くなるような話を、いつものように右から左へ聞き流す。

講義に出席したのは、特に理由があったわけではない。ただ、やることがないだけ。このままだと、部屋から一步も出ずに死んでしまいそうだった。

講義中、教授が言った正常性バイアスという言葉が妙に耳に残った。

昼食を、友人と二人で食べた。学食で、一番高い料理を頼んだ。

「なあ。明後日死ぬとしたらなにをする？」

いつか、誰かに聞いたようなことと似たようなことを、聞いてみた。

「好きなゲームをする？ 楽しみにしていた本の新刊を読む？ それとも、なにか運動でもする？ 何もせずにただ死ぬのを待つ？」

そいつは、ちょっと頭のいい奴だった。この前の試験で学年で三位だったらしい。だからというわけではないが、少し答えには期待していた。

そいつはちょっと黙ってから、俺の昼食を指さした。

「君は今、一番高い食事を頼んだ。いつもの金欠はどうしたんだい。それに昨日、君は講義をさぼって帰ったそうじゃないか。普段なんだかんだ言いながら真面目に出席する君らしくもない」

そして、そいつは人より少しだけ勘の鋭いやつだった。

「君、明後日自殺するのかい？」

少しだけだ。

「俺が自殺するわけないだろう。まだやりたいことが大量に残ってるんだ。たまたまだよ、たまたま」

嘘だ。昨日、やりたいことを半日考えて、なにひとつ思いつかなかった。

「ならいいんだけど。妙に思いつめた顔をしてるから」

笑顔を浮かべてごまかす。

「自殺するなら、溺死とか焼身とか窒息とかはやめとけよ。死ぬ寸前まで苦しいぞ。刺したり切ったりもよくない。急所を外したら長く苦しむことになる」

「なんだよ。死ぬのを止めるんじゃないのかよ」

「自殺はしないんだろ？ なら止めるも何もないじゃないか」

そいつは、にやにやしながら俺を見ていた。まるで、いたづらを成功させた子供のような表情だった。

「しねえよ。しないから、早く質問に答えろ」

ごまかすように、とんかつ定食を食べる。

「そうだなあ。僕は身の回りの整理をするかな。持ち物を処分したり。あとは、両親に感謝を。いままでありがとうってさ。いう機会がはっきり与えられるのは幸せなことだから」

僕の祖父は脳卒中だったから、と彼はさみしそうに笑った。

「あとは――」

その日は、部活の友達と夕食に行って、帰ったのは九時だった。椅子に座って、昼食を思い出す。

「あとは、僕が生きた証拠をこの世に残す。煙のように消え去ってあとには何も残らないもしいけど、僕はそれが嫌で、印象に残るようにしてきたからね。具体的に言うと――」

あとは自慢話だった。なんの大会でなんの賞を取った、とか模試で何点取った、とか。

「生きた証拠を残す……か」

突然言われても、まったく想像もつかない。具体的に、そういうことを考えたことはなかった。

「そもそも、証拠を残して何になるんだろう」

別に、証拠を残すために生きているわけではない。煙のように消えてしまっても構わないはずだ。

だれの記憶にも残らずに、ひっそりと生まれ、ひっそりと消えてゆく。いいじゃないか。

あれ？　じゃあなんのために生きているのだろう。俺は、なぜこの世に生まれてきたのだろうか。どうせ誰の記憶にも残らないなら、どうして。

そこまで考えて、俺は首を振った。考えても無駄だ。答えなんて出ない。そういうことは、宗教家にでも任せればいい。

せっかくだから、家族へのあいさつはすることにした。直接

言うのは恥ずかしいから、手紙を書いた。この期に及んで何を恥ずかしがってるんだと言われ

ばその通りなのだが、照れるものだろう。録音とか録画にすればよかったと、今更思うがもう遅い。

段ボールに、「家族へ」と書いた紙を張り付け、その中に手紙と、その辺にあったものを二、三個入れて、その日は寝た。

七月十七日。金曜日。また、講義に出席した。

昼に、前日に昼食を一緒に食べた友人とまた学食へ行った。今思えば、その友人と会うために大学へ行ったのだと思う。

「なあ。明日死ぬとしたら何する？」

カレーを食べながら、そいつは変な目で俺を見た。

「またその話か。お前、本当に自殺とかしないよな？」

「しねーよ。するわけないだろ」

「昨日もその話したぞ。僕、ちゃんと答えたよな」

そうだ。こいつに、全部打ち明けるのはどうだろうか。俺には死霊みたいな黒い霧が憑りついていて、明日死ぬんだって。

だめだ。信じてもらえない気がしない。

「そうだったかな。ところで、今日の物理の単振子の話なんだけど、分かんないからあとで教えてくれないか」

「うわ、ノート真っ白だ。さては君、寝てたな」

「心は起きていたさ」

話を逸らした。

結果的に、その日のうちに事情を話すことになる。原因は、ただの俺の不注意だ。

午後の講義のあと、俺は二人で帰り道を歩いているときに、トラックに轢かれたのだ。

自分の骨が碎ける音を、俺は初めて聞いた。

そのときのことは、よくわからない。というのも、決定的なことは、俺が意識を失っているときに終わったからだ。

ここからは、友人に聞いたこととなる。

俺は、それはそれは見事に吹っ飛ばされた。素人目に見てもまず命はないだろうと思えるほどには、やばかったらしい。

道に血がまかれて、その中心に、関節も関節じゃない部分もあり得ない方向にねじ曲がった俺が倒れていた。

トラックが急ブレーキをかけた。運転手が慌てて降りてきて、俺を見て真っ青になった。

「と、とりあえず救急車を……」

その時だ。飛び散った血が、意志を持ったようにうごめきだした。時間を巻き戻すように、血が俺の体内に戻って、折れ曲がった腕や足が元の状態に戻る。

二人は、別の意味で真っ青になった。

俺が目を開けると同時に、運転手はわけのわからないことを叫びながら、トラックに乗って逃げだした。

当然、俺は問い詰められた。むしろあそこで化け物と叫んで逃げださなかったことは素直にすごいと思う。俺なら逃げる。全力で。

一通り説明すると、そいつは言った。

「つまり、明日必ず死ぬ代わりに、今日は絶対に死ねない」

「たぶん」

「だからあんなこと聞いてきたのか。正直、今でも半信半疑だけど、どっちにしる僕にできることはないかな」

言葉とは裏腹に、そいつは俺の目を決して見なかった。

「意外と冷たいんだな」

「事実を事実として言っただけだ。オールくらいなら付き合えるけど、どうする？」

「いいよ。帰って寝る」

「そっか。ひとつだけ。死に場所は選べよ」

それが、そいつとの最後の会話となった。

七月十八日。つまり今日だ。朝起きてすぐに、俺はノートとシャーペンをカバンの中に突っ込

んで、家を飛び出した。たまたまつけたのテレビが、昨日の夜にトラックに衝突した少年を探している旨のことを流していたが、無視した。

七年間愛用してきた自転車にまたがり、勢いよくペダルを踏みこんだ。

死に場所は選べと言われたから、昨日の夜考えたのだ。今思うと、ずいぶんあいつの助言を聞き入れている。それだけ信じていたんだろなあ。

十分後、俺は山のふもとにいた。残された時間は多くない。朝早いせいか、人は見あたらない。自転車を止めて、山道を駆け上る。

一時間で頂上に着いた。朝の空気はうまい。

死に場所は、この山の山頂にした。部屋の中で一人死ぬよりは、自然に囲まれた場所のほうが良いと考えたのだ。

なるほど死に場所は選ぶべきだ。これから死ぬというのに、昨日より気分がいい。

頂上で、ノートとシャーペンで、俺は人生最後の文章を書き始めた。

そして、今まさに終わりそうだ。

特に誰かに読んでほしいわけではない。強いて言うなら、いまあなたが読んでいます。それだけで、俺は十分だ。

今あなたは何をしているのだろう。これから何をするのだろう。何を考えているのだろう。明日のことを考えているのだろうか。

確かなのは、そこに俺はいないことだ。

あと数分で、俺は死ぬ。わかるんだ。あなたも、呼吸の仕方を忘れたりほしくないだろう？ それと同じだ

ああ。俺は何で生きていたんだろう。わからない。今になって、後悔ばかりが湧き上がってくる。

なんであの時、部活を断ったんだろう。なんであの時、交通費を理由に遊びに行かなかったんだろう。なんであの時、好きなあの子に告白しなかったんだろう。

俺が生きてた意味は分からないが、誰からも忘れられるのは悲しい。だから、覚えていてほしい。俺という人間がいたことを。

ああ。でも。生きてる理由がわからないとはいえ。

死ぬのはこわいなあ。

扉にかけられた二つの南京錠。毒蛇のようにとぐろを巻いた二重の鎖を解き、更に二つの内鍵を開錠する。

開いた扉の隙間からエアコンの刺すような冷気が広がった。外は春の陽気に覆われてじっとりと暖かいというのに。

***は昔から暑がりだから。

----玄関周辺の傘や靴の配置は部屋を出てから変化なし。反対側にあるベランダも同様。

内鍵を閉めてから、ソファのほうに向きなおりビニール袋を掲げて見せた。

「ただいま、朝ごはん買って来たよ」

帰ってくる言葉は無い。罵声すらも無い。しかしこの生活も三日目となれば、このような沈黙にも居心地の良さや安心感をおぼえる。人が空気を意識しないように、魚も水を意識したりはしないらしい。要は慣れた。

キッチンリビングの奥にある。***のいるソファに背を向け食器棚を漁っている際に、カバンに収まっている本のことを思い出した。

「昔くれた本、読んでみたよ。あんまり小説は読まないけど、つい夢中になっちゃって危うく仕事に遅れるところだった」

そうは言ったものの、話の内容はよく覚えていない。ただ***の好きなものがもっと分かりそうな気がしたから、ページのしわから細かな汚れまで観察した。

***が気に入ったのはこの行。このページはブックマークを挟んでいたのだろう。そんな考察をしていたら、あっという間に時間が過ぎていった。

楽しい作業を思い出し、マグカップをお手玉し始める僕に目もくれず、僕の幼馴染はただそこに居る。

僕が***を拾ったのは、3日前の朝のことだ。

高校を卒業して働き始めた僕と、大学生の***では生活リズムが違う。僕が出勤する時間に***は起き、帰宅する時間に***は眠る。最近の僕は***と顔を合わせずに済むよう生活していたのだ。しかしその日は、その日に限って***は僕の出勤ルートにいた。

曲がり角の先に見える、何かを凝視したまま動かない***。遠回りしようかとうろたえる僕の恐れは、その視線の先にあるものに打ち砕かれた。

それはおおよそ人の形をしていなかった。

バラバラだ。頭、腿、胴体、二の腕、首、手。人形のパーツのように、道路の真ん中に散らばっていた。

----ホラー映画の小道具だろう、こんなところに置き去りにするなんてマナーのなっていないスタッフもいたものだ。

それが現実逃避であることは分かっていた。でも自分に無理矢理そう思い込ませて、意識を***に向ける。ここに***を置いて行くわけにはいかないのだから。

近所で猟奇的な連続殺人事件が起きていたことは知っていた。

とはいえ、被害者の無残な死体と遭遇することになるなど、夢にも思うはずがなく。

僕は***を抱え、慌ててその場を去った。うっかり通報し忘れてしまったのは気がかりだったが、後に発見した人が警察に連絡したらしい。犯人は翌日に捕まった。

しかし依然として、***はここで暮らしている。騒ぐことも泣くこともせず、日がな一日ぼんやりしている。***と僕の奇妙な生活は今日で三日目をむかえた。

***と僕は海にいた。

恐らく高校の修学旅行の行先だった、沖縄だろう。あの時僕は金銭的な問題で欠席していた。しかし二人は制服姿で歩いていて、これが夢であることを証明している。それに、綺麗な砂浜には僕ら以外に人影はない。

***に手を引かれ、僕は海に向かって歩く。

両親に見向きもされなかった僕にとって、***は親であり、兄弟であり、この世のすべてだった。何も教えてもらえなかった僕のお手本で、僕は君と同じ存在だと思っていた。

しかし所詮、水たまりに浮かぶ月のようなものだ。僕は***とは違う。***には大切にしてくれる親がいて、仲の良い友人は僕以外にもたくさんいて、そして----

夢から覚めた僕は恐ろしくなったのだ。いつか***も僕の手を放し、置いて行くのではない

かと。

先に行く***は既に首まで水につかっている。僕の手を握る、氷のように冷えた手のひら。

しかし***の音がする。

の音が前から、目の前のよりももっと前から聞こえた。では僕の手を引く***は***ではないのか？ 前に行く誰かを確認しようとした時、そこには誰もいない。

僕は***の声に問いただした。それを***に聞くことに、意味などないのに。

「どうして……」

天井だ。言うまでもなく、見慣れたアパートの天井。水底から見上げる青天井などではない。

僕はいつの間にか椅子で眠っていたらしい。読んでいたはずの本は滑り落ちて、床の上で羽を広げている。***にもらった押し花の葉は本の隣に転がっていて、薄汚れたブックカバーだけが膝の上に置き去りにされていた。

***は相変わらずソファの上にいる。居眠りをする僕に乾いた目を向けている。

夢見が悪くて読書に戻ろうとは思えない。締め切られたカーテン越しに伝わる雨音が、気分の悪さを助長している。

僕は勝手に絶望して、勝手に離れていったのだ。

は僕がいなくても新しい環境で新しい友人と大学生活を満喫しているようだ。

にとって僕は不要どころか、邪魔な存在だったのではないだろうか。

寝違えたせいか首が重く、吐き気が喉元をせりあがってくる。軋む体を押して、テレビのリモコンに手を伸ばした。

放送されているのはニュースのようだ。フラッシュの眩い光のせいで、目がちかちかして頭が痛い。

『本当に恐ろしい事件でしたね。被害者は十三人、その上バラバラにした遺体を閑静な住宅街に放置するなんて』

『犯人は最後の被害者である***さんを殺害したすぐ翌日に、遺体発見現場で逮捕されています。恐らく自分の犯行で騒ぎになっている様子を見に行ったのでしょうか』

『***さんの遺体のうち、頭部はまだ見つかっておりません。しかし犯人は「すべてあそこに置いた」と供述しており----』

気分転換にテレビをつけたものの、間の悪いことにキャスターが一番不味い情報をひけらかしている。僕は慌ててリモコンの電源ボタンをもう一度押した。

恐る恐る***の様子を伺う。相変わらずソファの上において何の反応もない。笑うことも、怒ることもしない。

そして瞬きすることも、息をすることも二度と無いのだろう。土気色の顔色も濁った目も、元通りにはならない。

もう少し何も知らないふりをしていたかった。

今日よりも辛い明日なんて、来なければいい。両親が僕を置いて家を出た夜の僕は、確かに翌朝より幸せだった。

でも夢は朝になれば覚めるもので。

「***にとって、僕は何だった？」

昨日までは生ぬるく居心地のよかった沈黙が、今はただ息苦しい。

「頼むから、何か言ってよ……」

気が付けば僕は声をあげて泣いていた。

----随分と小さくなった、***を抱えて。

あとがき

人間手に入らないものほど、より欲しくなるものです。参加条件に引っかかったイベントの限定キャラとか。

梅雨入りが発表されてから数日がたった。毎日続く曇天と雨、湿気は、人の気分を暗くする。

しかし園芸部によって整えられた中庭には、学校全体に漂う憂鬱な空気を払うように、色とりどりの紫陽花が咲き乱れている。

密かに梅雨入りを待ち望んでいた俺は、小雨の降るなか中庭に出ていった。紫陽花の陰にしゃがみこむと、制服や髪が濡れるのも気にせずファインダーを覗き込む。

レンズの向こう側には水滴に飾られた紫陽花。うすむらさきの花にピントを合わせ、シャッターを切った。止めていた息をほう、と吐いて立ち上がり、軽く頭を振ると水滴が飛んだ。

教師の声が遠くから聞こえてくる。今は三限の途中なのだから当然だ。しかしそれは保健室登校をしている俺にはなんの関係もないことだった。

不登校になったのは一ヶ月前。この高校に入学してたった一ヶ月で、俺は教室から姿を消した。それがどうしてなのかは、いまだにわからないことで、わかろうとも思わないことだった。

だけど、今ここでだれとも関わらずにファインダー越しの世界を見ることが、心の平穏を得られる唯一の手段であるということはよくわかっている。この時間だけはだれにも邪魔されず、自分の心が揺らぐこともない。いわばこの中庭が俺の『安全地帯』だった。

顔に張り付く髪を払って、またカメラを構えた。紫陽花の茂みに入り、今度は淡い青の紫陽花にカメラを向けた。大きく息を吸い、止める。

「紫陽花、好きなの？」

不意にうしろからかけられたのは耳馴染みのない声だった。やけに気にかけてくれている教師でも、頼りにしているカウンセラーでもない。となればどうだっていいやつだ。無視を決め込

んで、もう一度ファインダーを覗いた。

「おーい、聞ってるかー」

ため息をついて、移動する。気配はついてきた。集中しようとするたび声をかけられ妨害されてはさすがにたまったものではない。ひとつため息をついて、うしろに立つだれかに声をかけた。

「……なんなんだよ、さっきから。鬱陶しいからあっち行ってくれる？」

強い口調で言えばだいたい人間は怯むものだ。だけど、そのだれかは動かず、それどころか話を続けた。

「やだ。だって私、あなたと仲良くなりたいんだもん」

胸のあたりがむかむかする。こうやって近づいてくるやつは大抵、孤立しているやつに積極的に話しかけている自分に酔いたいやつだ。経験上、嫌ってくらい思い知らされている。俺の一番嫌いな人種だ。こういうのは適当にあしらっておけばそのうち飽きる。

無視して再びカメラを構えた。

「えー、なに、無視？　そういうのよくないよ？」

だけどうしろのやつは無視をすればするほどうるさくなくなった。ファインダーをのぞいているはずなのに、全く集中ができない。目の前にこんなにもいい被写体があるのに。雨の具合も光の加減も、梅雨のおかげで最高なのに。

「あ、私、梓生！　よろしくね、大和くん」

ぷつり。何かが切れた。カメラを下ろして立ち上がり、振り返る。

頭一つ分下に散々邪魔をしてきた女の顔。大きな目がまっすぐに俺を見上げていた。思ったより小柄だったけれどそれはもはやどうでもいい。

「俺は、仲良くする気なんてない。失せろ」

そいつの顔を睨みつけて、はっきりと言ってやる。これでさすがに諦めるだろう。

「……わかった」

濡れた茶色い髪の毛が揺れた。声が震えている。泣いているのか知らないけど、別にどうだっていい。どうせ明日にはこなくなるんだから。

うつむいたままの女を横目に向こうの茂みに移動した。砂利を踏む音がするから帰るんだろう。これでようやく写真に集中できる。

「……今日は帰るけど、明日も、来るからな！」

中庭に響き渡るでかい声。思わず体が跳ねた。振り返ったときにはすでに女は校舎に入っていて、やけに満足そうな顔で廊下を歩いていた。

安全地帯に戻った中庭で、俺は茂みに身を隠した。紫陽花に囲まれて、カメラを抱きしめて、ぎゅっと目を閉じる。どくどくと心臓が早鐘を打つのを、体を小さく丸めて聞いていた。

なんで今叫ぶ必要があった。なんで俺に構う。そもそもなんで俺なんだ。孤立しているやつなんかこの学校に何人もいるのに！

叫び出しそうになるのを、奥歯を噛んで我慢する。深く深呼吸を数回繰り返し、動揺する自分に言い聞かせた。

わかろうとするな、興味を持つな。今までそうしてきたらう？

けれど、鼓動は速いまま。今更濡れた体に悪寒が走った。

そんなとき、チャイムが聞こえてきた。授業から解放された生徒たちが次々と教室から出てきている。逃げるように中庭の玄関側の出入り口へ向かった。

土で汚れたスニーカーを下駄箱に突っ込んで、上履きを持ったまま廊下を走る。

途中、人とすれ違うたびにさっきの女が脳裏にちらついた。

俺の安全地帯にずけずけと乗り込んできた図々しい女。名前なんか覚えていないけど、どうにも忘れられそうにない。

宣言通り、女は翌日もやってきた。そして次も、その次も、その人は三限になると必ず中庭に現れた。

俺がどんなに怒ってもへらへらと笑うばかり。糠に釘だ。だんだんと反応することも面倒になって、二週間もすれば撮影の邪魔をしない限りは放っておくようになった。

梅雨が明けると、一気に夏らしくなった。最近はおっぱら空を撮ってばかりいる。この時期の優しい青空が好きだった。

「は一、暑い」

この人は懲りずに今日も来ていた。今は木陰のベンチで文句を垂れながら参考書を広げている、が、歩ってはいないようだった。俺の知ったことではないけれど。

「さっきから空ばかり」

飽きないの、と聞かれるが、なにも答えず空を見上げた。入道雲のなりそこないが風に流されていた。

「あ、ねえ、あたしのこと撮ってよ」

いいこと思いついた、とでも言わんばかりの声にいらつく。しかし怒ったところで意味はないので、なりそこないにレンズを向けてシャッターを切った。

「無視するなー」

こつ、と後頭部になにかが当たった。足元に落ちたそれを見れば、数学のプリントでできた紙飛行機だった。

苛立ちが最高潮に達する。もうこれ以上は腹の底のむかつきが抑えられない。

酷い点数のそれを拾って、思い切り投げ返す。飛行機は風に乗り損なって、地面に突き刺さるように落ちた。

「ひとなんか撮るわけないだろ。綺麗でもないのに」

吐き捨てるように言って中庭を去る。待って、とか、なんで、とか、背中に何度か声がかかっても、振り返ることはなかった。

三限の中庭が騒がしくなって一ヶ月と少し。うんざりしながらも毎日三限になると中庭に足が向いている。

嫌なら行かなきゃいい。そんなことはわかっている。けれどなぜか気がつくとも中庭にいる。理解のできない行動をする自分がつくづく嫌になった。

三限が始まってから十分がたつ頃、いつものように中庭にでた。しかし今日は、あの人がいない。いつもなら先に来ていて、ベンチで唸りながら参考書を読んでいるのに。

いなくてもいい、いや、いない方がよかったはずだ。なのに、今、少しだけ。

「……そんなわけない」

揺らぐ自分を振り払って、カメラを構える。レンズの向こう側、下駄箱の前に、あの人が立っていた。

なんだ、来たのか。そう思って視線を外そうとした。けど、何かが引っかかる。

いつも上を向いている顔が下を向いている。嫌というほど主張してくる小さな体が、やけに頼

りなく見えた。

気がついたら玄関側の出入り口に立っていた。面倒だから放っておけと言う自分を無視して、体が勝手にあの人の元に向かっている。心臓が痛いほどに波打っていた。

「ねえ」

搦んだ肩がやたらに薄くてびっくりする。小さな体がこっちを向いて、今にも泣き出しそうな声で俺を呼んだ。俺の手をすがるように握る、小さな手。それに手を重ねそうになった瞬間、手が離れた。

でかい目が不安そうに揺れて、一人じゃ立ってられなさそうなくせに、俺が近づくと後ずさりをする。

彼女の顔にできそこないの笑顔が張り付いた。これ以上踏み込むなって、そういう顔だ。

「あたし、職員室行かなきゃ。ごめんね、今日行けないや」

逃げるように彼女が走っていく。明らかにサイズがあっていない来客用スリッパがパタパタと間抜けな音を出している。

さっきまで彼女が見ていた、閉まりかけの下駄箱。軽く触れれば軋みながら開いていく。

中に上履きはなかった。代わりにくしゃくしゃに丸められた紙が積み上がっていた。

「なんだ、これ」

紙には口に出すのはばかられるような言葉の羅列。彼女を悪く言う言葉だらけだ。強く握りしめて、下駄箱に背中を預けた。

日が陰る。薄暗い雲に覆われた空から、小雨が降り始めていた。

昨日のあの人の姿が目には焼き付いて離れない。あの頼りない肩になんて言葉をかけるのが正解だったのか、とか、そんなことばかり考えている。

人なんか理解できない生き物だって、考えるのは無駄だって、ずっと言い聞かせてきた。なのにあの人が来てから俺は、ずっと考えてばかりだ。なんで、なんで、って不毛な自問自答がやめたくてもやめられない。辛くて、しんどい。終わりの見えない真っ暗なトンネルをずっと歩き続けている気分だ。

今日も変わらず雨は降り続けている。じめじめとした空気が肌にまとわりついて息苦しい。悪天候のせいかな、はたまた考えすぎているせいなのか、頭が割れるように痛かった。

それでも習慣というものは恐ろしくて、三限になると自然と中庭に足が向いていた。

結露したガラスの向こう側に、あの人がいる。オレンジ色の傘を差してどこか遠くを見ているようだった。

出入り口の前でためらっていたら不意に窓が開いた。あの人が、怖いくらいいつも通りの笑顔で立っていた。

「どうしたのさ、そんなところで。こないの？」

ああ、うん、なんて動揺まるだしの返事をして、傘を開き中庭に入る。少し先にいた彼女は傘を回していた。それは妙に上機嫌に見えて、ますますわけがわからなくなる。

動揺しているのは俺ばかりで、当事者の彼女はまるで何もなかったような顔をしているのが不思議で仕方がない。ああいうことをされたら普通は悲しんだり傷ついたりするものじゃないのか。

「どうしたの、大和。今日はなんか変だよ」

なんでそんな顔できるんだ。昨日の無理した顔はどこやったんだ。いろんな言葉が混ざり合
って、ぼろりとかぼれた。

「変なのは、あんただろ」

目の前の笑顔が引きつる。これ以上は取り返しがつかなくなると思っても一度溢れてしまった
言葉は止まらなかった。

「なんであんなことされて黙ってられるんだよ……！ 意味わかんねえ、なんなんだ、あ
んた……気持ち悪い！」

急に雨音が大きくなったような気がする。けれどそれ以上に心臓がどくどくとうるさくて、全
てをかき消してしまう。数秒の沈黙のあと、オレンジ色の傘が揺れてできそこないの笑顔が騒
る。

「……しかたない、だろ」

急に、傘が宙を舞った。放り投げられたオレンジ色のそれは砂利の上を転がっていった。

雨粒が彼女を叩く。眉間にしわを寄せて顔を歪ませた彼女は、目尻の赤い目で俺を見た。瞳の
奥に影が根を張っているのが見えた。

「諦めるしか、なかったんだ！ これが普通だって、当たり前だって……じゃなきゃ、耐えられ
るわけがない！」

何も言葉が出てこなかった。雨に打たれる頼りない体を支える勇気もなかった。ただ突っ立っ
ているだけの俺を見て、彼女は何かに耐えるように拳を強く握っていた。

「……やまとに、あたしみたいに、なってほしくないの」

それだけ言って、彼女は傘を拾った。そしてあの日の俺のようにこちらを振り返りもせず、中
庭を出ていく。

「もう、こないから。……騒がしくしてごめんね」

置いていかれた俺はぼう然とその場に立ち尽くす。あの日の彼女はこんな気持ちだったんだろ
うか、と他人事のように考えていた。

「そろそろ、時間……」

三限が終わる。もうそろそろ帰らないと人目につくのに、体が動かなかった。

ずしりと重い相棒には、彼女の秘密を知った日以降の写真はない。最後の写真は憎いほどの晴天だ。

あの雨の日から二週間が経つ。あれ以降、彼女は一度も中庭にきていない。

ああ、清々した。これで俺の安全地帯は守られた。そう思えるほど俺も能天気ではいられなかった。

下駄箱で見た不安な顔が、あの雨の日の歪んだ顔が、残した言葉が、忘れられない。

あたしみたいになってほしくない、とあの人は言った。諦めて、しかたないって思っほしくない。そういうことだ。言葉の意味なんかばかだってわかる。ただそれをできるかと言われたら、また話は別になってくる。

廊下から人の話し声が聞こえて、冷や汗が垂れた。これ以上は人目に付くから、こっそりと保健室に帰った。

「よお、戻ってきたか」

俺を迎えたのは養護教諭ではなく担任だった。まだ二十そこそこの担任は、久しぶりに面談するぞ、と笑って言った。

いくつかの質問をしながら先生はノートにメモをとる。最後の質問を終えると、ノートを見返しながら口を開いた。

「さて……大和は何か気になることとかないか？」

「あの、梓生って人……ちゃんと教室行ってるんですか」

驚くほど自然に言葉が出た。担任も驚いて俺を見て、少し表情が緩む。そしてソファに体を預けノートを置いた。

「梓生なら、ようやく受験に本腰入れたみたいだぞ？ だから中庭に行かないようにしているんだろうな」

絶対それだけじゃない。こなくなったタイミングからして、あの日のことも理由の一つだろう。口元を押さえて考え込む姿勢に入った。

「にしても珍しいな、お前が人のことを気にするなんて」

考えるのに必死で先生が言ったことを聞き取れず、聞き返したら笑われてしまった。それが妙に嬉しそうで、もっとわけがわからなくなる。

「俺は高校に入ってからの大和しか知らないけど、お前は人のことを気にしたりするのを避けている節があったから、少し不安だった。まあ、そうだな……いい傾向じゃないか？」

雑に頭を撫でて、先生はやけに満足げな顔で去っていった。

このとき、ああそうか、と自分の中で不思議と腑に落ちのどと思う。

それから養護教諭が帰ってくるまでずっと、考えていた。あの人のこと、俺がこうなってしまった原因の出来事のこと、それからこれから先のことを。

雪の溶けきらない肌寒い中庭で、俺は一人ベンチに佇んでいた。

そっと相棒を構えてファインダーを覗き込み、シャッターを切る。散々世話になった中庭の景色が、そのまま小さな画面に映し出された。

それを見ながら、ぼんやりと思う。

少なくともあのときの俺にとっては、彼女は確かに安全地帯の破壊者だった。作った壁を通り抜けて、パーソナルスペースに土足で踏み込んで、散々荒らし回って。おかげで俺の平穩は儂く崩れ去った。

けれど、そもそもの話だ。ここは本当の意味で、安全地帯なんかじゃなかったのだ。よく考えれば、いや、よく考えなくたってわかる。四方八方どこからでもだれでも見られる場所が安全地帯だなんて、そんなことがあるはずがない。

じゃあどうしてここが俺の安全地帯だったか。つまり、言ってしまうえばそれは、人との関わりを避けたいという建前のうしろに、だれかに見つけてほしいという本音が潜んでいたということ。

たったそれだけのことを認めるのに随分と長い時間がかかっている。だから俺は、まだスタートラインに立ててすらいない。

中庭をぐるりと見渡して、ベンチから立ち上がった。玄関に入り、自分の下駄箱、ではなく、そのふたつ隣の列に入った。玄関側から三つ目、上から二つ目にある、彼女を散々苦しめた下駄箱をそっと開けると、ハイカットのスニーカーがぽつんとある。その上に懐から出した封筒を置いた。

「……あ、大和いた！ おい、卒業式始まるぞ！」

わざわざ呼びに来てくれた友人に礼を言う。先に行くからな、と彼は小走りで体育館に戻っていった。

「……行かなきゃ」

あの人がそうしていたように、顔をあげて少し背筋を伸ばしてみた。数センチ目線が上がった

。それだけだったけど、でも、あの人がそうしていた理由がなんとなくわかったような気になった。

卒業証書授与のとき。彼女の名前が呼ばれて、よく通る声が体育館に響いた。壇上に上がった小さな体は、あの日の頼りなさとはかけ離れていて、笑っちゃうくらい堂々としていた。

俺はまだ、変われない。変わるにはもっと多くの時間がある。

けれどひとつだけ断言できることがあるんだ。

あなたが、きっかけだった。

本当に長い時間がかかると思う。それでも、あなたが愛想をつかさずに待っていてくれて、いつか、俺が本当に変わったなら、そのときは、

あんたを撮りたい、と心からそう思うんだ。

誇示と意地で空に放たれ

海へと投げ捨てられるミサイルは

水底で酸化し 朽ちていくだろう

彼が重い身体を横たえ

セルリアンブルーのあわいを見つめるとき

その視線は何物も映さない

一度は薄れていたはずのふちどり

地に再びはっきりと引かれはじめた境界は

こびりついた不安と共に

盲信を脆くさせていくのだろう

脳に走る電気の明瞭さと不確かさが

血色の悪い灰色の亀裂に踵を沈めるとき

その質量はきっと地球よりも重たいのだ

美しく不格好に整えられたパトリオットが

代弁者を謳う拡声器にばらまかれ

此方の軍人が昼の献立を考えながら押したボタンが

彼方の兵器にたやすく生を奪わせ

区別と差別の意味を忘れてしまった濃い色の壁が

老いた眼窩に盤石を夢見させ

街角に散らばる薬莢には誰も見向きもせず

へいわなくに に溢れる倦怠には無視して

それでも世界はひとつであると理想を騙るのなら

それでも人類は輩であるのだと幻想を語るのなら

それならそうなのかもしれないな と

さながら無分別な幼児のように

紫煙をふかして うそぶいてみたい

深海魚は深く深く潜りたがる

背筋の伸びるような冴えた酸素

あたたかな水素に包まれ

盲いた目の奥で四億年昔の夢を見る

真っ直ぐに夜とあけぼのが訪れて

なだらかな湾曲がゆれた 平たい浅瀬の夢を

ああ、あの汲々とした硬き愛し子は

とうにしなびて埋もれてしまった

水温がまた下がる

あのあわれなパーセイダーのせいで

兄は白けた灰になってしまった

水温がまた下がる

酸素が溶け出していく水面

形作られる足に恐怖しながら

ゆっくりとこうべを垂れた

あの白波には恋人が沈んでゆく

惹かれ合い求め合うからさびしいのだ

閉じることもできないまぶた

ならばいっそ沈んでしまいたい

夢さえ見ない夢、 齡四十六億の一端へ

昇りゆくあぶくに別れを告げ

ゆっくりと分解される幼子を追い

そうして深く深く潜りたがった

遙か先に待っているのは きっと宇宙一孤独な抱擁

傍らには洩れた兄弟たちが眠る

すっかり肉も骨も捨て去り

タールのような姿になってひとり

ひと沈みごとに強まる愛に身を委ねていれば

一億五千万と二百も先の恋人のことなど

きっともう二度と思い出すことはない

心地のいい微睡眠 茫漠たるしじま

ここには永遠に夜明けが来ない

はらはらと降り積もる生の残骸を見上げ

やわらかなえらは今日も這いつくばる

深い水底でたゆたう鼓動

濡れた眼窩に夢を浮かべながら

或る清明の事である。

健二は越後の田舎を離れ、東京に越してきた。大学に通うためであった。

健二は元来^{がんらい}阿呆の類であったが、遮二無二^{しゃにむに}勉強して遂には合格したのである。合格の通知を受けた時、半狂乱になって喜んで、周りからそれは白い目で見られた。また親からもそれは同様であった。何せ今まで一切勉強というものに触れずにいたわが子が、取り憑かれたように勉強し、あまつさえ大学にまで入ったのである。健二の家はお世辞にも裕福とは言い難く、健二の進学は家庭の財政に非常の傷を付けた。しかし、実のところ健二は、大学になど入りたくはなかった。寧ろ、これからも勉学の方を向いていかねばならぬ事を憂いてさえた。では何故こうなったかという、恩義の為である。

健二高校一年の時分、試験の点数が悪く教師から説教をくらっていた為に、帰り道は酷く苛立っていた。教師に対する雑言並び立て(教師の頭髪に対する罵倒が主であった)、路にあった二寸程の石ころを蹴っ飛ばしていたら、地元では名の知れた不良の足にぶつかり、不運な事に前日の雨で石ころが泥塗れであったために、不良を酷く怒らせてしまった。健二は蒼白になり一目散に逃げたが、運動など億劫^{おっくう}だというのが性分だった為、すぐに追いつかれてしまった。不良が拳を翳し、健二が目を閉じ覚悟を決めたところで、見知らぬ兄が仲裁に入った。この兄が非常の美男子であり、また非常の勇氣を持って健二を救った為に、健二にはこの兄が歴史の英雄の如く思われて、憧れの情を抱いた。また健二はこれに強い恩を感じ、この兄が「大学は良いところだから、お前も来い」と言った時には、揚々と返事をしたのであるが、すぐに後悔した。阿呆の健二には勉学の才などあるはずもなく、それでも必死に励んでいたのであるが、遂に兄と同じ大学に入る事はなかった(因みに健二に兄弟は無く、兄というのは単なる愛称である)。

健二の東京暮らしは、借間で始まった。六畳一間の和室で、備え付けの卓袱台と座布団が置いてあった。しかし、この頃の健二は洒落っ気に目覚めていたため気に入らず、初めのうちは便利で使っていたのであるが、すぐに押入れの肥しとなった。

健二の借間は「猪狩^{いかり}荘」という宿の二階にあり、健二の他に四人が住んでいた。

健二は決して周囲に溶け込めぬ性格などしていないのだが、大学というのが余りに性に合わぬ為か、友人と呼べる者は殆ど居なかった。それどころか授業に出ても萎縮してしまい、いつも何処かうわの空で、教授からしばしば注意を受けていた。

東京に来てから初めての友人は、猪狩荘の住人であった。名を山川丈夫といい、先の学生運動にも参加するようなやつだった。時に豪胆、時に臆病という小難しい性格の男で、健二としてはこのような所が非常に面白く、よく笑いの種にしていたのであるが、丈夫はこれを自身の恥部の如く思っており(落ち込んでいる時に限るのだが)、健二に茶化される度に機嫌を悪くしていた。これでは直ぐに破綻しそうなものだが、健二の阿呆さ加減が丈夫の精神にとって非常にいい塩梅で、

丁度ぬるいお湯に浸っているような心地良さがあり、時折熱く沸くのも、冷えた後の良い引き立てとなり、つまりは丈夫も健二を気に入っていたのである。

二人の出会いは健二が越してきた時分まで遡り、その日は猪狩荘の住人で親睦会を開こうという話になっていた。「猪狩荘」というので分かるかもしれないが、この家主は猪狩が趣味であり、もう六十を優に超える歳であるのに、度々山へ赴いては、猪をかついで帰ってくる。住人はその度に鍋を楽しみにしていた。健二の引越しに合わせて狩りに出ていたため、例に漏れずその日も猪鍋となり、健二も早速味わうこととなった。鍋は味噌味で、葱ねぎにエノキ、椎茸、白菜、水菜と人参、鰹節が乗っている。健二は遠慮して白菜から食べ出した。なるほど、美味しい。住人が毎度心待ちにするのも納得というものである。周りが遠慮なく猪肉を食らうので、健二も続いて食べた。それからは暫く猪肉のみ食べていた。

「おい、新入り、飲め飲め」

健二の目の前に焼酎の瓶がごとりと置かれた。

「申し訳ないが、まだ十八なのだ。飲めん」

健二が断ると、

「そうか、飲めるじゃねエか」

男はぐいっと酒を煽あおって、懐から免許取り出し、見せてきた。それから丈夫と健二は酒を煽って、夜更けまで話し続けた。

日が過ぎる毎に丈夫との関係は深くなり、互いの部屋を行き来し合う仲にもなったが、健二には思うところあり、部屋に一人でいると、段々と丈夫のことが恐ろしく思われてくる。それは丈夫の情熱の為であった。この頃は学生運動の気運高く、大学の広場などに学生が集合して、学生寮を作れだとかゼミナールを増やせだとか口々に言って、時には行進などもしていた。丈夫はこの学生運動の流行に心酔しており、それは感情の浮き沈みが全くそればかりに左右されているのではないかと思われる程である。時には健二に運動の重要性などについて説き始め、少しでも表情に嫌悪を匂わせると、途端に不機嫌になってしまう。普段の剛毅ごうきさというか、活力満ち満ちた丈夫を知る健二としては、悪い化生の類いが取り憑いているような気さえして、それで気味悪がっていた。それでも友人の縁を切る気には到底なれず、結局考えないものとして、胸に仕舞い込んだのである。

ゴゴゴゴ、ガガガガといった工事音が喧しく、健二は休日だというのに七時頃起こされて、甚だ不機嫌であった。不機嫌ついでに掃除などして仕舞おうと思い、玄関の靴整えて、下駄箱を箒で掃いていると、丈夫が訪ねてきた。

「ちょっと、付き合ってくれ」

落ち着き払った様子で、別段怪しむような所もなかったのであるが、健二は何か嫌な感がして、少し身震いした。

「いやすまん、今掃除しているから、暫く待ってくれ」

丈夫は結局、半時間程じっと待っていた。

猪狩荘の近くには公園がある。これが存外大きく、中には池もあり、その周りに二人掛けのベンチがあって、健二らはよく其処で話した。公園に行くまでに工事している土地があって、とはいえ猪狩荘から随分と離れているのに、健二はしつこく睨め付けていた。丈夫は一切気付かず、そのまま通り過ぎた。

本日快晴、池の水面は白く輝き、子どもは半袖着て走り回る。二人は人を避け、少し薄暗い所のベンチに腰掛けた。池を見ると鯉がゆらり泳いでいる。健二は釣り好きであったから、今手元に竿が無く、しかもその鯉が飛び切り大きいのが無念でならなかった。

「結局、何の用だ」

健二は訊ねるが、丈夫は話さない。

「おい、丈夫」

丈夫は一向話さない。

ただ薄ぼんやりと池を眺め、時折風が吹きつけても瞬きせず、それどころか焦点合っておらず、動かない。

健二は多少むっとしたが、何かやむにやまれぬ理由があってそうしているのだろうと思い、黙った。

暫くそのまま時の流れを待ったが、健二は段々と退屈に身悶えしてきた。元来じっとしている性分ではなく、海の鮪が止まれば死ぬように、動かねば心が病んでくる。何か紛らわす物などないかと探すと、池の岸際に鳥の群れを認めた。鴛鴦おしどりのように見え、二羽で羽震わせ、身を擦り寄せて、睦ま

じ気に泳いでいる。この時健二の中の残虐性が首をもたげて、今だそうだ、足元の石を投げつけてやれ！片方にだけぶつけてやるのだ！と囁きかけてきたが、罪悪感からか寸でのところで思い止まった。唯何もしないのも面白くないので、やはり石掴み上げて、鳥とは別の方に投げてやった。石は葦あしむらに当たった。がさっと音がして、周りの鳥は飛んでいった。無論鴛鴦も飛んでいった。然し何やら、葦むらの中に動じないものがある。薄灰色の羽を持ち、嘴は黄、目も黄色ぽくて、遠くを見つめている。その様子は何か思い悩んでいるような、洒落た喫茶に一人座っている淑女しゅくじょのような、物憂げな印象を与えた。健二はそれが何鳥か分からなかったが、気になって後で調べたら、それは鷺さぎらしかった。それも青鷺という格好いいやつだ。餌を探しているのか、それとも手負いで傷癒しているのか知れないが、兎に角じっとして動かない。はて、この顔この様子、どこかで見たなど考えて、健二が横を向いてみると、鷺面さぎづらの丈夫がいた。周りが清澄せいちょうな雰囲気静かで、落ち着いているのがまた面白く、然し丈夫が真剣なため笑えもせず、必死に堪えようとしたら、喉辺りからぐうという間抜けな音が出た。

健二があまりにぐうぐう言うので、終に丈夫が怪訝そうに

「どうした、何か面白いことがあったか」

と訊ねてきたから、

「お前の神妙な顔が鳥に見えたのだ、見ろ、あれだあの鳥だ」

健二が指差すと、丈夫もつられて笑い出した。

「やはりお前エは、阿呆だ」

丈夫はベンチから立ち上がって歩き出した。

「おい、まだ用が済んでないだろう」

「いやァ、いいんだ、これでいいんだ。今度、寿司でも食いに行こうか」

寿司というのは健二にとって、随分高級に属するものであった。飛び上がって首肯すると、丈夫はくつつ笑ってまた歩き始めた。健二はもう、丈夫の神妙顔など覚えていなかった。

健二が漸ようやく大学に慣れ、勉学も軌道に乗り出した或日、大学内がそれはもう酷い騒ぎになり、健二は啞然

としていた。大学へ入った所で呼び止められ、捲し立てるように何事かを教えられたが、あまりに唐突だったのでさっぱりわからなかった。広場へ行ってみると、黒い海苔を切り貼りしたような文字で「ふざけるな」だとか、「全共闘」だとか書かれた看板を学生が持って、口々に怒声をあげている。その中には普段から広場において、健二が密かに侮蔑の眼差しを投げつけているやつもいた。ああ、また学生運動か。そうであるとしたら、何処かに同じく丈夫もいて、こんな声を張っているのだろうか。そんなことを考えると、健二にはやはり丈夫が恐ろしく見えて仕舞うのだ。駄目だ、丈夫は心許せる友ではないか、疑ってはいけない。そのような事を考える自分の方が、悪いやつだ。理由がどうあれ、信念持って志高く、何かを成そうとしている者に、これという信念もない野郎が、頭ごなしに恐ろしいとか言ってはいけないのだ。自身の器を恥じ、健二がそこを離れようとすると、馴染んだ声に呼び止められた。ああ、なんてこった！

振り返るとやはり丈夫であった。頭には鉢巻つけており、息を荒くしている。

「健二、丁度よかった。これから通りで行進するんだ、お前も来い」

口元は醜悪しゅうあくに引き攣りつ、目は何かに憑かれたように焦点あっておらず、憑かれていると言うよりは寧ろ、今の丈夫が実は怪異そのものなのではないかと思われる程、健二が普段接する丈夫とは違っていた。

「授業があるんだ、行けないよ」

「そうか」

丈夫は吐き捨てるように言って、ずんずん歩いて人の群れに紛れてしまった。先程自身を恥じたばかりであるのに、いやそれだからこそ、健二は深く疑念を抱いてしまった。

本当に、あいつと友人でいていいのだろうか。俺は何もしていないのに、何か大事に巻き込まれ、終いには何処か恐ろしい場所へと誘われまいだろうか。人には、勿論言えぬ。そして言っても理解されないだろう。寧ろ嘘つを吐いて親友の誘いを断るなど、醜態しゅうたいざら晒した。間違ったことに相違ないのである。高校の時、地元の友人の誘いを断ったことなど、一度たりとも、無い。初めての事だ。それも相手は、丈夫だ。至極短い付き合いではあるが、学生運動の話に辟易した時もあるけれども、親友だ。あいつは、いいやつだ。本来決して疑ってはいけない類の人だ。しかし俺は今、丈夫を恐ろしく思っている。堪らないのだ、先程のあれが丈夫だとは、到底信じられぬ。もしこれが俺の思い違いで、あれが偶然俺の名を知っている他人だとしたら、どんなにいいだろう！丈夫を化生の如く思った事を一人後悔できるなら、どんなにいいだろうか！

健二の疑念に明確な答えが与えられることは終ついぞ無く、猪狩荘に戻った丈夫は普段と変わらぬ様子だったので、健二の抱える懊悩おうのうは苛烈かれつを極める事となった。

その翌日、小試験を終えて夕方、健二が猪狩荘に帰ると、

「おう健二、寿司行くぞ」

丈夫に声を掛けられた。健二はあまりに気乗りしなかったが、なるべく普段通りを装って、丈夫に自らの下賤さを悟られないように、大きく首肯した。

猪狩荘を出て右に逸れると、大通りがある。普段から人々が多く行き交い、飲食の場など膨大で、値段も殊^{こと}の外安く、健二には慣れた場所である。はて、と健二は首を捻った。呑み屋麵屋数あれど、寿司屋がこの通りにあるなど見聞きしたことがなかったのである。しかし丈夫は進んでいく。大通りの中ほどまで来ただろうか、丈夫はぴたりと止まって、

「ここを曲がるんだ」

なるほど、健二が知らぬのも無理はなし、公園での薄暗さとは全く異質な、怪しげな路地があった。そこがあんまりにも薄暗く怖いから、健二の内の疑念が鎌首^{かまくび}もたげてきて、くそ、やっぱり恐ろしい所に連れてこられた！ 俺は何にもしていないのに！

路地を行くと普通の寿司屋があった。健二は拍子抜けして仕舞い、途端に快活になった。

^{のれん}暖簾をくぐると大声で歓迎され、健二は余計に舞い上がってしまった。意味もなく緑茶を飲み干して、

「アガリ、おかわり」

と言ってみたりした。丈夫は隣で笑っていた。

「こりゃあ、旨い」

最初に注文していた鉄火を口に放り込んで、健二は満足げに頷いた。東京の寿司屋には初めて訪れたし、地元では「東京の魚は臭くてかなわん」などと言われていたからどんな味かと思ってみれば、旨いではないか。店内も五月蠅い客はいないし、水槽の真鯛^{まだい}も伸び伸びしているように見える。初めは恐ろしいところに連れてこられたのかと冷やとしたが、恐ろしく居心地のいいところに連れてこられたらしい。

健二が二度目のアガリを頼むのと時を同じくして、丈夫がお手洗いに行った。店を訪れてから暫く経っていたし、それ自体別段不自然なことではないから、健二は特にどうとも思わなかった。戻ってきた健二は少し頬が赤かった。

「健二、俺ア猪狩荘を出るよ」

健二は口からアガリを垂らした。

「どうした、なんか宿に不満でもあったのか。それとも住人か、俺か」

健二は決まり悪そうに、左手で首を撫でた。

「いやァ、違うさ。また運動の話だ。全共闘の奴等で部屋を借りることになってな、随分遠くに行かねばならんが、俺も本気だ、参加しないわけにいかない。一週間後にでも発つ。そうだ、俺ァ本気だぞ、健二。本気で大学を変えようと思ってる。あんな汚い奴らに任せては、駄目だ。脱税なんてのは、大学の最たる汚点だ、大恥だ。負けては、いけない。俺たちで変えるんだ。健二、やはりお前も来い。今日は別れの挨拶にするつもりだったが、惜しい、あまりに惜しい。こんなにも仲を深めた友を手放すなぞ、耐えられん。どうだ、健二よ、やはり共に行こう」

ああ、なんて残酷な問いか！ 疑念と孤独が脳を縛り上げて、健二は何も言えなくなってしまった。しかし答えというのは、元より決していたのである。健二に足りなかったのは、覚悟だ。自己の返答がたとい親友を失わせたとしても、尊厳を守り抜こうとする覚悟が足りなかった。丈夫にとってその場所は、大義を一にする友を抱いた桃源郷なのだろう。しかし、自分はどうか？

その大義を今日現在までに、^{ぶべつ}侮蔑の的としたことはなかったであろうか？ この問いだけで、結論を出すには十分足るはずだ。健二もきっと、それは分かっていた。分かっていたとしても、やはり覚悟が無ければどうも出来ぬ。

結局健二は、未熟であった。最もいけない答えを出した。そして、阿呆であった。どうしようも無い阿呆であった。

「すまん、また今度にしてくれ」

この時の丈夫の失望を、健二は生涯忘れない。

丈夫は結局、三日後に出て行った。それ以来会ってはいない。

以来健二はこの時期になると、毎度後悔するのだ。共に行かなかったことでは、断じてない。或いは丈夫も、分かっていたらと思う。後悔しているのは、自己の思いを伝えなかったことだ。親友にこそ正直な意思を、断固とした決意を、伝えるべきであった。

「俺は、悪いが行けない。しかし丈夫よ、お前を応援しないわけでは無いのだ。また連絡しよう。離れていても、親友だ。それは変わらないさ」

丈夫の訃報は、同年九月に伝えられた。

了

刑は執行された

囚人が気付かぬ程速やかに執行された

日付変更線をめがけてマダム・ギロチンが牙をむく

一秒前と何ら変わらぬ雁首はいとけなく呆けたまま

一秒前と何ら変わらぬ成長を終えた胴体を見つめていた

幾星霜も怯えて迎えたこの夜は

月が落ちる程もなく、血飛沫をあげることもなく

なんとなく明けてしまった

記念に首を晒したところで

野次馬たちは憂鬱そうに朝日を浴びるだけ

メーデー
「Mayday」

成程、この叫びも届かないなら

ハラショー
「хорошо」

形而上学とは甚だ馬鹿馬鹿しい

マンセ
「만세」

慶事によるこびなんてものは無く

アディオス
「adios」

チクタク時計だけがこの世の真実だった

傘させぬ光る道路が目に染みる

梅雨寒や涙に霞む苔の花

紫陽花と秘密を交わす梅雨曇り

学び舎に響く七つの慢の声

レモングラスが幼い初夏を連れてくる

春雷

痺れる腕を抱えながら

自ら失われつつある若さに

ため息をつくとき

だれかに なにかに

少しでも 大きく 深く

ひびを入れたくなる

この衝動は 一体

主がおはしますならば、きっと私には天罰が下るでしょう

とあるキャリアウーマンの依頼

「私は悪くない。なんで、私のことばかり責めるの？ なんで、私のことばかり嗤うの？ なんで？ なんで？ ただ、綺麗になりただけかったのに。彼に褒めてもらいたかっただけなのに。なんで、全部否定するの？ 貴方のために頑張ったのに。なんで？ 足太いからワンピース着るのも嫌だし、ブスだから髪で顔隠したいけど、彼が喜ぶと思って我慢したのに。ポニーテールも、パンプスも、少しでもかわいく見てほしいから頑張ったのに……」

苛々と女は歩いていた。ただひたすら、彼女を否定する友人、同僚、恋人に対しての不満を呪詛のように吐き出しながら、ただひたすら歩いていた。人々は彼女に軽蔑、哀れみ、驚愕の目を向けつつ避けるように流れていた。あたり一帯の空気が変わる。平穏が乱される。しかし、そのことに気づく余裕など彼女にはなかった。彼女の容姿と相まってひたすらに誰かを呪うゾンビのようであった。

そう、ゾンビである。

落ちくぼんだ瞳に、痩せこけた頬。黄ばみ荒れたカサカサの肌や唇にはシミやニキビが多くある。髪もパサつき、手足は枯れ木のように細く、頼りない。それに加えて、ピーチピンクのカシユクールワンピースに白カーディガン、赤いバレリーナパンプスと、フェミニン系の装いであり、そのアンバランスさから余計に彼女の異様さが際立っていた。

彼女は来週、自分の二十五歳の誕生日を控えた社会人である。彼氏との交際も順調だった、は

ずだった。

「なんで？ 私のためとか言って、嫌いな食べ物を押し付けてきたり、食べきれないような大量のご飯を買ってきたり……。私は、ダイエット中なのよ！ あなたに綺麗だって、褒めてもらいたいから好きなものも恥ずかしい格好も我慢して、頑張ってるのに！ なんで？ それをあなたが邪魔するのよ！ 最初のころは、あなたも協力してくれたのに……。いつから、私のことが嫌いになったのよ……。嫌いなら、捨ててくれていいのに。八つ当たりするみたいに私のダイエットを邪魔して、それで……。それで、拳句の果てに！ なんで、あなたは、妹と、遊びにしているのよ！ あんな、あんな幸せそうな顔みたことない！ 私になんて見せたことない！ なんで？ あなたも、離れて行っちゃうの？ 全部全部、私のせいにして！」

急に金切り声を張り上げた彼女から、人々はますます距離をとる。しかしながら、彼女がそれに気づくことは、ない。

髪を振り見出し、唾をまき散らし、彼女は歩くペースを速める。ふと、足元にしわだらけの広告が目に入った。なんとなしに彼女は足を止め、広告を拾い上げた。

「押しつけ善意、お断り。

貴方のお悩み解決します。

どうぞ、ワノービル4Fへ。

いつでも貴方をお待ちしています』

コミカルな絵やキザなキャッチコピーに似合わない、物騒な内容の広告。そして、彼女を引き付けたのは、一つのフレーズだった。

「押しつけ善意……。これだわ！ これよ！ 彼は私に押し付けているのよ！ 自分が良い人ズラしたいから！ デブでブスなアタシと付き合っ、自分良い人アピールしてるんだわ！ そうよ！ そうに決まってる！ 許せない。許せるわけがないわ。私を利用したのね。だったら、そんな彼にお似合いの方法で始末してあげましょう！ 私は、彼とは違って、本当に、イイヒトなんだから。このまま、危ない人を野放しにしておけないわ」

恍惚とした笑みを浮かべ、彼女は悠然と歩きだす。人々はもはや彼女のことを気に留めず、流れていく。どんなに異質の存在も日常に溶け込んでいく。町に平穏が戻る。彼女は相変わらず、そのことに気が付かないままだった。

「なるほど。お客様の言い分はわかりました」

事務所の中は予想よりも綺麗だった。彼女は、殺し屋という職業から、薄暗く荒れ果てた室内を予想していた。しかし、机も椅子も磨かれ埃もなく、掃除が行き届いていることが伺われる。観葉植物が部屋に彩を与え、コーヒーの匂いが漂い、隠れ家カフェのようである。殺し屋自身もどこにでもいるサラリーマンのようだった。

「お客様の依頼、お受けいたしましょう。ですが、本当によろしいのですか？ 彼氏さんでしょう？ 少しくらいは大目に見てやっても……」

「何よ。私が悪いっていの？ また、私のせいにするのね。いいわ。私が自分でどうにかするわ。さようなら」

「お待ちください。お客様が手を汚す必要なんてありません。少し、覚悟を知りたかっただけですので、お気に障ったようなら申し訳ありません」

仕草、話し方、表情、すべてにおいて芝居がかり胡散臭い。騙されているのかもしれない。そもそも、このご時世、殺し屋を名乗ること自体が不自然である。いつ捕まってもおかしくはない。ここは危険である。そう、普通の人ならば気づくだらう。最も、この場に来る時点で普通ではないが……。ともかく、彼女よりは理性が働くだらう。しかし、彼女はそのことも考えず、ただ彼をいち早く始末することに固執していた。そのことしか考えていない、愚か者であった。

「ともかく、早い方がよろしいようなので、今晚にでも方をつけましょう」

「わかりました。それでは」

彼女はあっさりと事務所を出た。殺し屋はもっと狂喜するかと思っていたために、拍子抜けであった。

が、彼女はビルを出たなり歓喜の叫び声をあげ、腕を振り回し全身で喜びを表す獣になって

いた。平穏がまた乱される。人々の流れも変わる。彼女はそのことに終ぞ気づかない。喜びに、自分に、酔ったまま足早と歩いていった。

それから一週間後、また彼女は殺し屋の事務所を訪れていた。殺し屋は、早くも次の依頼が来た、と、内心喜んでいた。が、彼女は気づかない。

「ねえ」

「はい。次はどのような依頼でしょうか、お客様。ご家族でしょうかご友人でしょうか。そういえば、彼氏さんと仲が良かった妹さんがいらっしゃいましたね。お次は、彼女でしょうか？ それでしたら、不自然にならないように、後追い等……」

「彼がいないの」

「はい？ 今なんとおっしゃいましたか」

「彼がいないの。毎時間、必ず連絡してくれたのに、今日もデートに行くはずだったのに、どこもいないの。妹や友達に聞いても知らないって。そればかりか、私の心配ばかりするの。彼はどこ？ 知ってるんでしょう？」

殺し屋は呆れていた。自分が一週間前にしたことを忘れているのだろうか。それとも自分がしたことを直視できずに逃げているのだろうか。はたまた、一種の防衛本能か。そう、冷静に分析しながら、幼子に言い聞かせるように先週のことを話した。彼女は、もちろん認めなかった。それどころか、殺し屋が彼氏と結託して自分を騙そうとしているのではないかと疑いだした。

「彼を返して！ 彼はどこにいるの？」

「だから、そんなことして、ワタシになんのメリットがあるのです？」

「嘘つかないで！ 彼を返して！ もう、ここ以外は全部調べたのよ！ 彼を返して。お金なら、いくらでも払うから、お願いだから、彼を返して……」

とうとう彼女は泣き崩れた。冗談じゃない。これだから、恋愛関係の依頼は嫌なのだ。早々にお帰り願おう。しかし、このまま素直に帰るわけがない。そもそも、コイツは人殺しである。自分は引き返す選択を示したのにも関わらずそれを無視して依頼してきたはずだ。自分が気を遣う相手ではないだろう。

殺し屋は、女の相手をする事に疲れ果て、もはや殺し屋としても自分を取り繕うこともしなかった。

「分かりました。彼の居場所を教えてあげましょう。本当は依頼内容を漏らすことはしたくないのですが、貴方の熱意に負けました」

「やっぱり、貴方が隠してたのね。でも、いいわ。許してあげる。私はイイヒトなんだもの。せっかく一週間ぶりに彼に会えるのに、アンタに怒ってたらますますブスになっちゃうわ。そんな彼が悲しんじゃうわ。それで、彼はどこにいるの？」

さっきまでの癩癩はどこにやったのか、彼女は落ち着きを取り戻した。殺し屋はめんどくさそうに、窓の外を指さした。

「あそこにいますよ」

普通なら、嘘だと気づくだろう。しかし、彼女は彼氏と会えなかったことへの心労から一週間、碌にもものも食べていない。ダイエットをしているため、もともと栄養失調気味だったのに、さらに体に負荷がかかり正常な判断ができなくなっていた。そのため、彼女は殺し屋の言葉に何の疑いを持たなかった。フラフラと覚束ない足取りで窓に近づいた。ふらつく体を何とか気力で支えていた。目だけが獲物を見つけた野獣のようにギラギラしていた。

そして、ビルの四階から、なんの躊躇もなく、飛び降りた。

人々は流れを止める。悲鳴、罵声、救急車を呼ぶ声が響く。平穏が乱される。彼女は最期まで自分が異物であったことに気が付かない鈍感者であった。最期まで周りへの影響を考えない愚か者であった。最期まで、自分の世界に固執した、臆病者であった。

殺し屋はその様子をつまらなさそうに眺めていた。そして、気分転換にコーヒーでも淹れようと簡易キッチンへ向かった。もはや、女への興味は尽きていた。どんな顔だったかも忘れ、殺し屋に日常に戻る。

「今日の夕ご飯は何だろうな……」

やがて、町には平穩が戻るだろう。

ピシリ、ピキッ、パキッ、ガリッ

薄氷の上を行く

後戻りなんてできやしない

とある男子中学生の依頼

僕がいなくても世界は廻る。

僕がない方が世界は円滑に廻る。

コンコンコンコン

「いらっしゃいませ、お客様。今回はどのようなプランをお考えですか。どうぞ、お掛けください。コーヒーと紅茶はどちらがよろしいですか？」

「いません。僕を殺してください。僕は必要ない子だから、早く殺してください」

「これはまた物騒ですね。まあ、そう焦らずに、紅茶でいいですね。お待ちください」

これはまたぶっ飛んだ人が来ましたね。自殺補助とは、また、楽しめそうですね。見た目や声の高さ的に十代でしょう。私服ですので、中学生か高校生かは判別できませんが、このような場所に一人で来るとはよほど肝が据わっているのか、危機感がないのか、よく無事でしたね。

カモミールを淹れながら依頼主について考える。手は淀みなく動き、顔には微笑みが浮かんでいる。はたから見ると紅茶を丁寧に、相手を想って淹れているように見える。が、その笑みは、相手をどのように殺すか、その一点について妄想し、興奮しているからであった。彼のように人生経験が少ない相手が見せる表情が好きだった。あらゆることに対して過剰に反応する無垢な人を求めていた。

そんな心情を顔に出さず、紅茶を差し出す。繕うことは得意である。

「どうぞ、召し上がりください。熱いので、お気をつけて」

「ありがとうございます」

うん。お礼もちゃんと言えるようだし、身なりも清潔感がある。頬もこけてないしご飯もしっかり食べているみたいだね。ただ、目の下にクマがあるし、眠れていないのかもしれないね。さて、どんな話をしてくれるのか、楽しみだな。ワタシのお眼鏡にかなうといいのですが。

「お蔭たようですので、お話を聞かせてください」

「分かりました。といっても、面白くもなんともないですよ」

僕の父は政治家なんです。昔から、頭も良くて、野心家で家族全員、そんな父を誇りに思っています。父も母も僕が生まれた時はとても喜びました。待望の長男でした。父は、僕に政治家として後を継がせようと思いました。それが、僕にとっては大きなプレッシャーでした。父と母の期待

を裏切らないように勉強も運動も頑張りました。友達と遊べないのが辛かったのですが、父と母が喜ぶ姿を見れるからいいや、と自分に言い聞かせていました。むしろ、勉強ができると頼りにされたることも多かったので得意になっていました。

そうやって何とか頑張って過ごしていました。僕は地元でも進学校だと有名な第一中学校に入学しました。二年に進級し、そして先週、次期生徒会長選挙がありました。当然、父は僕に立候補するよう言いました。そして、当選することが当たり前だと、疑っていませんでした。僕は一生懸命頑張りました。毎朝早くから校門に立って演説したり、昼にもチラシを配ったりしました。案外自分に性に合っていて、どのような学校にしていけるのか、よりよい学校生活とは何か、みんなのために考えて行動することの楽しさを知りました。もう一人、サッカー部の人気者が立候補していました。彼は、僕よりも真剣に学校のことを考えて選挙活動をしていなかったのが眼中にありませんでした。クラスメイトも協力的だし、生徒の皆さんの反応も良かったので、僕は当選できると思っていました。

ですが、蓋を開けてみたら、僕には一票も入っていませんでした。何かの間違いだと思いました。そんなはずはないと何度も選挙委員長さんに確認しました。結果は変わりません。僕は、もう一人の立候補者が就任挨拶をしているのをぼんやりと眺めていました。

演説が終わって、我に振り返りあたりを見渡すと、クラスメイト全員が僕を嗤っていました。そして、僕を罵りました。誰も助けてくれませんでした。担任の先生も通りすがりの生徒も、誰も僕を助けませんでした。

僕は、家に帰りたくありませんでした。けれど、帰るしかありません。しぶしぶ家に帰り、生徒会選挙の結果を報告しました。案の定、父は激怒しました。それからずっと、口をきいてくれません。母も、父に逆らってまで、僕に関わろうとしませんでした。僕はどこにいても独りになってしまいました。

僕は、世界から否定されました。僕は異質の存在で必要ない要素です。

僕がいない方が世界は円滑に廻る。

それが僕の出した結論です。

「だから、殺し屋さん、僕のことを殺してください」

困った。彼は、ずいぶんと思いつめている。確かに、家族とクラスメイトに否定されたら死にたくもなるが、早計過ぎやしないだろうか。確かに、彼の顔が歪むところは見たいが、さとするのが大人の役目だろう。もったいないが、しょうがない。

「お客様、少し思い詰めすぎですよ。まだ、中学生ですよ。これからですよ。なんとかなりますよ、きっと」

「まただ。そんなこと、聞き飽きたんですよ！ 僕は、完璧じゃないといけないんだ！ 僕は父の名に恥じないような、立派で野心的な政治家になりたいんだ！ それなのに、こんなことで躓いたらダメなんだよ！ 僕は、完璧じゃないと、生きていちゃいけないんだ！ 押し付けてる善意じゃないとダメなのか？ なら、僕は、学校をより良くするために僕の理想を、良かれと思って、押し付けた！ これで、十分だろう！ 殺してくれよ！」

ブツリ。耳の奥で紐の千切れる音がした。完璧じゃないと生きちゃいけない？ 何を言っている？ 彼は、ワタシを侮辱した。ポリシーに反するが彼を殺したくてたまらない。彼も死を望んでいるしいじゃないか。殺そう。でも、ここで殺すのは惜しい。特別な方法で、特別な場所で殺してあげよう。

「いいでしょう。そこまで言うなら、殺してあげましょう。ただし、今すぐに、とはいきません。こちら準備があるのもので。それでもよろしいですか？」

「構いません。お金はこれで足りみますか？」

「ありがとうございます。十分です。それでは、連絡先を交換しましょう。こちらの指示に従ってください」

「分かりました。よろしく願います」

それからというもの、殺し屋は毎週日曜日に彼と繁華街へ行ったり、遊園地へ行ったり、あちこち連れまわした。日曜日に会えないときは、放課後に勉強を教えたり買い食いを一緒にしたりした。まるで彼が年の離れた弟であるかのように接した。彼の方も、最初は戸惑い、なぜこんなことをするのか反抗した。が、殺すために必要だと言いくるめられ、しぶしぶ一緒にいた。しかし、友人と遊びに行ったことが片手で数える程度しかなかった彼は、やることすべてが目新しく感じていた。そのうち、殺し屋と会うことを待ち望むようになった。さらに、一人っ子で甘える相手がいなかったこともあり、殺し屋を兄のように慕い始めた。

「来週の日曜日も空いてるよ！ どこに行こっか？」

「そうですねえ……。もし、貴方の都合が良ければ、ワタシの家に来ませんか？ 会わせたい人がいるのです」

「勿論、いいよ！ 楽しみだな！ じゃあ、また来週ね！」

「ええ、ワタシも楽しみです。ではまた。詳しいことは連絡します」

「わかった！」

彼は、すでに死のうと思ってなどいなかった。殺し屋と会うようになり心の拠り所ができたためか、学校や家で独りでも平気だった。そのうち、同じようにクラスで孤立している人と話すようになった。彼は幸せだった。殺し屋が自分を生かし、支えてくれたことへ感謝していた。

「わあ！ 大きな家だね。奥さんと二人でしょ？ 寂しくない？」

「大丈夫ですよ。慣れました。それに、ワタシは物を捨てられない人なので足りないくらいですよ」

「うっそだー。足りるでしょ。いくら何でも」

「いえいえ、本当ですよ」

冗談を言い合いながら家の中に入る。白い壁は清潔感があり、ところどころに観葉植物があって空間に潤いをもたらしている。事務所がオシャレなら、家もオシャレなのか、と彼は考えながらリビングに入った。リビングも落ち着いた雰囲気です。コーヒーの匂いが漂っていた。

「オシャレだね！ いいなー。僕もこんなところ住んでみたいよ。いつから住んでるの？」

「五年前くらいですかね。知人が住んでいたのですが、仕事の都合で引っ越すとかで、譲ってもらいました」

「へえー。ラッキーだね。そういえば、奥さんは？」

「そうですね。会いに行きませんか」

会いに行く、この言葉から、奥さんが普通での状態ではないことに気づくべきだった。しかし、心を許しきっていた彼は、何の疑いもなく殺し屋の後に続いた。

奥さんは、眠っていた。

二階にある自分の部屋で、たくさんのチューブに繋がれながら。人工呼吸器、栄養補給のための点滴、心電図、他にもチューブが沢山あった。

奥さんは植物状態だった。

「なに、これ……」

「ハニーはね、昔、ショックのあまり首吊り自殺したのですよ。幸いにも、発見が早かったおかげで、命だけは助かりました。けれど、もう、目覚めません。ワタシはそんなハニーと添い遂げようと思っています。絶対に、もう二度と離れないと誓ったのです」

殺し屋は淡々と話しているが、顔は強張り、声も震えていた。ここまで感情をあらわにした殺し屋を初めて見た彼は、奥さんに同情しつつ、殺し屋が秘密を打ち明けてくれたことに対してほの暗い喜びを感じていた。自分は、特別である。少なくとも、殺し屋の世界では、僕は必要な存在だ。

優越感に浸りながら、彼は殺し屋を励まそうと振り返ろうとした。瞬間、右足が熱くなった。

遅れて、燃えるような痛みを感じ、立っていられなくなった。続いて、右肩、左手首にも同様の痛みを感じた。

「え？」

「触らないでください。汚れます」

「何？ 痛い。痛いよ。助けて。何が起きてるの？」

「依頼のほう、完遂致しました」

「え？ 嘘だ。なんで、今？」

「言ったでしょう。殺すのに準備が必要です、と。お客様は早く死にたいご様子でしたので、少し手荒な方法でしたが、満足していただけましたか？」

にこり、と殺し屋が綺麗な笑顔を作る。

今まで、殺し屋と過ごした日々は何だったのか。幻だったのか。では、僕は最初から踊らされていたのか。殺し屋もまた、クラスメイトのように僕を嗤っていたのか。それなのに、今まで気づかずに兄のように慕っていた僕はバカじゃないか。僕は、僕は、誰の特別にもなれないのか……

彼は、涙を流しながら殺し屋を睨んだ。痛みだけでなく、悔しさや情けなさ、悲しさからくる涙だった。

「お客様、失礼ですが、貴方は、私の、ご家族様の、ご友人の世界に、つまりは、この世界に、必要ありません。貴方がいない方が、世界は円滑に廻ります」

彼の生きたいと願う心を折るには十分すぎる言葉だった。自分を否定され、彼の顔一面は、絶望の一色で染め上がっていた。

「お客様、ワタシは、普通に生きてくても生きられない人を知っています。完璧になろうとあがいて、程遠い存在になった人を知っています。お客様は、ワタシの一番大切な人のすべてを否定しました。私の世界を否定しました。これは、私からの報復です」

殺し屋の逆鱗に触れたのだと、死ぬ間際によく気付いた彼は、殺し屋に謝ろうと思った。

自分が彼にしたことは、自分がかつてクラスメイトや両親にされたことだった。自分の世界を否定されることは辛い。謝って、許されることではないが、どうせこのまま死ぬなら、したいことをしてもいいだろう。そう考えて、最期の気力を振り絞って、顔を見上げた。

見上げた殺し屋の顔は歪んでいた。口を吊り上げ、目は三日月の形をしていた。哀れみでも侮蔑でもなく、恍惚や優越感で顔一面を染めていた。

「この、快樂殺人者。地獄に落ちろ……」

彼の最期の言葉は謝罪ではなく、罵声であった。薄れゆく意識の中、殺し屋が目を見開いたことに対し、彼は少し満足そうに息を引き取った。

「快樂殺人者、ねえ……」

意外だった。あれだけ刺されたのに、気絶しなかった。もっと、慌てふためき泣き言を漏らしながら死んでいくのだと予想していたのに。とりあえず、報復が終わり、満足したけど、彼が言った最期の言葉がどうしても引っかかってしまう。

肉塊を移動させながら殺し屋は考える。階段を下りて、裏庭へと向かう。そこは、煤だらけで、内科を燃やした後があった。そこに、肉塊を置き、火を放つ。あたりに、ひどい腐臭が立ち込める。それを気にせず、殺し屋は考える。

自分は快樂殺人者なのか。否。違う。違う、はずである。違わなければならない。そうでなければ、自分は、ハニーを傷つけた糞野郎共と同じではないか！ それだけは、避けなければ！ 落ち着け、そもそも自分には目的がある、そう、ハニーを守ると誓ったときに決めたじゃないか。

ぼんやりと、殺し屋は、自分がハニーに出会ったころを思い出す。自分の世界を肯定するために。

ピシリ、ピキピキ、バリンツ、バキッ

薄氷の割れる音

開いた穴は何処へと続く？

とあるシスターの依頼

もとい

とある狂信者の妄想

シスターは、神様だった。

自分に人の温かさを教えてくれた。勉強の面白さを教えてくれた。シスターだから、それが口癖だった。謙虚で勤勉で、誰にでも分け隔てなく優しさを振りまいていた。けど、ちょっと泣き虫なところもあった。特に、誰かを叱るときはいつも涙目だった。そんなシスターは町で美人だと有名だった。いい寄る男の人も多かった。けど、神に仕える身だから、といつも誘い断っていた。人気者で、いつもいろんな人に囲まれていた。いつしか、自分にだけその優しさを分けて欲しい。いろんな行状が見たいと思うようになった。初恋だった。

そんな、シスターがある日、男の人を見ると怯えるようになった。暗がりや狭い部屋を避け始めた。なんとなく、シスターに何が起こったのか理解した自分は、シスターから距離をとった。シスターのためだと言い聞かせて我慢したけど、それが間違いだった。

良く晴れた、夏の日、我慢しきれなくなって、シスターに会いに行った。もう、一か月も会っていない。一緒にラムネを飲もう、なんて口実まで作って。けれど、そんな僕を迎えたのは、首を吊ったシスターだった。自分はラムネを落とし、呆然と立ち尽くした。けど、すぐに我に返り、救急車を呼んだ。命が助かった代わりに、シスターは、目を覚ませなくなった。

誰が、ここまでシスターを追い詰めたのか。シスターに乱暴をした、アイツらか。それとも、ありもしない噂をでっち上げた近所の人か。傍にいなかった自分か。腸が煮えくり返りそうだった。シスターが自殺するまで思い詰めていたのに、誰も裁かれないのか。裁かれたとしても、なぜ、のうのうと生きているのか。なぜ、同じことを繰り返すのか。なぜ、シスターだけが苦しむのか。なぜ、なぜ、なぜ……。

そうか、誰も裁けないのなら、誰もシスターの苦しみを代弁しないのならば、自分がすればいいじゃないか。なんで木塚中旦だろう。誰かを頼っちゃだめだ。シスターを助けたのは、自分だし、これもきっと、神様の思し召しだよな！

自分が、ヒーローになろう！ きっと、シスターも喜んでくれるはず。だったら、直ぐ傍で応援してほしいな。そうだ、一緒に暮らして、ずっと一緒にいよう。結婚しよう！ そしたら、シスターなんてよそよそしいよね。ハニーって呼ぼうかな。ああ！ ハニーと結婚できるなんて夢みたいだ！ ハニーに褒められるように頑張って、クズたちを裁こう！ 法律じゃ裁けない、裁いても刑が軽すぎるヤツらに天罰を与えないと！

ハニーからの最初で最後の依頼だ！

ああ、そうだ、ワタシはそう依頼されたじゃないか。他でもない、最愛のハニーに。だったら、迷う必要なんてない。

気が付くと、あたりは暗くなっていた。だいぶ前に燃え尽きたようで、肉塊は灰になっている。

あの頃を思い出したら、無性にハニーに会いたくなっちゃった。だいぶ煤で汚れちゃったけど、きっと大丈夫だ。そう判断して、着替える手間も惜しんで、ワタシは二階に上がり、ハニーの顔

を見た。

ハニーは、泣いていた。

まるで、今の回想を悲しむかのように、ワタシの行いが間違っているとでも責めるように。

「なぜ、泣くのです？ ハニーのために、努力しました。沢山、数えきれないほど、裁きました。法律の穴を掻い潜ってのうのうと生きているヤツラに天罰を下しました。それが、ダメなのですか？ ワタシが間違っているのですか？ どんな人でも命は奪ってはいけないと、そう、ワタシを叱るのですか？ それとも、私は快樂殺人者だといっているのですか？ ワタシは、ハニーの役に立ちませんでしたか？」

ひたすらハニーに問いかける。けれど、返事はない。当然だ。眠っているのだから。そのことは知っている。でも、問いかけずには、いられなかった。

「懺悔します、ハニー。だから、見捨てないでください。お願いします。ワタシを否定しないで」

ワタシの願いは届かないのか、ハニーの涙は止まらない。

突然、心電図のアラーム音が鳴り響く。ハニーの心臓が動きを止めた。呼吸もしていない。ピーという長い電子音が響く。

突然のことにワタシは理解が追いつかなかった。ただ、ぼんやりとハニーの傍らにいた。理解が追いつき、心臓マッサージをする。が、彼女の心臓は動き始めない。

嫌だ！ イヤダ！ いやだ！ 置いていかナイで！ 独りはいやだ！ かなしい、寂しい、クルしい……。ひとの温かさヲ教えたのは貴方ナノに、それを奪うノか？ 勉強の面白さ、マジメである事の尊さヲおしえてクレタノに、汚すノか？ いやだ！ イヤダ！ 嫌だ！ ハニー、戻ってきて……。

どれくらい、泣き叫んでいたのだろうか。あたりは明るくなっていた。ハニーはもう目を覚ま

さない。動かない。笑わない。泣かない。ハニーは、死んでしまった。

ワタシの世界は崩れてしまった。ワタシはもう、必要ないですね。もう、裁けないのです。もう、疲れたのです。ハニーがいない生活なんて、考えられない。もう、十分でしょう。とっても頑張りました。もう、死にたいのです。でも、最後にハニーは、ワタシを否定しました。きっと、神様の元へは、いきません。ワタシは、今まで裁いてきたクズと一緒になのでしょう。でも、最期は一緒でもいいですか。最期のわがまま、聞いてくれますか？ 心中、したいです。体だけでも、連れて行ってもいいですか？ 貴方と一緒に灰になりたいです。貴方は呆れながら赦してくれるでしょう。

シスターだったものを担ぎ、のろのろと階段を下り、裏庭に出る。そして、シスターの遺体に、自分自身に火をつける。あたりに腐臭が漂う。体が燃える痛みが脳に警報を鳴らす。その警報を押さえつけて、ただただ、自分が燃える様子を眺める。

シスター、ワタシは貴方と過ごせて幸せでした。

バキッ、ビキビキ、ガラガラ、ガッシャン

薄氷の崩れる音。

堕ちた先には地獄の業火

これが天罰であるならば喜んでこの身を焼きましょう

炎は二人の全身を包み、やがて消えた。残ったのは、炭だけだった。誰も、とあるシスターと狂信者が死んだことに気が付かない。この先もずっと。

神様だけが知っている。

了

設定は、生えるもの。

まさか、続くとは思っていなかった作品です。

殺し屋さんは、一番子供で、現実から逃げた臆病者ですね。こうなるとは、思いませんでした。驚きです。

もう、続きません。無理です。

とりあえず、楽しかったです。

昨日は子どもたちがサッカーをして踏みならした公園の芝生の上を、今日はすずめが、歩いては一飛びし、また歩いてはもう一飛びして、のびやかに駆け回っていた。公園の横の木々の鬱蒼とした場所は、太陽の光を反射した緑が、きらとちりばめられており、風に揺られて気持ち良く鳴っている。全てが太陽のベールをまとい、贅沢な休日の昼下がりを創り出していた。自然の喜びがあらゆる空間から、零れ落ちそうだった。その一滴を、彼女は手に取れる気がした。だからこの景色の中に一人の男の姿が現れるなんて、彼女は夢にも思わなかった。

いつもスーツを身にまとった男しか見ていないから、白い襟のポロシャツに綿のパンツを着た男が、彼女の目に新しかった。そこから伸びる白い腕が、男の股下までしか背丈のない大きな瞳の男の子を連れていたことも。何より彼女の心を軋ませたのは、男の幼児を見る瞳だった。彼女はそんな瞳に向けられたことは一度もなかった。その瞳を以ってして、男とその幼児の連れ添う姿が、言いようがない程、この喜びに満ちた空間の一片となっていた。

彼女は歩幅を大きくし、腕を前後に勢いよく振り、身体を動かすことに興じてみた。すると、普段使っていなかった筋肉が久々の呼び出しに応じて、脈打つ彼らのエネルギーを内側から感じ取ることができた。彼女は自分の体の中にも、こんな素直な働きをする箇所があったのだと気付く。彼女を置いて勝手に膨れ上がる悲しみや不安の感情や、最もらしい理由をつけて自己を正当化しようとする傲慢な理性の働きよりも、ずっと素直だった。彼女はこの素晴らしく晴れた休日の一片になれるよう、力いっぱい地面を蹴って走り出した。

「疲れた」、この言葉が口癖になったのは何時からだったか。アパートのドアノブを回して入る、明かりのないキッチンの前で溜息と共にこの言葉が出る。面倒で電気をつける気になれず普段の記憶を頼りに足元に気を付けながら部屋に入る。電気をつけるといきなりの光に目が慣れず、片目を瞑りながら鞆をそこらのスペースに放り投げる。堅苦しいスーツを脱ぎながら冷蔵庫の中身を思い出す。ビールはあったか、おかずは何が残っているか、そういえばまだ開けてなかった缶詰があったな、などと考えながら部屋着に着替えたところでようやく気が楽になる。

最初に言った「疲れた」とは肉体的、精神的な意味の両方が含まれている。就活を経て入れた今の会社に不満はない。働くこと自体に不満があるのだ。中学・高校の頃はただただ大学に合格することだけを意識してきた。大学では講義を話半分に聞き、遊ぶ金欲しさでバイトを始め、学年が上がるにつれ膨らんだ焦燥感から情報を集めなんとか内定を貰った。見つかると思った働く理由や生きがいは数年経った今でも結局見つからず、日々を漠然と過ごしている。

「いっそ、ファンタジーの世界に行ければ毎日が刺激でいっぱい楽しいんだろうなあ」

抱えている問題をほっぽり出して楽になりたい気持ちが独り言に表れてしまった。剣でモンスターを倒すことが仕事で夜は仲間と酒を飲みながら歌って踊る。子供には憧れの的で町娘からは恋い焦がられるのだ。そしてある日うわさを聞き付けた貴族やら王族のお嬢様に直々の依頼を受け親密になったりならなかったり。

そんな楽しい妄想も風呂から上がれば明日の仕事の憂鬱と一緒に睡魔が包みこんでどうでもよくしてくれた。誘われるようにベッドに頭をうずめると僕の意識はそこで途絶えた。

体の下から感じる小さなゴツゴツした感触で目が覚めると、鳥か何かが飛んでいる青空が見えた。同時に風に揺れる草も目につき、驚いて体を起こすと目に入ったのは見覚えのないどこかの草原だった。複数の疑問が一度に頭の中で起こり、何かしなければとは思うのだが具体的な内容が浮かばず視線をあちらこちらに移すことしかできなかった。

自分の服装は寝る時に着ていたルームウェアそのままであり、靴も履いているわけではなく、自分が寝た後に誰かから連れ去られてここに放置されたというのがギリギリ考えられる可能性であった。それでも不可解な点に限りはないが、後ろからかけられた声に考え事が全て吹き飛んだ。

「変な恰好して何やってんだ？」

反射的に振り向くと、行商人と形容するのがふさわしい馬に乗った男性がいた。男性は西欧の顔つきをした中年で服装は中世のヨーロッパの絵画で見た農民の恰好であり、乗っている馬には荷台が繋がれ木箱が複数積まれていた。

「あ、うんと、えっ？」

質問は聞き取れたが、新たに追加された疑問に思考が追いつかず、言葉が出なかった。男性は怪訝な表情を作り

「おめえ大丈夫か？ 俺の言葉聞こえてっか？」

と確かめてきた。咄嗟にはい！と返事をし、どうにか浮かんだ質問をした。

「ここってどこなんですかね？」

男性が返した「だ」という答えには流石に許容範囲を超えており何も言うことができなかった。

男性、名前はカルフさんと言うのだが、に話を聞くとここがアンドラ国イーザ地方ウザク侯爵領であると教えてもらった。で、近くにエッサムという街があるそうなので荷台に乗せてそこまで案内してもらえらることになった。ここでファンタジーの世界になぜかはわからないが来たのだ

と分かり、鼓動が早くなり興奮が体中に伝達したのを感じた。ゲームの中の出来事が現実になっている。これから自分は剣を握り、魔法を唱え、冒険に出かけるのだ！　そうと分かれば早く装備を揃えたいと思った。まずは安物の剣でもいい、とゆうか靴がほしい、はやる気持ちを膨らませながら見えてきた城壁は昔のヨーロッパにありそうな年季の入ったもので、入り口には門番が一人槍を構えて立っていた。

「あの門番は魔物から街を守っているんですか？」

「まあそうだな。ここいらはそんな魔物が出ないから平和だけだな」

カルフさんの答えから想像通りのファンタジーの世界であることを確信し、ますます興奮して鼻息が荒くなってきた。門番の前まで来ると

「なんだそいつは？　奴隷か？」

とカルフさんに話しかけてきた。僕は興奮していたのもあり、何か一言文句を言いたい気持ちだったが

「違う違う。カトーって名前でごうの草原に突っ立ってたもんだから街に連れてきた」

とカルフさんが説明したのでそうなんです、と付け足しただけにした。

街に入りカルフさんと別れた後、武具屋を見つけようとしたのだが、金銭がないことに気付き少し自分でも馬鹿に思えてしまった。冷静になって考えてみると僕はこれから親切な誰かからこの世界の服と靴を貰い、これまた親切な人から住み込みで働かせてもらえる店を探し、何か月かお金を貯めて初めて武器を揃えることができ、冒険に旅立つことができるのだ。ゲームの世界でも現実と変わらない構造にもしかしたら必殺技とかもないのかと考えたらやる気がどんどんなくなった。剣だっていきなりまともに振れないだろうし、魔物に会えばスライム以外なら殺されるだろう。僕はこの世界でも疲れたと言う生活を送るのかと危惧しながら親切な人探しを始めた。

終わり

取材を終えた帰り道、突然の夕立に襲われた俺は近くにあるいとこの家でしばらくの間、雨宿りをさせてもらうことにした。玄関の扉をノックすると、すぐに家政婦の心愛さんが出てきた。

「まあ！ 城戸さん、ずぶ濡れじゃないですか！ すぐに拭くものをお持ちしますね」

心愛さんはそう言うと大急ぎで家の奥へ引っ込み、きれいなタオルを持ってきてくれた。タオルを受け取って濡れた体を拭きながら、しばらくの間雨宿りをさせてほしいという旨を伝えると、心愛さんは快く俺を家に上げてくれた。

今まで何度も来ている家なので勝手は知っている。とりあえず一休みさせてもらおうと思い、広間の扉を開けるとそこにはすでに先客がいた。

「Tシャツにスキニーパンツというラフな格好に色の濃い眼鏡をかけた女の子……姪の伊央菜だ。伊央菜はソファの上に寝っ転がり、手にした知恵の輪をカチャカチャといじくっている。

「よっ、伊央菜。元気か？」

「……さっきまではね。依頼者が来たと思ってやるき出してたところだったのに、よりによってトーヤだったなんて」

そう言って、伊央菜は盛大にため息をついた。少しイラッとするが、いつものことなので流すことにする。

「悪かったな、つまらない奴が来て」

「つまらないだけならまだいいよ。トーヤは来る度に取材だの何だの言って、依頼内容を聞き出そうとするんだから」

そう言われるとぐうの音も出ない。というのも、伊央菜は少し前に亡くなった伯父さんの後を継いで探偵をしているのだが、伯父さんに劣らぬ手腕を持っていて、時折大きな依頼が舞い込むこともあるらしい。

雑誌記者の俺にとって、その手の依頼はいい記事のネタになるので、是が非でも話を聞きたいところなのだが……伊央菜は守秘義務があると言ってあまり多くを語ってくれない。必然的に伊央

菜と会う度、そういう話が多くなってしまうのは紛れもない事実だ。

「今日は雨宿りさせてもらいに来ただけだよ。まあ、ついでに何か面白い事件の話でも聞かせてもらえると、とてもありがたいんだが」

「……そういう悪びれないとこ、ほんとにすごいと思う。感心はしないけど」

「それはどうも。で、何かない？」

続けてそう訊くと、伊央菜はまた大きなため息をついた。あきれた……というよりはどこか諦めたような雰囲気だ。

「いいよ、話してあげる。ただし――」

そこまで言うと、伊央菜は一枚の紙を投げてよこした。広げてみるとそれは近くにできたスイーツバイキングのチラシだった。

「それに連れてって。もちろん、トーヤのおごりでね」

「お前、本当に甘いもの好きだよな。てか、おごりかよ」

「ネタを提供するんだから、そのくらいの対価は払ってもらわないと。いいでしょ？」

「あー、今月ちょっと厳しいんだよな……後払いじゃだめか？」

「だめ。後払いオッケーにしたら、トーヤ絶対踏み倒すじゃん」

くそ、全部お見通しか。ネタだけ貰ってバックレようかと思ったのに。しかし、現状懐が寂しいのは事実だ。

「そんなことしないって。なあ、頼むよ、伊央菜。本当に今月は厳しいんだ。せめて、何かチャンスをくれ」

俺は両手を合わせて必死に頼み込む。最初は断られたが何度も食い下がり、最後は伊央菜の方が折れた。

「……あーもう、わかったよ。じゃあトーヤ、私と一つ勝負しよ！ 私が勝ったら最初に言った

通りスイーツバイキングのおごり、トーヤが勝ったら対価はなしでいいよ」

それが伊央菜にできる最大限の譲歩らしい。もちろん、俺はその条件をのむしかない。

「わかった。で、その勝負ってのは？」

「簡単だよ、これから私がトーヤに悪戯を仕掛ける。その悪戯に引っかからなかったらトーヤの勝ち。引っかかったら私の勝ち。どう？」

「いいだろう、その勝負受けて立つ！」

真剣な顔の裏で俺は密かにほくそ笑む。この時点で俺は大きなアドバンテージを得ている。そもそも、悪戯というのは相手に知られていないから成立するものであって、あらかじめあると知っていれば、まず引っかかることはない。

——この勝負、貰った。

そう思った時、広間の扉が開き、トレーを持った心愛さんが入ってきた。

「城戸さん、伊央菜さん、コーヒーをお持ちしましたので、どうぞ」

そう言いながら、心愛さんはソファの近くにあるテーブルにコーヒーカップを二つ置き、カップの間にシュガーポット、ミルクを置いた。

「それでは、私はこれで。何かあればすぐ呼んでくださいね」

心愛さんはそう言って一礼すると部屋を出て行った。その後、伊央菜がソファに座り直したのを見て、俺はその対面の椅子に腰掛けた。

「お前、コーヒーなんて飲めたのか？」

「あんまり好きじゃないけど、砂糖とミルクで甘くすれば飲めるよ」

伊央菜はコーヒーを自分の手元に引き寄せると、すぐにシュガーポットからシュガースプーンを引き上げて山盛りの砂糖をコーヒーに入れた。これだけでも充分甘そうだが、伊央菜はさらにミ

ルクを二つも入れ、よくかき混ぜてからカップに口をつけた。

「入れ過ぎだろ……よくそんなの飲めるよな」

呆れてそんな言葉が漏れるが、当の本人にはまだ苦かったようで、さらにミルクを足し始める。

このまま見てると気分が悪くなって、せっかく淹れてもらったコーヒーが飲めなくなりそうだったので、俺もさっさとコーヒーを飲んでしまうことにした。

とはいえ、俺もブラックコーヒーはあまり好きではない。伊央菜からシュガーポットを受け取って、砂糖を一杯掬い入れ、ミルクを一つだけ入れてかき混ぜる。

……この時、俺は完全に油断していた。差し入れられたコーヒーと伊央菜の行動に気を取られ、勝負の内容をすっかり忘れていた。

コーヒーを混ぜ終えてすぐに一口、口にして――

「――ッ！ ゲホッ！ゲホッ！！」

盛大にむせ返った。

襲ってきたのは苦さではなく、強烈なエグ味。しばらくの間、俺はこの体験したことのないエグ味に悶絶した。

「あはは！ まんまと引っかけたね、トーヤ」

やっとの思いで落ち着きを取り戻したタイミングで、伊央菜が耐えきれなくなったように笑いだ

した。それを聞いて俺はようやく、勝負のことを思い出した。

「お前……何をやった？」

「塩を入れたんだよ。トーヤのコーヒーだけにね」

なんてことしやがるんだ、こいつ。

他にも言いたいことは山ほどあるが、それより一つ気になることがあった。

「……なあ、伊央菜。いつ俺のコーヒーに塩を入れた？ ミルクは個別だし、砂糖はお前の方が先に使ってる。ってことは、最初から入っていたのか？ まさか、心愛さんもグルか？」

「違うよ、心愛さんはただコーヒーを持ってきてくれただけ。それに最初から塩を入れてたら、どっちに入ってるか分からなくなっちゃうじゃん」

改めてカップを見直すが、両方とも同じデザインで見分ける術は特にないようだ。

「となると、本当にどうやったんだ？ 他に方法なんて……」

「これを使ったんだよ」

そう言って、伊央菜が手にしたのはシュガーポットだった。予想外の答えに目を白黒させる俺に伊央菜は順を追って説明を始めた。

「このシュガーポットには下の方に砂糖、上の方に塩を入れて置いたの。そして、重要なのはシュガースプーン的位置。トーヤ、私がどうやって砂糖入れたか覚えてる？」

「ん？ えっと、確か……スプーンを引き上げて山盛りの砂糖を入れてたな」

「そう。もともと底の方に入っていたスプーンを引き上げた。トリックはそれだけ。砂糖や塩なんかは山が形成されていると、上の方にある粒は全部滑り落ちちゃう特徴があるの。だから、スプーンを引き上げれば、上の方にある塩は滑り落ちて砂糖だけ取ることができる。トーヤの時は表面を掬ったから塩だけが入っちゃったというわけ」

説明を聞いて感心すると同時に頭を抱え項垂れる。つまるところ、勝負は伊央菜が先に砂糖を入れた瞬間に決まっていたということだ。

「そういうわけで、この勝負は私の勝ち。約束通り、奢ってもらうからね！」

そう言って、勝者は満面の笑みを見せる。その顔を見て俺は、そううまい話はないものだなとつくづく思った。

【あとがき】

少し前に部誌に上げた小説の続編みたいななにか。

実習中の忙しい時期に書き上げているので、細部が適当になってしまったのが残念です。

少しでも面白いと思っていただけたのなら、至極恐悦。

ある小説家の元に一通の手紙が届いた。封を開けると一〇枚程の便箋が入っていた。ご丁寧に右下にページ番号が振られている。丁度、新刊を出したばかりだった小説家は、お早い長文のファンレターに心躍らせていそいそと読み始めた。

— 1 —

拝啓。

一つだけ教えてください。困っているのです。

私は青森市に住むデパートの店員です。この春で二十五歳になります。春と言っても四月末の青森はまだ桜が咲いていませんが。「わたくし」だなんて主語でお淑やかなイメージを持たれるかもしれませんが、私は男です。生まれてこの方文章を書くときはどうしても『僕』ではなく『私』を主語に使いがちです。それは私が小中高の作文で国語の先生から「一人称は『私』にしてください」と叩きこまれたからにほかなりません。もし小説家の先生のお気を悪くなされましたら申し訳ありません。これはもう癖なのです。私の手ではどうにもなりません。

私は青森市で生まれ、弘前の大学を卒業して、そのまま青森市で就職しました。姉弟が上に一人いますが。歳が八歳とずいぶん離れています。なので、姉と家族として過ごした時間は短いです。家族よりも親戚の人という印象が強いです。姉は青森が田舎臭いと毛嫌いをしていたようで、大学も就職先も県外でした。だからでしょうか。私が青森市で就職すると言ったとき、両親はよかったよかったと大変喜びました。両親が喜んでくれるなら私も青森で就職したことに後悔はありません。

私があなただけを知ったのは、残念ながら小説ではなく、新聞、東奥日報のインタビュー記事です。小説家としての活躍と懐郷の思いに心打たれました。それをキッカケにあなたの小説が発売される度、書店へ足を運んで購入しています。一冊だけ、偶然にも『青春なんて一度だけでいい』の直筆サイン本を手に入れることができました。これは我が家の家宝です。私は国語があまり得意ではないのですが、あなたの作品はすらすらと読めてしまいます。そして読むたびに感動で胸がつぶれそうになります。難しい事を遠回しに描く文豪の作品とは大違いです。おそらく、あなたは稀代の作家のように国語の教科書に押しつけがましくも居座り、強制的に読まされることはないかもしれませんが、読んだ人の心に響く作品を書ける作家だと思います。

閑話休題（使ってみたかった）あなたに手紙を書こうと思ったのは、私の悩みを聞いてその正体を教えて欲しいからです。同郷出身のよしみとして一つ聞いてください。多分、私以外にも似た悩みを抱えている人が大勢いるかもしれません。もしかしたら、あなたにも似かよった悩みがあるかもしれません。お願いします、どうかここで便箋から顔を上げないでください。

私が初めてこの悩み、いや症状を記憶したのは、はっきりと覚えています。小学生の夏で、縁日の日でした。私は友達三人と一緒に屋台を見て回っていたのです。

夏の夕闇特有の橙色がかった景色と湿気交じりのアスファルトの臭いに私は胸を躍らせていました。これが私にとって初めての夜遊びでした。今の私にとってはお子様程度の夜遊びですが。友達も私と同じ心境だったのでしょうか。普段以上に大声で話していましたし、身振り手振りも大きかったです。縁日全体の空気が私たちを酔わせていたのでしょうか。

屋台を見て回り、みんなでフランクフルトにかぶりつきました。輪投げもしましたし、千本くじもしました。どれもハズレの駄菓子しかももらえませんでした。

そのときの私はいつもより金遣いが荒かったです。それは縁日のぬるい空気に飲まれたのもそうですが、懐も温かったのです。私は夏休みに親戚から貰ったお小遣いをここぞとばかりに財布に入れていたのです。今思えばちっぽけな額ですが。

私と友達は全部の屋台を周りましたが、まだこの空気に染まっていたくて特に用事もないのにブラブラと横一列になって歩いていました。みんな笑っています。「祭って楽しいな」「おう」「来年もこのメンバーで行こうぜ」「このメンツでな！」

そんな話をしていると、突然私の前に暗い影が落ちてきました。二人の男が私の前に立ちふさがっていたのです。

私より背の高い二人は明らかに年上でした。二人のうち一人は白いTシャツでゴツゴツした金のネックレスを巻いています。もう片方は金髪で真っ黒い大きなサングラスをかけています。「コイツでいいか？」「ま、金くらい持ってるっしょ」

すぐに察しました。豹柄を見てそれが豹だと分かるように、横柄な態度の彼らは不良でした。

いくら気持ちが高ぶった私でも身の毛がよだちました。ネックレスの男が私の前でゆらゆらと腰を揺らします。金属がジャラジャラと音を立てます。鳥肌が立ちました。サングラスの男は目の前でしゃがみました。サングラスの隙間から見える猛禽類のように血走った目と目が合いました。

「な、なんですか？」

「なあ、兄ちゃん。俺らお金が欲しいんだよね。分かるよね」

カツアゲでした。

私の肩がガクガクと震えました。カツアゲは映画やドラマといった創作物やニュースで見ただけでしたが、本物に遭遇したのは初めてでした。空想の範疇にあったはずのカツアゲが私の目の前に来たのです。驚かないわけがありません。

「俺たちさ、お金足りなくてさ、困ってるんだよね」

「は、はあ……そうなんですか」

「そうなんだよ～。だからさ、とりあえず、お兄ちゃんの財布出してくれるかな？」

私はとっさにズボンのポケットに右手を添えました。ズボンのポケットには財布があって財布の中には大切なお金が入っています。縁日で遊ぶためのお金です。カツアゲで盗られるためのお金じゃありません。

どうしよう。助けて。

私は、周りを見ました。そう、今日の私には友達が居るのです。私たち四人に対し、不良は二人です。数では勝っています。私一人では無理だとしても、友達がどうにかしてくれるかもしれません。

しかし、隣にいたはずの友達はいませんでした。

友達三人はいつのまにか私よりはるか先を歩いていました。私が不良に絡まれている間も彼らはただ真っすぐ歩き続けていたのでしょう。三人がちらりと振り返って私を見ました。

彼らの目には安堵が浮かんでいました。自分が不良に絡まれなかったことに心から喜んでいる目をしていたのです。

一人が瞬きをしました。まるで私が少しでも痛まらずに解放されることを祈っているかのようでした。彼らは私にかまうことなく歩いていきました。

私は自分に降りかかった不幸を悲しみ、私を見捨てた彼らを恨みました。

そのときです。初めてのジュークジュークが起きたのです。

得体のしれない何かが身体の中で沸き始めました。蟻の巣を棒でほじった瞬間に湧き出る蟻のようにバチバチとしていて、それが死体にわく蛆のようにうねうねと全身を這いずりまわりました。その気持ち悪さに吐き気がして、口の中が酸っぱくなりました。私は思わず地べたに座り込みました。

気がつくと、私は全力で走っていました。ライオンから逃げるシマウマのようです。無暗やたらに人混みをかき分けて走り回りました。やがてゼンマイ式のおもちゃのように息が切れたところで止まりました。足がビクビクと震えています。息が整ったころ、上着が泥で汚れているのを見て私は自分がカツアゲに遭っていたことを思い出しました。

おそろおそろ財布を取り出しました。お金は無事でした。減ってもいません。私はほっと胸をなでおろしました。

そのあと、私は友達を探し回ったのですが、見つかりませんでした。既に帰ってしまったようです。

友達を探しているとき、私は友達を恨んだことが遠い過去のように思えました。そもそもなぜ私を見捨てたくらいで恨む必要があったのでしょうか？ 現に不良からは逃げることでお金も無事です。

この日を境にジクジクという症状が出るようになりました。症状とは言っても、自分の体験やそのときの感情まるで遠い過去か味気ないフィクションに思えてしまうだけです。

－ 2. 5 (2の便箋の裏) －

そういえば、この日が俺のハッピーバースデーだったか。目を覚ましたら、目の前にカレーみたいな色の頭の男がいた。上から俺を見下している。幸先悪りい。なんだコイツ？

カレー男が手を差し出す。「お金ちょうだい（ハート）」

ふざけんじゃねえ。見下しといて俺にモノをせがむのか？ 頼み方があるだろ。思いっきりそいつの手に噛みついてやった。そしたら、カレー男が「痛でえ！」と叫んだ。面白い。

だけど、横から蹴りが跳んできた。吹っ飛ばされた俺は背中を踏みつけられた。「調子乗ってんと殺すぞ」と金の首輪をした男が言った。喋らずにいたら横から腹に蹴りが跳んできた。

冗談じゃねえ。俺が負けるだと？ が、相手は二人。しかも年上ときた。手も長けりゃ足も長い。力では当然負ける。

だから、財布から札を五枚出して地面にバラまいた。そしたら、カレー男も首輪男も餌に群がる水槽の魚みたいに、札に飛びついた。笑える。奴らが金に夢中になって俺に背を向けていた。一発殴ろうかと思った。が、背を向けている奴を襲うのはポリシーに反する。そのままにしてその場を後にした。

ぶらぶら縁日のきらきらを見ていたら、三人の少年が目の前に現れた。たしか、友達だったはずの奴らだ。

「よかった。無事だったんだね」と一人が言った。は、無事？ そんなわけねーだろボケ。見たらわかるだろ。

「あーあ。お前らの代わりに殴られたんだぞ？ 金も盗られた。どーすんだよ？ 慰謝料ぐらい用意できてんだろーなあ」

詳しい話は省くが、一人頭札二枚で合計六枚俺の手元に集まった。殴って脅しても一人は泣いてゴネたけど、鳩尾二発でおとなしくなった。

五枚は財布に入れた。「こいつは俺のもんだ」残った一枚は丁寧に丁寧に折り曲げて小さくして舌の上に乗けた。舌で転がしてじっくり味わってからゴクンと飲み込んだ。全然美味しくない。でも、腹はいっぱいになった。そして急に眠くなってきた。

俺は全力で駆けだした。走っていれば眠気も晴れると思ったが、そうでもないらしい。瞼がじわりじわりと落ちてくる。そして、意識がだんだんと遠のいていった。

これが俺のハッピーバースデーの日。コイツの中で俺が生まれた日だ。俺がどこから来たのかわからない。気がついたらコイツと同じ記憶を持って、コイツの身体を動かしていた。

しかし、困ったもんだ。

俺が目覚めた時には大体何かが起きている。今だってそうだ。よくわからんが先生に手紙を書いている。どうしてだろうな。なあ教えてくれよ、先生？

— 3 —

どうでしょうか？ 私が抱えるジクジクという症状を少しでも理解していただけたでしょうか？ ……失礼しました。当人である私ですらよく分からないのに、一つの話を読んだだけで理解できるわけがありませんよね。ただ、先生ならもう私の悩みの種を突き止めたかもしれません。

ジクジクはいつ起こるか分かりません。それに起こったとしても、気づくのはしばらく経って過去を振り返ったときです。冷めた思い出にはジクジクが潜んでいます。

次のジクジクが来たのは中学生のときです。しかし、わざわざ先生に宛てて書く内容でも

ないかもしれません。だって私にとってその思い出があんまりにもつまらないからです。

中学に進学したのを機に私は部活動を始めました。自分の意志ではなく、私の学校は必ず部活動に所属しなければならないという時代錯誤なルールがあったからです。私は卓球部に入りました。選んだ理由は簡単そうだったからです。卓球台といえば温泉旅館に置かれています。野球やサッカー、テニスと違って風呂上りにできるスポーツならば楽だと思ったのです。

しかし、入ってみると違いました。温泉でやる卓球は卓球ではありませんでした。あれは遊戯のピンポンでした。朝練から筋トレ、ランニングの内容はまるで野球部やバスケット部と大差がなかったのです。それもそのはずで私がいた中学校は県内で卓球の強豪校だったのです。小学校から卓球を続けてきた人ばかりでその人の親も卓球に詳しい人ばかりです。中学から卓球を始めた私には入部と同時に大きなビハインドがあったのです。そんな初心者の私も、桃栗三年柿八年とでもいえばいいでしょうか、三年生になる頃には代表と控えの間を行ったり来たりできるくらいにはなりました。

あの時はちょうど夏の大会に向けて代表を選ぶための試合をしていました。試合は代表候補の部員全員でシングルの総当たり戦です。勝利数が高い順に八人を選びます。代表候補は二十人居たので半分は勝つ必要がありました。

部の雰囲気はピリピリと緊張感を帯びていました。当然のことです。練習に練習を重ねてきた中で誰も補欠になりたい人なんていませんから。しかし、私には余裕がありました。前回の春大会で代表になっていたのです。ある程度自分が代表のなれる自信がありました。

そんな折、卓球部に教育実習生が来ました。

「風間といいます。これから二週間みんなと楽しく卓球ができて嬉しいです。歳の近い先輩なので気軽に相談してください」

風間さんは緊迫した空気をほぐすには十分な存在でした。若くて背が高くて快活で卓球の知識が豊富な彼はすぐにみんなと打ち解けました。彼の背丈は今の私よりは背が低いですが。

ですが、風間さんの登場を良く思わない部員もいました。

「代表決めで真剣な時期なのに水を差しやがって」

同い年の安藤は代表決めに本気でした。万年補欠だった彼にとって、今回が代表になれる最後の機会でした。万全の調子で試合に挑みたかった彼にとって、イレギュラーな風間さんは鬱陶しかったのでしょう。風間さんをずっと毛嫌いしてました。

「俺、この夏に賭けてるからな」

私と安藤は友達であり、苦楽を共にした戦友でした。もちろん彼の努力は分かります。だからこそ手加減はしません。

代表決めの総当たり戦が後半戦になったとき、私の勝率はあまりよくありませんでした。余裕ぶったツゲが回ったのでしょうか。残りの試合を一戦一戦大事にしなければいけない状況に立たされていました。反対に、安藤は順調に勝ちを重ねていました。総当たり表の彼の欄には白星が並んでいます。「なんか調子がいいんだよな」そう言う安藤に勝たないといけません。

しかし、安藤の調子の良さには秘密があったのです。

安藤との試合の前日、私は風間さんに呼び出されました。

「すまん。明日の試合。安藤君を勝たせてくれないか？」

開口一番にそう言うと風間さんは私に深々と頭を下げました。「頭を上げてください」私は意味が分かりませんでした。

「安藤君は一度も代表になったことがないんだ。君は春の大会で代表になっただろう？ なら今回は勝ちを譲ってもいいじゃないか。私は彼に卓球の楽しさを分かって欲しいんだ」

風間さんは終始笑顔でした。八百長という悪い事をしているのに悪気が無いのです。自分にそっけない態度を取る安藤を思っただけの事なのでしょう。そして、あわよくば自分になつて欲しいと期待しているのかもしれませんが。安藤の調子の良さにも理由がつかまりました。きっと、私だけでなく他の部員にも八百長を勧めていたのでしょう。私は頭が真っ白になりました。

安藤との試合当日、風間さんは無言で私の肩に手を置きました。約束を守れ、ということだと思います。私は頷きました。

「お互い遠慮は無しだぜ」安藤は何も知りません。私だって代表になるために必死に頑張ってきました。それなのにどうしてワザと負ける必要があるのでしょうか？ 私は悪くないのに。

ああ、そのときです。ジクジクが起こりました。全身が携帯電話みたいにバイブレーションしました。

試合は終わっていました。スコアを見ると私の惜敗でした。試合内容は覚えていませんが、負けた悔しさも八百長に加担した罪悪感もないです。試合が遠い昔のようです。その日、勝利数で安藤は代表入りが確定しました。おそらく安藤は喜んでいるでしょう。私に気を遣って表情には見せませんでした。

翌週、安藤は突然卓球部を辞めました。受験勉強に集中するためだそうです。受験生にはよくあることです。繰り上がりで私がレギュラーになりました。風間さんも実習中なのに学校に来な

くなりました安藤の引退にショックを受けたのでしょう。

－ 3. 5 (3の便箋の裏) －

たしかに、コイツの言う通りでこの話は特につまらねえ。けどよ、先生。面白い話かどうかなんて読んだやつが決めることだろ？

「お互い遠慮は無しだぜ」と安藤に挑発された俺はほくそ笑んで「じゃあ、俺は遠慮ありありでやるわ」と言ってやった。

安藤は最初のところは冗談だと思って首を傾げていた。が、一ゲーム目に俺がサーブを全て外し、レシーブも全部空振りしたら、やっと気づいたみたいでこっちを睨んで「真剣勝負だ。手を抜くんじゃねえ！」とキレた。

俺は別に安藤を怒らせるつもりはさらさらないし、怒られる道理もない。だから、言われた通りに二ゲーム目は本気で叩きのめした。んで、三ゲーム目は本気で手を抜いた。

「俺に勝てないからっておちくった試合をするなんてふざけんなよ」キレた安藤は俺を挑発してきた。どうしてだろう？ 勝っているのに怒る理由がどこにあるんだ？ オメエのためにわざわざ俺は手を抜いてあげてるんだぞ。分からないなら仕方がない。別に風間にネタばらしすんなんて言われてないし。

「はあ……そうやって一生吠えてろ。お前さあ、風間の言いつけで八百長されてんだよ。全員負けろって言われてるの」

「な、人が本気で試合してんだぞ。クソ野郎が！」

「いや、万年控えのお前が全勝してるんだぜ？ おかしいと思わない方もおかしいだろ。現実みろよ」

「なっ……」

「お前が代表になって、風間は喜ぶ。お前も喜べよ、ほら」

代表になるために頑張ってきたとか言ってたわりに急に代表入りが目の前に来たら怖気好きやがって。お前こそふざけてんじゃねえのか？ ビビってんじゃねえぞ。

四ゲーム目は途中までは本気を出して安藤をコテンパンにして、後半は全部ミスしてやった。結果として安藤は三ゲーム先取で俺に勝った。

試合後、勝ち数で安藤は代表入りが決まった。が、安藤は不完全燃焼のゴミみたいな顔をしていた。反対に風間は白い歯をむき出しにして満足そうに笑っていた。こいつ、サイコパスかよ。あー俺が言えたもんじゃないか（笑い）

そうか。結局、安藤は部活辞めたのか。ガハハ。代表になるって自覚が足りなかったんじゃないか？ 風間はどっか消えたのか？ なんで消えたのか知らねーけどよ。俺に命令するからだよ。罰が当たったんだよ。ざまあみやがれ。

てかさ、先生。もしかしてコイツって俺のこと病気扱いにしてんのかな。人のことをバイキンって呼ばないでくださいってことぐらい小学校で習ってきたはずだろうに。

— 4 —

私もジुकジुकという症状について、あれこれと原因を考えたことがあります。私が導き出したのは、極度の緊張や集中によって時間が相対的に一瞬で過ぎ去ったため、そのときの感情や記憶が霞んでしまった、という仮説です。まあ、アインシュタインの相対性理論を聞けば誰でも思いつく稚拙なものですが。しかし、この仮説には穴がありました。緊張や集中しているときに必ずジुकジुकが起こるわけではないのです。受験や就職、部活の大会など、緊張する場面をあり余るほど経験してきました。仮説が正しいなら、全部でジुकジुकが起こってもいいものです。が、そうなりませんでした。そうだ。初恋で私が告白したときもジुकジुकは起きませんでしたね。

では、次のジुकジुकが起こった経験を書きます。

私は高校生に上がっても卓球を続けていました。しかし入学当初は入部する気はさらさらありませんでした。というのも、宿題が多かったのです。私が通っていた高校は青森市でも有名な進学校で、先生方は難関校への進学率を高めるためにあれこれと知恵を絞っていたのです。その結果が大量の予習と復習課題だとは。明らかに地方の進学校というところでしょうか。

部活に入る余裕なんてありませんでした。しかし、部活紹介のとき、私は見てしまったのです。壇上に卓球部員が並んだ時、そこに居たのです。ステレオタイプな比喻かもしれませんが、砂漠に一輪の華が咲いていたのです。一目惚れでした。神の導きだと私はすぐに卓球部に入りました。彼女の容姿は語彙力に欠ける私に表現できません。先生が思い浮かべる海を駆け回るCMに出ている女子高生か初恋の相手で補完してください。名前は個人情報もあるのでZさんとしましょう。

入部した私は兎にも角にもZさんに接近しました。彼女は私の一つ上の先輩です。先輩後輩、

そして男女の壁を壊すには積極的に行動するしかなかったのです。彼女の好きなものからハマっているドラマ、本、アーティストまで調べました。そして、私も同じドラマを見て、小説を読み、曲を聞きました。こうしてあたかも自分と彼女は共通の趣味を持っていて話が合うよう仕上げました。ラブに洗脳された私は愛と恋を踏み間違えていることにも気づかずにZさんを追いかけていたのです。

周りからも散々冷やかされました。あんまりにも私がZさんにお熱だったせいですが。しかし、それも私の恋を応援する渦になっていました。私の恋がサーカスごとき見世物と化していても別に構いませんでした。彼女と付き合えればそれだけでよかったです。だから、告白の瞬間も陰から除かれていました。本当に断られずに済んでよかったです。

Zさんと付き合い始めた私は有頂天でした。大陸一つ手に入ったような気分でした。彼女に私の好きな理由を聞くと「あなたがわたしを好いてくれるから」と答えました。当時の私は眠る前にその瞬間をリフレインさせては枕に顔をうずめていました。今となっては恥ずかしさに有り余ります。それに私は分かっていませんでした。あの言葉を裏返すと、私が彼女を好かなくなったら彼女も私を好きじゃなくなる、って意味を。

Zさんと一緒に居る時間は格別でした。彼女が居るおかげで最初はやる気が微塵もなかった卓球はとて楽しくなりましたし、デートをして初めて手を繋いだときは時間が止まって欲しいと願いました。人を好きになるのはこんなに甘く幸せなことなんだと実感しました。

(ああ、当時を思い出して背中がムズムズします。我慢です)

私たちはよく浜辺に行きました。彼女はひとしきり波と戯れると、座ってそれを見ている私の隣に座ります。肩が触れ合って、抱きしめたい衝動がビリリとお腹にきます。そんな私の膝に彼女は頭を置きました。見上げる彼女とそれを見る私。彼女が目を閉じて「いいよ」と言いました。初めてのキスでした。

あ那时的私是一生彼女と居続けると考えていました。

「わたしと一緒に部活辞めてよ」

突然の事でした。Zさんが部活の女子同士で練習メニュー決めて揉めていたのは知っていました。何度も相談に乗りましたし、円満に解決しました。ですが、辞めるなんて急な話です。「部活にわたしを必要としてくれる人は居ないみたいなの。ねえ、二人で辞めちゃおうよ。いいでしょう？」

そのとき、私は卓球部に居場所を見つけていました。この場を彼女のために失うというのは僅かに抵抗がありました。

「無理だよ。団体戦のメンバーにも入ってるんだ。急すぎる」

私が訳を話してやんわり断ると逆にそれが彼女の虫の居所を更に悪くしたようで八重歯をむき出しにして激昂しました。

「何それ！ わたしを好きじゃないの？」「それとこれとは」「好きなら、好きな人のため自分を厭わずに何でもしてあげるのが当然でしょ？ 今困っているの。でも、あなたが一緒ならどこにいたって、どうなっても平気なの。彼女が言ってるんだよ。分からないわけじゃないよね？」「でもみんなにどう説明すればいいか……」「へえ、わたしよりみんな……ね。ふうん。じゃあわたしとみんなだったらどっちを選ぶの？」「Zさん、落ち着いてよ。冷静になって」「いつだって冷静よ。あなたがあんな低能な人たちと一緒に居たいって言うならそうすればいいよ。でも、あなたのこと嫌いになるから。絶対一生恨むから。……はあ、また頭痛たくなってきた。困らせないでよ」矢継ぎ早の会話の応酬。ああ、やっぱりジユクジユクが来ました。ぐつぐつと何かが沸き立ってきました。

翌日から彼女は部活に顔を出さなくなりました。一方私は変わらず部活を続けました。後悔はありません。愛だの恋だのに燃えていたはずの私はすっかり鎮火して冷めきっていました。

— 4. 5 (4の便箋の裏) —

毎度のことだが、俺が目覚めたときに限って誰かに睨まれている。おいおい生まれた時ぐらい祝ってくれや。寝起きの俺は機嫌が悪い。ふざけんなって毎回思ってる。今回は目の前の女がぎゃあぎゃああとヒステリックに喚いていた。目覚まし時計にしたらバカ売れしそうな金切声だ。否が応でも起きちまう。

目覚まし時計を止めるように俺はそいつの頬をパン、と一発ビンタした。乾いた音がした。心地が良い。さらに喚くもんだから「静かにしてください」パンッ「静かにしてください」パンッ「静かにしてください」パンッ。……あ、鳴り止んでた。

「はいはい。……静かになるまで五分もかかりました」

女は目に涙を溢れさせていた。どうやらコレはコイツの女だったらしい。……ホントにコイツの事が好きだったのかなあ？

俺は女に顔を近づけると女はビクッと体を震わせた。身体に聞くのが手っ取り早い。保健体育の教科書に倣って女の胸に片手を当てて揉んでみた。異常ナシ。女の顎に手をかけてクイっとこっちに唇を向けさせた。そこに俺の唇を合わせる。異常ナシ。女の鼻をつまんでやって口を開かせた。その隙間に舌を深く捻じ込ませる。女の喘いだ声がした。異常ナシ。あれえ？ 俺の操縦桿逝かれちまったか？ 身体は正直なんだよなあ。

「あんた、絶対許さないから。無理矢理、キスなんか、して、暴行、レイプ、一生恨むから。死んでも呪ってやるから」

今でもはっきり覚えている。一生？ 絶対？ 呪う？ 俺の大嫌いな言葉だ。できっこねえくせに言うんじゃないよ。

「別にどうでもいい。せいぜい頑張って一生恨んでくれや」

「あんた、わたしの事好きじゃないの？ 好きな人がこんなに苦しんで孤独なんだよ。助けてよ」

「俺の息子は音沙汰無し。あんたの事、好きじゃないってさ」

「はああ？ もういい。わたし、死にたい。消えちゃいたい」

流石にキレた。そう思った時には女の胸倉を掴んでいた。

「てめえ！ 死んでも死にてえとか消えてえとか言うんじゃないぞ。ふざけんな。失せろ」

もうダメだ。メンヘラと話していても埒が開かない。おんなじ話ばかり。コイツがどうなろうと俺には一切関係ない。逆に俺が毒気に当てられちまう。俺は女の前から去った。

外に出ると、夕暮れの空は青と赤と黒を混ぜた色をしていた。だんだん黒が多くなる。だんだんと睡魔が襲ってくる。

俺は自由に起きることもできなければ、眠ることもできない。生死のボールは常にこの体の持ち主が握っている。俺が主導権を握れるのは僅かな時間だけだ。思い出のほとんどは俺のものじゃない、記憶を遡ると映画を見ている気分になる。

自販機が目の前にあったから、一番高い値段のエナジードリンクを買った。嫌な役回りばかりやっているんだ。これくらいご褒美があってもいいだろう。なあ、先生？

— 5 —

ここまでお付き合いいただき本当にありがとうございます。筆が乗って駄文をつらつらと書いてしまいました。先生のお目を汚していない事をひたすら祈るばかりです。ひょっとしたら流し読みをされていて目が全く汚れていないかもしれませんが。

さて、いくつかジクジクが起こった時のお話をしました。どうでしょうか？ なにか原因のアテがつかえましたか？

それとも、先生はこう考えているかもしれませんね。どうして今になってジユクジユクが起こる原因が知りたいんだ、と。確かに今更原因を知ったところでどうなんだというものです。黒子だって生まれてからずっと一緒ならそれなりの愛着が沸くものです。だから私も一〇年以上付き合ってきたジユクジユクには不思議と慣れていました。思い出が下世話な物語に成り下がってもそれは過去の話。今を生きる私に関係ないのです。

しかし、現在私は困っているのです。

ジユクジユクが止まらないのです。

かれこれ一週間ほどジユクジユクに悩まされています。たしか先週の会社の飲み会の後からです。しゃっくりなら百回を超えると死ぬなんて言われますが、おそらくジユクジユクはその回数を越えました。まあ、私は死んでいませんが。

寝ても覚めてもジユクジユクと体の中で何かが蠢き、側頭骨が脈を打ち、全身がぼうっと火照ります。寝不足のように気だるいです。度重なるジユクジユクに体が疲れているのです。

何時でもジユクジユクは起こります。仕事中だろうとです。そうなるともうやることなすことに集中できません。全てにやる気が起こらず、仕事にも手がつきません。遂には三日前からデパートを休んでしまう始末です。病院にも行こうと考えるのですが、それも行く気が無くなってしまいます。まあ、言ったところでどこの専門科に行けばいいかわかりませんが。

はっきり言ってジユクジユクを舐めていました。こうも度々に起きてしまうと生活に支障が出てしまいます。満足に食事をすることもできません。私がここまで筆を折らずに手紙を書くことができたのは奇跡といってもいいくらいです。何か私に悪霊でも憑いてしまったのでしょうか。不安で仕方ありません。今まではこんなことがなかったのですから。

両親も衰弱した私を心配しています。これ以上二人に心配をかけたくはありません。

先生、どうかジユクジユクの原因が分かりましたら是非とも私にご一報ください。メールでも電話でも構いません。先生だけが今の私の頼りなのです。

最後に。こんな状態ですから先生の新刊は残念ながらまだ読むことができていません。本来ならば、手紙に新刊の感想を書くのが常だとは思いますが。すみません。

「んあ？」

気づくと、俺は見知らぬ部屋にいた。汗が額から目元に垂れた。拭おうと手を上げたら、俺はギリギリと三徳包丁をカ一杯握りしめていた。べったりと刃先が赤色で染められている。重低音がした。驚いた俺は思わず包丁を落としてしまった。

床にはカバンやら紙が乱雑に散らばっていた。見ようによっては争った形跡だ。そして、一緒に男も倒れていた。仰向けになった男の服は破れている。血が滲んでいた。

「おいおい」俺は血で濡れないように避けた。が、もう俺は血で濡れていた。で、察した。この男が俺に殺されたんだと。

散らばった紙を拾い上げると、旅行のパンフレットだった。新幹線のチケットがクリップでつけられている。博多行ののぞみ59号だった。まだ使われていない。

男を見ると目が開いたままだった。ゆっくり休んで欲しい。目を閉じてやった。

部屋を出て鍵を閉めた。最近は何事だから戸締りは忘れてはならない。この部屋に入られては困る。階段を降りるとき足元がふらついてわかった。コイツ酔ってるな。

ぶらぶらと歩くと川が見えてきた。黒々した水面は波が立つ度に輝いた。誰もいない。時折バイクのエンジン音がする。

鍵と包丁を赤くなった服で包んで川へと放り投げた。ぽちゃんと、良い音がした。

ああ、コイツやっちゃったんだな。

(2)

なんだか煙臭くて目を覚ました。目の前は真っ白で本当に煙が立ち込めていた。頭がガンガンと痛んで目も痛くなって涙が溢れてきた。本能で分かった。これはヤバイ。

慌てて俺は外に出た。咳き込みながら全身で呼吸をして肺に新鮮な空気を送る。どうやら俺は車の中に居たようだ。周りを見ると木々が生い茂っている。どこにいるんだよ。もくもくと煙を吐く車を見て苦笑いが出た。

「なんだ？ これッ！」

車のドアを全部開けて煙を追い出した。車中を見てみると練炭が焚かれていた。助手席には空

の錠剤瓶がある。ジフェンヒドラミン塩酸塩と書かれていた。薬には詳しくないからそれが何かは分からない。でもこれだけはわかる。

コイツ死のうとしていたらしい。

案の定、封筒もあって、中身には「とんでもないことをしてしまった」とか「死んでお詫びしたい」とか遺書のテンプレっぽいものが書かれていた。ふざけんな。練炭に遺書をくべてやった。練炭やら瓶を捨てて車を走らせた。

どうやらコイツは死にたがっているらしい。俺は記憶を遡ってみる。がしかし、いつ練炭を買ったのかも、どうしてこんな山奥に来たのかも全然覚えていなかった。こんなの初めてだ。いつもならコイツの記憶は隈なく思い出すことができた。が、それができない。身体が別の何かに動かされているようだ。

(3)

瞼を開けると、自室の本棚に目がいった。見える本の位置で視線がいつもより高いことに気づいた。また俺は目覚めてしまったらしい。

両手を見ると縄が握られていた。俺はその縄でできた輪に頭が通されていた。柱に縄の先がくくり付けられている。

今度は首つりかよ。

頭は輪から外して台の上から降りた。試しに輪っかに腕を通して縄を引っ張ってみた。ぎゅっと強く締め付けられる。これ、絶対に解けない結び方じゃん。絞め殺すには十分だな。

机の上に白い封筒が置かれていた。すぐに遺書だと分かった。見ただけで嫌な気分になる。破り捨ててやろうと封筒を手にとると、裏に「ジャマしないで」と汚い字で書かれていた。

俺はコイツにとって邪魔なのか？ もちろん、俺には縄を準備した記憶を思い出すことができない。コイツの意図が分からない。

たしかに、この身体はコイツのものである。でも、俺の身体でもある。コイツが死にたがってしようと、それで俺が死んでいいわけがない。俺にも生きる権利はあるはずだ。

(4)

そして今日。俺の目の前にはコイツが先生宛に書いた手紙があった。ついでにまた空になった錠剤瓶が置かれている。また死のうとしたらしい。いい加減にして欲しい。

置かれた手紙を読んでもみると、自ら名付けたジクジクとかいう自分の記憶が自分のものに思えなくなるという症状について書かれていた。まあ、それってこれまでに俺が活躍したエピソードってことになる。

でもって、最近はそのジクジクが止まらなくて先生に相談しているようだ。

手紙を読む限り、コイツは自分が人を殺してしまったことを忘れていた。それどころか、自分が何度も自殺を凶っていることも知らないらしい。

ここまで先生にはコイツの手紙に合わせて俺の思い出というには安い経験を読んでもらった。

どうか先生だけには俺の生きた証を覚えていて欲しい。流し読みだって良い。コイツの身体に間借りする俺みたいな人間がどっかに居たってことを知って欲しい。

加えて、先生にほんの少しおせっかいな気持ちがあるなら、俺のお願いも聞いて欲しい。

きっと、コイツは再び自殺を繰り返すだろう。コイツはそのことを覚えていない。まるでコイツが俺を覚えていないように。俺の勝手な予想だが、俺が生まれたように、また違う人格がコイツの中で生まれたんだろう。ソイツがせっせと自殺を繰り返しているんだ。罪悪感で生まれたのかどうかかわからないが俺は死んでまっさらに償える罪なんて無いと思う。

先生には俺を助けて欲しい。コイツが死なないようにしてくれ。先生だってファンレターを送ってくれた人が後日死んでしまったら縁起が悪いだろう。

もちろん、俺もどうにかしようと思えば手を尽くす。が、アイツもどうにかして死んでやろうと思えば手を使ってくるだろう。そうなるとうちにもならないときもあるだろう。

机に太宰治の本が置かれてあった。ウィキで調べたら、こいつは何度も自殺を繰り返して最後は入水で死んだらしい。

川に飛び込まれて流されれば流石の俺も死んでしまうだろう。全身に重りを括りつけられたら這いあがることもできない。俺は土座衛門になってたくさん水を飲んで腹を膨らませて死にたくない。俺は細く長く生きたいとは思わない。が、自らで命を投げ出すような逝き方はしたくない。

先生。

最後に訊きたいことがある。

俺はなんのために生まれてきたんだ。

俺はカゴの鳥か？ 時々外に出ることしか許されないのか。

ある小説家は手紙を読み終わると、窓を開けて青森県の方角を見つめた。本州最北端だから北で合っているだろう。

それから、はがきを買ってファンレターの返事を書いた。

そして、ポストへ投函を済ませるとその足で近くの警察署へと向かった。信じてもらえるかどうか分からないが、眉唾な話を一つしたところで、多くのフィクションを書き連ねた小説家にとってそれは砂上の一粒にしか過ぎない。

はがきに書かれたメッセージ

『ファンレターありがとう。まだ僕の新刊を読み終わっていないようだね。読み終わったら是非ともご一報ください。』

理性が本能を律するものならば、本能もまた理性を律するものです。どちらも生きる上で必要なものです。理性失くして本能は無く、本能無くして理性は在りません』

どうも、今畑鏡です。本作は同郷出身の作家の胸を借りました。はい、巨人の肩の上に立つ、という言葉にあるとおりのことをしました。

今回はこの文芸部で読んでもらいたい小説を書きたいという一心で書きました。限られたページ数と行数でできることってなんだろうと考えたらこんな感じに仕上がっていました。

芥川も太宰もですが、彼らは古典や説話のオマージュを得意としていました。現代でやったら二番煎じだとか、新鮮さが足りないとか叩かれそうですが、面白い話はやっぱり面白いのでオマージュはやってなんぼのものだと思います。

「巨人の肩の上に立つ＝Stand on the shoulders of giants」

この言葉はグーグルスカラーのトップページにも書いてあります。意味は、先人の積み重ねた発見に基づいて新しいものを発見する、です。

人類の文化の進歩は先人の足跡があつてこそだと思えます。

何が言いたいかって言うと、小説を書く時も論文を書く時も先人の文献をちゃんと調査して新しいモノを作り上げなきゃなあ、ということです。

西奔東走

松本惇暉

日本から遠く離れた南の島で乗った電車が

少年時代に私の街を走っていたものそのまま

緑と橙の箱。

アロハシャツの翁は渋く錆びた声で私へ

ベリーグッド日本車ワンダフル

と感傷を運んだ。

いてもたってもいられず

西ゆきの切符を破り東ゆきの切符を買う。

ひきかえすために降りた小さな停車場

草原の駅で午睡を貪りふるさとを妄想し

ひたすらかぐわしい鉄と汗の匂いを嗅ぐことを願う。

上野駅のプラットフォームに佇み車輪の軋みに耳を澄ますのだ。

むこうからふるさとがやってくるのだ。

とにかく夜行列車を待つのである。

案山子 2018夏号

<http://p.booklog.jp/book/123100>

著者：新潟大学文芸部

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/sindaibungei/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/123100>

電子書籍プラットフォーム：パプー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社トゥ・ディファクト